集選作名的卷代

篇谷通

谷選集

透谷

代表的名作選集（四）

■代表的名作選集

第四編

透谷選集

北村透谷遺稿

編者
島村抱月
生田長江
相馬御風
中澤臨川

解題

透谷、名は門太郎、明治元年相模國小田原に生れた。政治家たらんとして早稲田専門學校の政治科に入り、後更に商業に志し、忽ち止めて宗教に入つたが、本來の性情は遂に文學に就かしめた。明治二十五年、同志と共に雜誌『文學界』を發刊し、浪漫主義、主情主義の運動を以て當時の文壇に新聲を鼓吹した。其の同志の人々には、星野天知、戸川秋骨、島崎藤村、平田禿木、馬場孤蝶等があつた。彼が公にした評論、詩、戯曲等は何れも未成品ではあるが、其の天才的閃光は隨處に閃めいてゐる。彼は天才の特色として天性頗る主義的で、胸には消し難い情熱を貯へてゐた。而してその我を發展せしむる上に於て不休不息の態度を執り、人と戰ひ世と戰ひあらゆる形式と戰つたが、遂に戰ひ敗れて自ら其身を殺して斃れた。實に明治二十七年五月である。彼の文學的生活は僅か數年に過ぎぬが、日本に於ける狂瀾勃起運動の中心として、近代主義の第一人者として、其名と其の事業と、永久に朽つる事はなからう。今其の集中より、彼の面目を發揮したものを選んで本書を編んだ。以て此の薄倖の天才の面影を、永く、而して普く、世に傳ふることを得よう。

編者識

目次

北村透谷の短き一生……島崎藤村……一
富嶽の詩神を思ふ……（明治二十六年一月）……一六
一夕観……（同年十一月）……二〇
哀詞序……（同年九月）……二三
山庵雑記……（同年二月）……二六
鬼心非鬼心……（二十五年十一月）……三〇
秋窓雑記……（同年十月）……三六
星夜……（同年七月）……四〇
我牢獄……（同年六月）……四七
蓮華草……（同年五月）……五四
蝶のゆくへ……（二十六年九月）……五六
蠶蝶のわかれ……（同年四月）……五八
みゝずのうた……（舊稿）……五七
和歌四首……（舊稿）……六一
萬物の聲と詩人……（二十六年十月）……六三
國民と思想……（同年七月）……六九
内部生命論……（同年五月）……八二
快樂と實月……（同年四月）……九四
精神の自由……（同年四月）……一〇六
變遷の時代……（同年五月）……一一七
政治上の變遷……（同年四月）……一二四
厭世詩家と女性……（二十五年二月）……一二八
人生に相渉るとは何の謂ぞ……（二十六年二月）……一三九

北村透谷の短き一生

島崎藤村

北村透谷君の事に就ては、これまでに折がある毎に少しづゝ自分の意見を發表してある
から、私の見た北村君といふものゝ大體の輪郭は、已に世に紹介した積りである。北村君
の生涯の中の晩年の面影だとか、北村君の開からうとした途だとか、さういふ風のものに就
ては私は已にいくらか發表してある。明治年代も終りを告げて、回顧の情が人々の心の中
に浮んで來た時に、どういふ人の仕事を擧げるかといふ問に對しては、いつでも私は北村
君を忘れられない人の一人に擧げて置いた。北村君の一番終ひの仕事は、民友社から頼ま
れて書いたエマルソンの評傳であつた。それは十二文豪の一篇として書いたものだが、す
つかり書き終らなかつたもので、丁度病中に細君が私の處へその原稿を持つて來て、これ
を纏めて呉れないかといふ話があつて、その斷片的な草稿を文字の足りない處を書き足し
て、一冊の本に纏めたといふ緣故もあり、それから同君が亡くなつた後で書いたものなど
が散つて了ふのが惜しいと思つて、種々の雜誌などから集めて透谷集といふものに作つた

のも自分であつた。元々私はさう長く北村君を知つてゐた譯では無い。付き合つて見たのは晩年の三年間位ゐに過ぎない。しかし、その私が北村君と短い知合になつた間は、私に取つては何か一生忘れられないものでもあり、同君の死んだ後でも、書いた反古だの、日記だの、種々書き殘したものを見る機會もあつて、長い年月の間私は北村君といふものをスタヂイして居た形である。『春』の中に、多少北村君の面影を傳へようと思つたが、それも見たり聞いたりした事をその儘漫然と叙述したといふやうなものでは無くて、つまり私がスタヂイした北村君を寫したものである。北村君のやうに進んで行つた人の生涯は、實に妙なもので、掘つても掘つても盡きずに、後から後から種々なものが出て來るやうに思はれる。これは北村君を知つてゐたからと云つて、無暗に友達を賞めようといふ積りでは無い。成程過ぎ去つた歴史上には種々優れた人もあるが、同時代にゐた、しつかりした友達の方に、却つて教へられた事は多いのである。

北村君が亡くなつた後で、京橋銀屋町の煙草屋の二階（北村君の阿母さんは煙草店を出して居られた）へ上つて、殘して置いて行つたものを調べた事があつた。その時細君が取り出して來たいくつかの葛籠を開けたら、種々反古やら、書き掛けたものやらが、部屋中一杯になるほど出て來た。北村君はどんな破つて了ひたいやうなものでも、自分の書いた

ものは、皆大切に、細君に仕舞はせて置いた。そんな一寸した事にも北村君の人となりといふものは出てゐると思ふ。その中には小説の書き掛けがあつたり、種々な劇詩の計畫を書いたものがあつたり、その題目などは二度目に版にした透谷全集の端に序文の形で書きつけて置いたが、大部分はまあ、遺稿として發表する事を見合はした方が可いと思つた位ゐで、戯曲の斷片位ゐしか、殘つた草稿としては世に出さなかつた。併しその古い反古を見ると、北村君の歩いて行つた途の跡が附いてゐるやうな氣がした。例を擧げて見ると『蓬萊曲』を書く以前に『楚囚詩』といふものを書いてゐる。あれなぞをかう比べて見ると、北村君の行き方は、一度ある題目を提へると容易にそれを放擲して了ふといふ質の人では無い、何度も何度も心の中で繰り返されて、それが筆に上る度に、段々作物の味が深くなつてゆくといふ感じがする。『富嶽の詩神を懷ふ』といふ一篇なぞは、矢張り、『蓬萊曲』の後に書いたものだが、よく讀んで見ると、作と作との相連絡してゐる處が解るやうに思ふ。一體北村君の書いたものは、死ぬ三四年前あたりから、急に光つて來たやうな處があつて、一呼吸にあゝいふ處へ躍り入つたやうな風に見えたが、その殘して置いた反古なぞを見ると、透谷集の中にある面白い深味のあるものが、皆ずつと以前の幼稚なものから、出發して來てゐることが解つた。その反古は今ではもうどうなつたか解らないが、でもから葉に

葉を重ねて、同じ力で貫いて行つたといふやうな處が、あの人の面白味のあつた處だ。

北村君の文學生活は種々な試みを遣つて見た、準備時代から始まつたものではあるが、眞個に自分を出して來るやうになつたのは、『蓬萊曲』を公けにした頃からであらう。當時岩本善治氏の主宰してゐた女學雜誌は、婦人雜誌ではあつたが、然し文學宗教其他種々の方面に渉つて、德富蘇峰氏の國民の友と相對した、一つの大きな勢力であつた。北村君を先づ文壇に紹介したのは、この岩本善治氏であつた。『厭世詩家と女性』その他のものを、北村君が發表し始めたのは女學雜誌であつたし、あゝいふ樣式を取つて、自分を現はさうとしたといふ事も、つまりこの女學雜誌といふ舞臺があつたからだ。殊に雜誌が雜誌だつたから、婦人に讀ませるといふことを中心にして、題目を擇んだものもあつた。處女の純潔を論じたり、その他戀愛觀なぞを書き現はしたものにも、一面婦人のために書いてゐるやうな趣きのあるのはその故である。その頃女學雜誌には星野天知君もかなり深く關係してゐた。岩本氏は淸敎徒的の見地から、文學を考へてゐるやうな人だつたから、純文藝に向はうとするものは、意見の合はないやうな處が出來て來た。星野君の家は日本橋本町四丁目の角にあつた砂糖問屋で、男三郎君といふシツカリした弟があり、おゆうさんといふ妹もあり兄弟擧つて文學に趣味を持つといふ人達だつたから、その星野君が女學雜誌から

離れて、一つ吾々の手で遣らうではないかといふ相談を持ち出して、それに平田禿木君が主なる相談對手になり、北村君と私とも雜誌に關係する事になつた。そんな風にして出來上つたのが、文學界の始まりだつた。平田君の家は日本橋伊勢町にあつて、星野君の家とも近く、男三郎君とは一緒に高等學校へ通つて居られるといふ時代だつた。吾々はよく、あの砂糖屋の奥にあつた、茶室風の部屋に集つて、其處で一緒に茶を呑みながら、雜誌を編輯したり、それから文學を談じたりして時の經つのを忘れる位ゐであつた。戸川秋骨君、馬場孤蝶君は、私が明治學院時代の友達といふ關係から、自然と文學界の仲間入をされるやうになつた。こんな風にして、皆親しく往來するやうになつたのだが、兎に角文學界といふものを起さうとしたのは、星野君兄弟と、平田禿木君とで、殊に男三郎君は、殆んど自分では表立つて何も發表しなかつたが、種々な面倒臭い雜用なにかを一人で引き受けて、隨分あの雜誌のためには蔭になつて力を盡した人であつた。文學界の先づ受けた非難は、不健全といふ事であつた。それに對しても吾々若いものは皆激しい意氣込を持つてゐたから、北村君などは「どうも世間の奴等は不健全で可かん。」とあべこべに健全を以て任ずる人達を、罵るほどの意氣で立つてゐた。北村君が最初の自殺を企てる前、病ひにある床の上に震へながらも、斯ういふ豪語を放つてゐたといふ事は、如何にも心のひるまなかつた

證據であると思ふ。文學界へ書くやうになつてからの北村君は、殆んど若い戰士の姿で、『人生に相渉るとは何ぞや』とか『頑執盲排の弊を論ず』とか、激越な調子の文章が續々出て來て、或る號なぞは殆んど一人で、雜誌の半分を埋めた事もあつた。明治年代の文學を回顧すると民友社といふものは、大きな貢獻をした事は事實であるし、蘆花、獨歩、湖處子の諸君の仕事も、民友社といふ事からは離しては考へられない。遠くから望むと一群の林のやうな觀をなしてゐたが、民友社にも種々異つた意見を持つた人が混つてゐて、透谷君の激しい論戰は主に民友社の德富蘇峰氏、山路愛山氏などを對手取つたものであつた。でも愛山氏などは、殆んど正反對に立つた論敵ではあつたが、一面北村君とは仲の宜い友達でもあつた。それから喧嘩をして却つて對手に知られた形で、北村君は國民の友や、國民新聞などにも寄稿するやうになつた。その中で、『他界に對する觀念』は、北村君の宗教的な、考へ深い氣質をよく現はしたものである。それから國民の友の附錄に、『宿魂鏡』といふ小說を寄稿した事があつたが、あれは自分で非常に不出來だつたと云つて、透谷の透字を桃といふ字に換へて、公けにしようかと私に話した位ゐであつた。あの作は透谷君の得意の作では無論無かつたと思ふが、でも私にはその病的な方面が窺はれるかと思ふ。文學界に關係される頃から、透谷君は半ば病める人であつたと、後になつて氣が附いたが、

皆と一緒になつて集つて話してゐても、直ぐに身體を横にしたり、何か身を支へるものが欲しいといふやうな樣子をしてゐた。斯ういふ身體だつたから、病的な人間の事にも考へ及んでゐたらしく、その事は內田魯庵氏の譯された、『罪と罰』の評なぞにも現はれてゐると思ふ。透谷君の晩年を慰めた一人の女の友達があつたが、病床にゐる時に、それとなくこの人に書いて宛てた慰めの言葉は、確か『山庵雜記』の中に出てゐる筈だ。あれは極く短いものだが、兎に角病人に對する深い理解や、同情が籠つてゐると思ふ。この女の友達が死んだ時に、透谷君が『哀詞』といふものを書いた。あゝいふものを書く時分から、透谷君自身のライフも、次第に磨り減らされて行つたやうに見える。

透谷君がよく引き越して歩いた事は、已に私は話した事があるから、知つてゐる讀者もあるであらうと思ふが、一時高輪の東海寺の境內を借りて住んでゐた事があつて、彼處で娘のふさ子さんが生れた。彼處に一人食客がゐた事は、戶川君も一度書いた事があるが、何を爲さうとするでもないやうな、心細い人を世話して、一緒に飯を分けて食ふといふやうな處が北村君にはあつた。或る日、私が訪ねて行くと、結婚の問題で考へに惱んで、北村君の處へ相談に來てゐる婦人があつた。私共三人は、墓場の石に腰掛けて、話した事ぞを覺えてゐる。北村君の書いたものは、論文と云つても皆な自分の生活に交涉の深い、

一種の創作であつた。殊にサイコロジカルな處が、外の人達と違つた特色であると思ふ。『鬼心非鬼心』といふ文章は、寺の借住居の附近にあつた事を、主にして書いたものだ。それから、麻布霞町の方へ移つて、山羊（やぎ）なぞを飼つて見た事もあつたが、これには餘程詩人風の空想が混つてゐた。星野天知君は、その後鎌倉の方へ引き籠まれた北村君から、その山羊を引き取つた事がある。そして『どうも北村君には一杯欺められました。子供をお腹（なか）に持つてゐるといふから、その積りで引き取つたら、子供があるんではなかつた。』と私に話して、笑つた事があつた。北村君は又芝公園へ移つたが、其處は紅葉館の裏手に方る處（ところ）で、土地が高く樹木が鬱蒼とした具合が、北村君の性質によく協つたといふ事は、書いたものゝ中にも出てゐる。あの芝公園の家は餘程氣に入つたものと見えて、彼處で書いたものゝ中には、懐しみの多いものが澤山出來た。『星夜』といふものを書いたのもあの林の中だ。短い瞑想の記錄のやうなもので、彼處で書いたものには、私の好きなものが澤山ある。意地の惡い鳥が來て高い楢の上で啼くのを聞いて、皮肉屋といふものが、文壇にばかりゐると思つたら、こんな處にもゐた、といふやうな事を書きつけた事があつたが、斯ういふ輕い氣分を持つ事が出來たほど、彼處の住居は樂しかつたのであらうと思ふ。彼處から奥州の方へ旅をして、歸つて來て、『松島にて芭蕉を懐ふ』といふ文章を發表したが、その旅

から歸る頃から、自分でも身體（からだ）に異狀の起つて來た事を知つたと見えて、「何でも一つ身體を丈夫にしなくちやならない」といふので、國府津の前川村の方へ引き移つたのだ。丁度文　界を出す時分から、私も一時漂泊の生活を送つたが、その以前に私は岩本君に勸められて、明治女學校で教へてゐた。北村君もさう收入が無いと思つたから、僅かばかりの自分の學校の仕事を北村君に讓つて、私は旅へ出懸けたりした。北村君は國府津へ移つてからも矢張り其處から、明治女學校へ教へに通つてゐた。或る時私に、「幸田といふ人は仕合せだね。」と云つて、當時の文學者としては相應な酬いを受けてゐた露伴氏の事を、羨んで話した事があつたが、それほど貧しく暮さなければならない境涯で、そのためには異人の仕事をしたり、それから『平和』といふ宗教雜誌を編輯したりした事があるやうに記憶してゐる。國府津の寺は、北村君の先祖の骨を葬つてある、さういふ所緣（ゆかり）のある寺で、彼處では又北村君の外の時代で見られない、靜かな、半ば樂しい、半ば傷いてゐる時が來たやうであつた。「國府津時代は樂しうござんした。」とよく細君が北村君の亡くなつた後で、私達に話した事があつた。『蝶の歌』が出來たのもあの海岸だし、それから『一夕觀』などを書いたのも彼處だつた。あの『一夕觀』なんかになると、から激し易かつたり、迫り易かつたりした北村君が、餘程廣い處へ出て行つたやうに思はれる。けれども惜しい事に、さういふ

廣い處へ出て行つた頃には、身體の方はもう餘程弱つてゐた。國府津時代に書いたものは皆味の深いものばかりだが、然し餘り長いものはもう書けなかつた。ユマルソンの評傳の稿を起したのも、彼處の寺だ。それから、『五緣』『十夢』大きな史劇の計畫なぞを立てゝゐたのも、彼處だ。この國府津時代に書きつけた、ノオト・ブックを後で見たが、自分はもうどうにもからにも仕樣が無くなつたから、一切の義務なんかといふものを棄てゝ了つて、西行のやうな生活でも送つて見たい、といふやうなことが書きつけてある所もあり、自分の子供にはもう決して文學なぞは遣らせない、といふ事なぞを書いたものがあつた。それから何も物の書けないやうな可傷しい狀態になつて、數寄屋橋の煙草屋の二階へ歸る事になつた。北村君と阿母さんとの關係は、丁度バイロンと阿母さんとの關係のやうで、北村君の一面非常に神經質な處は、阿母さんから傳はつたのだ。それに阿母さんといふ人が、女でも煙草屋の店に坐つて、頑張つてゐやうといふ人だから、北村君の苛々した所は、阿母さんには喜ばれなかつた。暫く病んでゐた後で、北村君が自殺を企てた當時の心境は、私は『春』の中でいくらか述つて見た。それを家の人に見附かつて、病院へ送られて、兎に角傷は癒つた。細君も心配して、も一度芝公園の家を借りて、それには友達ながらも種々心配して呉れた人があつて、其處で養生した。丁度彼れ是れ半年近くも、あの公園の家で

暮したらうか。もう餘程違つた頭腦の具合だつたから、なるべく人にも會はなかつたし、細君も亦客なぞ斷るといふ風であつた。二度目に其處へ移つてからは、もう殆んど筆を執るやうな人ではなかつた。岩本君が心配して、押川方義氏を連れて、一度公園の家を訪ねて、宗教事業にでも携はつたらどうか、といふ話をしたといふ事を聞いたが、後で私が訪ねて行くと、「岩本君達が來て、宗教の話をして呉れたが、どうしても僕には信じるといふ心が起らないからね。」と、そんな風に話した事もあつた。北村君もそんな風になつた以上は仕方が無いし、吾々は吾々で、又更に新しく進んで見ようといふ心持になつて、文學界の連中は各自思ひ〳〵に歩き始めた時であつた。たまに訪ねて行くと、奥の方の小さい、薄暗いやうな部屋に這入つてゐて、「滅多に人にも會はないのだが、君等だから會ふのだ」と云つて、突いて癒つた咽喉の傷などを、出して見せた。「何しろどうもこの傷の跡があるんだからね。」なぞと云つて、頻りにその傷の跡を氣にしてゐた。戸川君と一緒に訪ねた時には、何でもエマルソンの本が出來た時で、細君が民友社から屆いた本を持つて來て、私に見せたが、北村君はその本を手に取つて見たといふ位ゐで、巾を開けて見る氣も無いといふ風であつた。細君はもう夜中も、夫の樣子に注意するといふ風になつて、非常に氣を附けて看護をしたのであつたが、丁度五月十六日の晩の月夜に、自分の病室を脫け出して、

家の周圍にある樹に細引を掛けて、それに縊れて二十七歳で死んだ。その素質に於いては稀に見る詩人であり、思想家であつた、北村君の惜む可き一生は斯うして終つた。

北村君は明治元年に小田原で生れた人だ。阿父（おとう）さんは小田原の士族であつた。まだ小さな時分に、兩親は北村君を祖父母の手に託して置いて、東京に出た。北村君は十一の年まで小田原にゐて、非常に嚴格な祖父の教育の下に、成長した。祖母といふ人は、溫順な人ではあつたが、實の祖母では無くて、繼祖母であつた。北村君自身の言葉を借りて云へば、不羈磊落な性質は父から受け、甚だしい神經質と、強い功名心とは母から受けた。斯ういふ氣風は少年の時からあつて、それが非常にやかましい祖父の下に育てられ、祖母は又自分に對する愛情が薄かつたといふ風で、後に成つて氣鬱病を發した一番の大本（おほもと）は其處から來たと自白して居る。明治十四年に東京へ移つて、そして途中から數寄屋橋の泰明小學校へ這入つた。透谷といふ號は、この數寄屋橋のスキヤから來たのである。私も小學校の課程は、北村君と同じ泰明小學校で修めた者だが、北村君よりはその弟の丸山古香君の方を、その時代にはよく覺えてゐる。北村君は方々の私立學校を經て、今の早稻田大學が專門學校と云つた時代の、政治科にゐた事もあつたと聞いた。當時の青年はかう一體に、何れも政治思想を懷くといふやうな時で、北村君もその風潮に激せられて、先づ政治家に

ならうと決したのだが、その後一時非常に宗教に熱した時代もあつた。北村君のアンビシヤスであつた事は、自ら病氣であると云つたほど、激しい性質のものらしかつた。さういふ性質はずつと後になつても、眉宇の間に現はれてゐて、或る人々から誤解されたり、餘り好かれなかつたりしたといふのは、そんな點の現はれた所であつたらうと思ふ。まだ二十位の青年の時代に或る時は東洋の救世主を以て任ずるやうな空想な日を送つて、後になつて、餘り自分の空想が甚だしかつた事と、その後に起る失望、落膽の激しい事に驚いた、と書いたものなぞもある。或る時は又一個の大哲學家となつて、歐洲の學者を凹ませようと考へた事もあつて、その考へは一年の間も續いて、一分時間も腦中を去らなかつた。かういふ妄想を、而も斯ういふ長い年月の間、頭腦（あたま）の裏に入れて置くとは、何といふ狂氣（きちがひ）染みた事だらう、と書いたものなぞがあるが、頭腦が惡かつたといふ事は、時々書いたものにも見えるやうである。北村君はある點まで自分の Brain Disease を自覺して居て、それに打勝たう〳〵と努めた。北村君の天才は恐るべき生の不調和から閃き發して來た。で、種々な空想に失望したり、落膽したりして、それから空しい功名心も破れて——北村君自身の言葉で言へば『功名心の梯子から落ちて』——さうして急激な勢で文學の方へ出て來るやうになつたのである。北村君は石坂昌孝氏の娘に方る、みな子さんを娶（めと）つて、二十五

透谷選集

北村透谷遺稿

歳(?)の時には早や愛兒のふさ子さんが生れて居た。(斯の早婚は種々な意味で北村君の一生に深い影響を及ぼした。)北村君は思ひ詰めてゐるやうな人ではあつたが、一方には又磊落な、飄逸な處があつて、皮肉も云へば冗談も云つて、友達を笑はすやうな、面白い處もあつた。前に出版した透谷全集の方には寫眞を出し、後に出した透谷全集には弟の丸山君の書いた肖像畫を出したのであるが、北村君をよく現はすやうなものが、殘つてゐないのは殘念である。北村君は大變聲の涼しいやうな人で、私は北村君の事を思ひ出す度に、種々な書いたものを讀んで聞かせたり、その時々に話したりした聲が、今だに耳についてゐるやうな氣がする。晩年には服裝(なり)なぞも餘り構はなかつたし、身體は何方かと云へば痩せぎすな、少し肩の怒つた人で、髪なぞは長くしてゐた。北村君の容貌の中で一番忘れられないのは、そのさもパツションに燃えてゐるやうな、そして又考へ深い眼であつた。

明治年代に記憶すべき、大きな出來事の一つは、士族の階級の滅亡である。その階級が有(も)てる凡てのものゝ滅びて行つたことである。その士族の子孫の中から北村君のやうな物を考へる人が生れて來たといふことは私には偶然では無いやうに思はれる。猶、新時代の先驅者たりし北村君に就いては、話したいと思ふことは多くあるが、こゝにはその短い生涯の一瞥にとゞめておく。

——『後の新片町より』——

富嶽の詩神を思ふ

空を望んで駿驅する日陽、虚に循つて警立する候節、天地の運流いつを以て極みとはするならん。

朝に平氏あり夕に源氏あり、飄忽として去り飄忽として來る。一潮山を噬んで一世紀沒し、一潮退き盡きて他世紀來る。歴史の載するところ一潮毎に葉數を減じ、古苔蒸し盡くして英雄遺魄日に月に寒し。

嗟吁人生の短期なる、昨日の紅顔今日の白頭。忙々促々として眼前の事に營々たるもの、悠々綽々として千載の事を慮るもの、同じく之れ大暮の同寐、霜は香菊を厭はず、風は幽蘭を容さず、急ち逝き忽ち消え、邈冥として踪ぬべからざるを致す。

墳墓何の權かある、宇内を睥睨し、日月を叱咤せし古來の英雄何すれぞ墳墓の前に弱兎の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置きて、而して世の俗眼者流をして縱に流用せしめたる、嗚呼墳墓汝の冷々たる舌、汝の常に餓ゑたる口、何者をか噬まざらん何物をか

呑まざらん、而して墳墓よ、汝も亦た遂に空々漠々たり、水流滔々として洋海に趣けど洋海は終に溢れて大地を包まず、冉々として行暮する人世遂に新なるを知らず。

花には花に弄せられざるもの誰ぞ、月には月に翫ばれざるもの誰ぞ、風狂も亦た一種の變調子。風狂も亦た一種の變調子なりとせば、人間いかにして變調子ならざる事を得む。暗冥なる「死」の淵に、相及び相襲ぎて沈淪するもの、果して之れ人間の運命なるか。舌能く幾年の久しきに辯ぜん。手能く幾年の長きに支へん。辯ずるところ何物ぞ。支ふるところ何物ぞ、わが筆も亦た何物ぞ。言ふ勿れ翁媼たる森林幾百年に亘りて巨鷲を宿らすと。言ふ勿れ豐公の武威、幾百世を盡ふと。嗟何物か終に盡きざらむ。何物か終に滅せざらむ。寂めざるもの誰ぞ、悟らざるもの誰ぞ。損喪せざるもの竟に何處にか求めむ。

寂果して寂か、寐果して寐か、我是を疑ふ。深山夜に入りて籟あり、人間晝に於て聲なき事多し。寂むる時人眞に寂めず、寐る時往々にして至樂の境にあり。身體四肢必らずしも人間の運命を示すにあらず。別に人間大に施爲する所あり。潜に思ふ、終に寂ざるもの眞の寂か。終に寐せるもの眞の寐か。此境に達するは人間の容易く企つる能はざる所なり。愛すべきものは夫れ故郷なるか、故郷には名狀すべからざるチヤームの存するあり。風

流雅客を嘲るもの邦家を知らざるの故を以て彼等を貶せんとする事多し。故郷は之れ邦家なり、多情多思の人の尤も邦家を愛するは何人か之を疑はむ。孤劍提げ來りて伊太利の義軍に投じ一命を惡疫に委したるバイロン我れ之を愛す。請ふ見よ羅馬死して羅馬の遺骨を幾千萬に傳へ、死して猶ほ死せざる詩祖ホーマーを。邦家の事曷んぞ長舌辯士のみ能く知るところならんや。別に滿腔の悲慨を涵へて生死悟明の淵に一生を憂ふるものなからずとせんや。

俗物の尤も喜ぶところは憂國家の稱號なり。而して自稱憂國家の作するところ多くは自儘なり、彼等は僻見多し、彼等は頑曲多し、彼等は復讐心を以て事を成す。彼等は盲目の執着を以て業を急ぐ。彼等は夢幻中の虛想を以て唯一の理想となす。彼等の慷慨彼等の憂國多くは彼等の自ら期せざる渦流に捲き去られて終ることあるものぞ。

朽ちざるものいづくにある、死せざるものいづくにある。われ答を俟ちて躊躇せり、而して答遂に來らず。朽ちざるに近きものいづくにかある、死せざるに近きものいづくにかある。われこの答を聞かんが爲に過去の半生を逍遙默思に費せり。而して遂にその一部分を聞けりと思ふは非か非ならざるか。

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を、天の原ふりさけ見れば

渡る日の、影も隱ろひ、照る月の光も見えず、白雲もいゆき憚り時じくぞ雪は降りける、語り繼ぎ云ひ繼き行かん富士の高嶺は。（赤人）

白雲、黑雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、是等のものを制御して而して恒久不變に威靈を保つもの、富嶽よ、夫れ汝か。渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す、富嶽よ汝こそ不朽不死に通きものか。汝が山上の浮雲よりも早く消え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戲れぞ。いさましや汝の山麓を西に馳する風、こゝろよや汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の力汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。自由汝と共にあり、國家汝と共に樹てり、何をか畏れとせむ。

遠く望めば美人の如し。近く眺むれば威嚴ある男子なり。アルプス山の大歐文學に於ける、わが富嶽の大和民族の文學に於ける、淵源するところ關聯するところ豈寡しとせんや。遠く望んで美人の如く近く眺めて男子の如きはそも我文學史の證するところの姿にあらずや。アルプスの崇嚴或は之を缺かん、然れども富嶽の優美何ぞ大に讓るところあらん。われはこの觀念を以て我文學を愛す。富嶽を以て女性の山とせば我文學も恐らく女性文學なるべし。雪の衣を被ぎ白雪の頭巾を冠りたる恒久の佳人、われはその玉容をたのしむ。

盡きず朽ちざる詩神、風に乘り雲に御して東西を飄遊し給へり。富嶽駿河の國に幅起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天蝀よりその山嶺に急げり、而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐まり棲みて遂に復た去らず。是より風流の道大に開け、人麿赤人より降つて、西行芭蕉の徒、この詩神と逍遙するが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき紀念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。

一夕觀

其一

ある宵われ牕にあたりて横たはる。ところは海の鄕、秋高く天朗らかにして、よろづの象、よろづの物、凛乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が局促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく能なく辯なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯の如く我に徹透す、而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

月は晩くして未だ上るに及ばず。仰いで蒼穹を觀れば、無數の星宿紛糾して我が頭にあり。顧みて我が五尺の軀を視、更に又内觀して我が内なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚く。不死不朽、彼と與にあり。衰老病死我と與にあり。鮮美透凉なる彼に對して、撓み易く折れ易き我れ如何に赧然たるべきぞ。爰に於て、我は一種の悲慨に擊たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲慨我が心頭に入れり。罵者の聲耳邊にあるが如し、我が爲すなきと、我が言ふなきとを責む、われ起つて茅舍を出で、且つ仰ぎ且つ俯して罵者に答ふるところあらんと欲す。胸中の苦悶未だ全く解けず。行く行く秋草の深き所に到れば、急ち聽く蟲聲縷の如く耳朶を穿つを。之を聽いて悶心は一轉せり、再び之を聽いて悶心更に明かなり。曩に苦悶と思ひしは苦悶にあらざりけり。看よ卿々として秋を悲しむが如きもの、彼に於て何の悲しみかあらむ。彼を悲しむと看取せんか、我も亦た悲しめるなり。彼を吟哦すと思はんか、我も亦た吟哦してあるなり。心境一轉すれば彼も無く、我も無し、邈焉たる大空の百千の提燈を掲げ出せるあるのみ。

其二

われは歩して水際に下れり。浪白く萬古の響を傳へ、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱ぬきて蒼穹を察すれば、我れ「我」を遺れて飄然として、襤褸の如き「時」を脫す

るに似たり。

茫々乎たる空際は歴史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プレトーありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を燭らせり、同じく我れを光らせり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりと雖、天涯の歴史は太初より今日に至るまで大なる現實として殘れり。人間は之を幽奥（ミステリー）として畏るゝと雖、大なる現實は始めより終りまで現實として殘れり。人間は或は現實を唱へ、或は夢想を稱へて、之を以て調和す可からざる原素の如く諍へる間に天地の幽奥は依然として大なる現實として殘れり。

其三

われは自から答へて安らかなる心を以て蓬窓に反れり。わが視たる群星は未だ念頭を去らず、靜かに燈を剪つて書を讀まんとするに、我が心はなほ彼にあり、我が讀まんとする書は彼にあり。漠々たる大空は思想の廣ろき歴史の紙に似たり、彼處にホーマーあり、シエークスピーアあり、彗星の天系を亂して行くはバイロン、ボルテーアの徒、流星の飛び且つ消ゆるは泛々たる文壇の小星、吁、悠々たる天地、限りなく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に對して暫らく茫然たり。

哀詞序

歡樂は長く留り難く盡くる時を知らず。よろこびは春の華の如く時に順つて散れどもかなしみは永久の皷吹をなして人の胸をとゞろかす。會ふ時のよろこび別るゝ時のかなしみを償ふべからず。はたまた會ふ時の心は別るゝ時の心の萬分の一にだも長からず。生を享け人間に出でゝ心を勞して荊棘を過る、或は故なきに敵となり、或は故なきに味方となり、思怨雨つながら暴雨の前の蛛網に似て、徒らに螫だ毛髪の細き緣を結ぶ、夕に笑ひしに因て朝に泣くの果を見つ、朝に泣きしに因つて更に又た夕に笑はんとす、斯の如きは憫れむべし、斯の如きは悲しむべし、斯の如きは厭ふべし、我れつら〳〵世相を觀ずるに、誰か亦た斯の如くならざらむ。娼婦の涕は紅涙と賞へられ狼心の僞捨は慈善と稱へらる。友と呼び愛人といふもはしたなきもつれに腕くも水と冷ゆるは世の習ひなり、驚を白しと云ひ鴉を黑しといふも唯だ日にみゆるところを言ふのみ、人の心を尋ぬればよしなきことを爭ひては瞋恚の焰を懷にもやし、露ほどの恨みも長しへに解くることなく人を毀はんと思

ふ。右に行くもの〻袂は左に往くもの〻手に把られ、左に行くものも亦た右に往くものに支へらる。鴿の面をもてる者に蛇の心あり、美はしき果實に怖ろしき毒を含めることあり、洞に近ければ蛇蛇蟄し、林に入れば猛獣遊ぶ。二世といふ縁に二世あるは少く、三世といふに三世あるも亦渺し、まことの心にて契る誓は稀にして、唯だ目前の情と慾とに動くも亦はかなき至りなり。讐と恩とに於て亦た斯くの如し。必らず酬ふべしと思ふ程ならば酬はずして自から酬ゆるものを。必らず忘れじといふ恩ならば忘るゝとも自から忘るまじきを。讐には手をもて酬いんと思ふこと多く、恩には口をもて報ずること多し。敵と味方肥於いて亦た斯の如し、一時の利の爲めに味方となるものは、又た一時の害の爲めに離るるを易しとす。一時の害の爲めに敵となるもの、又た一時の利の爲めに味方となるを易しとす。西風には東に飛び、東風には西に揚がるは紙鳶なり、人の心も大方は斯くの如し。風の西に吹くを能く見るものを達識者と呼び、風の東に轉ずるを看破するものあれば卓見家と稱へんとす。勇者はその風に御して高く飛び、智者はその風を袋に蓄へて後の用を爲す。運よくして思ふこと圖に當りなば傲然として人を凌ぎ、運あしくして躬窮りなば憂悶して天を恨む。凌がるゝ人は凌ぐ人よりも眞に愚かなりや、恨まるゝ天は恨む人の心を測り得べきや。斯の如きは世なり。斯の如きは人間なり。深く心を人世に置くもの安くんぞ

憂なきを得ん。安くんぞ悲なきを得ん。甘露を雨らす法の道も世を霑ほすこと遅く、仁義の教も人の心をいかにせむ。天地の間に我が心を寄するものを求めて得ざれば我が心は涸れなむ。

我はあからさまに我が心を曰ふ、物に感ずること深くして悲に沈むこと常ならざるを。我は明かに我が情を曰ふ、美くしきものに意を傾くること人に過ぎて多きを。然はあれども、わが美くしと思ふは人の美くしと思ふものにあらず、わが物に感ずるは世間の衆生が感ずる如きにあらず。物を通じて心に徹せざれば自ら休むことを知らず。形を鑿ちて精に入らざれば自ら甘んずること難し。人われを呼びて萬有的趣味の賊となせど、われは既に萬有造化の美に感ずるの時を失へり。多くの繪畫は我を欺けり、名匠の手に成るものと雖も多く我を感ぜしむる能はず。繪畫既に然り、造化も唯だ自然に成りたる繪畫のみ。われは世の俗韻俗調の詩人が徒らに天地の美を玩弄するを悪むこと甚だし。然れども自ら顧みる時は何が故に我のみ天地の美に動かさるゝことの少なきかを怪しまずんばあらず。動かさるゝこと少なきにあらず、多く動かされて多く自ら欺きたればなり。我は再び言ふ、われは美くしきものに意を傾くること人に過ぎて多きを。花のあしたを山に迷ひ、月のゆふべを野にくらすなど、人には狂へりと言はるゝも自から悟る

ことを知らず、人には愚なりと言はるゝとも自から賢からんことを冀はず。或時は蝶の夢の覺め易きを恨み。またある時は蟲の音の夜を長ふするを悲しむ。この恨みこの悲しみを何が故の恨み、何が故の悲しみぞと問ふも、蝶の夢は夢なればこそ覺め、蟲の音は秋なればこそ悲しきなれと答ふるの外に答なきに同じ。嗚呼天地味ひなきこと久し、花にあこがるゝもの誰ぞ、月に嘯くもの誰ぞ、人世の冉々として滅亡するを嗟し、悵として命運の私しがたきを慨す。

身は學舍にあり、中宵枕を排して、燈を剪りて亡友の爲に哀詞を綴る。筆動くこと極めて遲く、涕零つること甚だ多し。相距ること二十餘日、天と地の間に於てこの距離は幾何ぞ。（哀詞本文は未だ稿を完ふせず）

山庵雜記

其一

夢見まほしやと思ふ時あやにくに夢の無き事あり、夢なかれと思ふ時うとましき夢のも

つれ入ることあり。寤むる時亦た斯の如し、意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに意はず。去りとて意の如くならぬをば意の如くせまじと思ふにもあらず、靜に傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意の儘にならぬものぞなき。如意却つて不如意。不如意却つて如意。悲しむも何かせむ。歡ぶも何かせむ。「無心」を傭ひ來つて、悲みをも歡びをも同じ意界に放ちやりてこそ、まことの樂は來るなれ。

其二

早曉臥床を出でゝ心は寂寞の間に醒め、意ひは意無意の際にある時、一鳥の弄聲を聽けば、忽として我れ天涯に遊び忽として我塵界に落るの感あり。我に返りて後其聲を味へば凡常の野雀のみ、然るも我が得たる幽趣は地に就けるものならず、爰に於て私に思ふは、感應我を主として他を主とせざるを。

其三

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於てよりも、靜默瞑坐する時に於て燦爛たる光明ある事多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し。心外の文章を以て心中の文章を裝はんとするは文字の賊なるべし。古へより卓犖不羈の士往々にして文章を事

とするを喜ばず、文字の賊とならんより心中の文章に甘んじたればならむ。

其　四

身心を放ちて瞑然として天造に任ぜんか、身心を收めて凝然として寂定に歸せんか、或は猖狂或は枯寂、猖狂は猖狂の苦味あり、枯寂は枯寂の悲寥あり、魚躍り鳶舞ふを見れば聊か心を無心の境に馳ることを得、雨そぼち風吹きさそうにあひては忽ち現身の心に還る、自然は我を弄するに似て弄せざるを感得すれば虚も無く實もなし。

其　五

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなかるらむ。涙なくては誠もなからむ。狂ひに狂ひしバイロンには涙も細繩程の役にも立ざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繫ぎ止むるはこの寶なるべし。遠く行く情人の足を踏み止まらすもの、猛く勇む雄士の心を弱くするもの、情差び歡薄らぎたる間柄を緊め固ふするもの、涙の外には求めがたし。人世涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、甚く悲しきことは跡を絶つに幾からんか。

其　六

「龐く斫られたる石にも神の定めたる運あり。」とは沙翁の悟道なり。靜かに物象を觀ずれば物として定運なきにあらず。誰か恨むべき神を知りそめたる。誰か啣つべき佛を識りそめたる。心を物外に抽かんとするは未だし、物外物内何すれぞ悟達の別を畫かむ。運命に默從し、神意に一任して、始めて眞悟の域に達せんか。

其　七

孤雲野鶴を見て別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脫離して一身を挺出せんとする人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るゝにあらざれば詩人は一の天職を帶びざる放蕩漢にして終らんのみ。

其　八

他を議せんとする時尤も多く己れの非を悟る、頃者激する所ありて生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し終りて靜に內省するに、人を難ずるの筆は同じく己れを難ぜんとするに似たり。是非曲直輕しく判じ難し。如かず修練鍛磨して切りに他人の非を測らざることをつとむるに。

其　九

大なる「悔改」は又た一個の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし、とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは信仰に入るの要

諦にして、罪人の必ず自殺すべしとせざるは之をもてなり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は卽ち信仰の生涯なるか。

鬼心非鬼心

悲しき事の、さても世には多きものかな、われは讀者と共にしばらく空想と虛榮の幻影を離れて、まことにありし一悲劇を語るを聞かむ。

語るものはわがこの夏霎時の假の宿とたのみし家の隣に住みし按摩男なり。ありし事がらは、そがまうへなる禪寺の墓地にして頃は去歲の初秋とか言へり。

二本榎に朝夕の煙も細き一かまどあり、主人は八百屋にしてかつぎうりを以て營とす、そが妻との間に三五ばかりなる娘ひとりと、六歲になりたる小兒とあり。夫は實直なる性なれば、家業に怠ることもなく、妻も日頃謹愼の質にして物多く言はぬほど糸針の道には心掛ありしとのうはさなり。かゝればかまどの煙細しとは言ひながら其日其日を送るに太

き息吐く程にはあらず、折には小金貸し出す勢ひさへもありきと言ふものもありけり。

妻の何某はいつの頃よりか何となく氣鬱の樣子見え始めたれども家内のものは更なり、近所合壁のやからも左したる事とは心附かず唯だ年長けたる娘のみはさすが母の氣むずかしげなるを面白からず思ひしとぞ。世のありさま三四年このかた金融の逼迫より、種々の轉變を見しが、別して其日かせぎの商人の上には輕からぬ不幸を生ぜしも多かり。正直をもて商賣する者に不正の損失を蒙らせ、眞面目に道を歩むものに突當りて荷を損ずるやうの事漸く多くなれりと覺ゆ。かの夫妻未だ左したる困厄には陷らねど、思はしからぬが苦情の元なれば時として夫婦顏を赤めるなどの事もありしとぞ。裏家風情の例として、其日に得たる錢をもて明日の米を買ふ事なれば、米一粒の尊さは餘人の能く知るところにあらず。或日の事とて妻は娘を家に殘しつ、小兒を携へて出で行きしが、米買ふ錢を算へつゝ、ふと其口を洩れたる言葉は「もし此小兒なかりせば日々に二錢を省くことを得べきに」なりし。之を聞きたる小娘は左までに怪しみもせざりしも殊更に忌はるゝところはあらざりしとなむ。

このあたりの名寺なる東禪寺は境廣く樹古く陰鬱として深山に入るの思あらしむ。この境内に一條の山徑あり、高輪より二本榎に通ず、近きを擇むもの、こゝを往還することゝ

なれり。累々たる墳墓の地苔滑らかに草深し、もゝちの人の魂魄無明の夢に入るところ。わがかしこに棲みし時には朝夕杖を携へて幽思を養ひしところ。又た無邪氣の友と共にいちごの實を拾ひて樂みしところなり。

家を出でゝ程久しきに、母も弟も還ること遲し、鴉は杜を急げども歸らぬ人の影は破れし簷の夕陽の照光にうつらず。幾度か立出でゝ、出で行きし方を眺むれど沈み勝なる母の面は更なり、此頃とんぼ追ひの仲間に入りて樂しく遊びはじめたる弟の形も見えず。日は全く暮れぬれども未だ歸らず。案じわびて待つうちに、雨戸の外に人の音しければ急ぎ戸を開くに、母ひとり茫然として立てり。その樣子怪しげに見えはせしものゝ、いかに悲しき事のありけんとは思ひもよらず。弟は、と問へば、しばし默然たりしが、何かは知らず太息と共に、あれは殺して來たよ、と答へぬ。

始めは戲れならむと思ひしが、その容貌の青ざめたるさへあるに、夜の事とて共に歸らぬ弟の身の不思議さに、何處にてと問ひければ東禪寺裡にてと答ふ。驚ろき呆れて、半ば疑ひながらも母の言ひたるところに、走り行きて見れば、こはいかに無殘や一人の弟は倒まに、墓の門なる石桶にうち沈められてあり。其傍になまぐさき血の迸りかゝれる痕を見たりと言へば、水にて殺せしにあらで、石に擊つけてのちに水に入たりと覺えたり。氣も絕

え入んほどに愕き惑ひしが、走り還りて泣き叫びつゝ、近隣の人を呼びければ、漸く其筋の人も來りて死體の始末は終りしが、殺せし人の繼しき中にもあらぬ母の身にてありながら、鬼にもあらぬ鬼心をそしらぬものもなかりけり。

東禪寺寺內より高輪の町に出でんとする細徑に覆ひかゝれる一老松あり。晝は近傍の頑童等こゝに來りて松下の細流に小魚を網する事もあれど、夜に入りては蛙のみ雨を誘ひて鳴き騷げども、その濁れる音調に驚き休ます足音とては稀に聞くのみなり。寺內に棲みける彼の按摩、その業の爲にはかゝる寂寥にも慣れたれば、夜出でゝ夜歸るにこはさといふもの未だ覺え知らず、五月雨の細々たる陰雨の中に一二度は彼燐火をも見たれど、左して怖るゝ心も起らずと言へり。

雨少しくそぼちて桐の青葉の重げに垂るゝ一夜、暮すぎて未だ程もあらせず、例の如く家を出でゝ彼の老松の下に來掛りし時、突然片陰より顯はれ出るものありと見る間に、わが身にひたとかぢりつき、逃げんとするも逃げられず、膽潰れながらも、其人を見れば、髮は亂れて肩にからみ、色は夜目にも青白ろく、鬼にやあらむ人にやあらむと思ふばかり、身はわな〳〵と顫ひて、振り離さん程の力もなくなれり。やうやく氣を沈めて其人の態をつく〴〵打ち眺むれば、まがふ方なき狂女なり。さては鬼にもあらずと心稍々安堵したれ

ば、何故にわれを留むるやと問ひしに、唯ださめ〴〵と泣くのみなり。再三再四問ふたる後に、答へて曰ふやう、妾は今宵この山のうしろまで行かねばならずと。何用あつて行くやと問ひければそこにて兒を殺したる事あれば、こよひは我も共に死なむと思ひてなり。この言を聞きて、さては前日の兒殺よなと心附きたれば更に氣味あしく、いかにもして振離して逃げんとすれど、狂女の力常の女の腕にあらず、しばしがほどは或は賺しつ或はなだめつ、得意客は待ちあぐみてあらむに、いかにせばやと案じわづらふばかりなり。いかに言ふとも一向に聞き入れず、死なねば濟まずとのみ言ひ募りて、捕へし袖を挽きて、吾を彼の山中に連れ行んとす。もし愈々死なむとならば獨り行きても宜からずやと言へば、ひとりにては寂しき路を通ひがたしと言ふ。幸にも、この時角燈の光微かにかなたに見えければ、聲を擧げて巡行の査官を呼び茲に始めて蘇生の思ひを爲せり。

始は査官言を盡して說き諭しけれど、一向に聞入れねば止むことを得ずして他の査官を傭ひ來りつ、遂に警察署へ送り入れぬ。

彼女は是より精神病院に送られしが數月の後に、病全く癒えてその、夫の家に歸りけれど、夫妻とも元の家には住まずいづれへか移りて、噂のみはこのあたりにのこりけるとぞ、以上は我が自から聞きしところなり。但し聞きたるは、この夏の事、筆にものして世の人

の同情を請はんと思ひたちしは、今日土曜日の夜秋雨紅葉を染むるの時なり。

殺さんと思ひたちしは偶然の狂亂よりなりし、されども斯の如き悲劇の斯くの如き徒爾の狂亂より成りしことを思へば、まがつみの魔力いかに迅且大ならずや。親として子を殺し、子として親を殺す、大逆不道此の上もあらず、然るに斯般の惡逆の往々にして世間に行はるゝを見ては、誰か悽惻として人間の運命のはかなきを思はざらむ、狂女心底より狂ならず、醒め來りて一夜悲悼に堪へず、兒の血を濺ぎしところに行きて己れを殺さんとす、己れを殺さん爲にその悲しき場所に獨り行くことを得ず、却つて路傍の人を連れ立てんことを請ふ、狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり、あはれや子を思ふ親の情の、狂亂の中に隱在すればなるらむ。その狂亂の原はいかに、渠が出でがけに、曰ひし一言、深く社會の罪を刻めり。

昨夜は淵明が食を乞ふの詩を讀みて其淸節の高きに服し、今夜は慘澹たる實聞をものして、思はず袖を濕らしけり。知らぬうちとて、默思逍遙の好地と思ひしところ、この物語を聞きてよりは自からに足をそのあたりに向けずなりにき。かの地に住みし時この文を作らず。却つて今の寤にうつりて之を書くは、わが悲悼の念のかしこにては餘りに强かりければなり、思へば不思議なるほどに酸鼻のこともあるものかな。

秋窓雜記

第一

かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜けれど秋の士を高うするに加かず。花の人を醉はしむると月の人を淸ましむるとは自から味を異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは世俗の免かるゝ能はざるところながらわれは萬木凋落の期に當り靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。

第二

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて居ること僅かに二日、思へらく此秋こそは爰に來りてよろづの秋の悲しきを味ひ得んと。圖らざりき身事忙促として空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。然れども秋は鎌倉に限るにあらず、人間到るところに詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道は斯にこそあれ。

第三

我庵も亦た秋の光景には洩れざりける。咽なきやぶるばかりのひよどりの聲々、高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかこゝかとうち見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず、窓を閉ぢて書を披けば一層高く聞ゆめり。鳥の聲ぞと聞けば、鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。

第四

病みて他鄕にある人の身の上を氣遣ふは人も我もかはらじ、左れど我は常に健全なる人のたま〳〵床に臥すを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは富めるものの道に入り難きに等しからむ。世には體健かなるが爲に心健かならざるもの多ければ常に健やかなるものゝ十日二十日病床に臥すは左まで恨むべき事にあらず、況してこの秋の物色に對して命運を學ぶにこよなき便あるをや。斯く我は眞意を以て微恙ある友に書き遣れり。

第五

萩薄我が庭に生ふれど我は在來の詩人の如く是等の草花を珍重すること能はず。我は荒漠たる原野に名も知れぬ花を愛づるの心あれども、園藝の些技にて造詣したる矮少なる自然の美を左程にうれしと思ふ情なし、左は言へど敢て在來の詩人を責むるにもあらず、又

た自己の愛するところを言はんとにもあらず、唯だ我が秋に對する感の一として記するのみ。

第六

鴉こそをかしきものなれ。わが山庵の窓近く下り立ちて、我をながし目に見やりたるのち、追へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば脚を立て首を揚げて飛去らんとする景色は見すれど、わが害心なきを知ればにや、たゞちよろ〳〵と歩むのみ。浮世は廣ければ、斯る曲物を置きたりとて何の障りにもなるまじけれど、その芥ある處に集り穢物ある處に群がるの性あるを見ては、人間の往々之に類するもの多きを想ひ至りて聊か心惡くなりたれば、物を抛ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時かあ、かあ、と鳴く聲は我が局量を嘲る者の如し。實に皮肉家と云ふもの文界のみにはあらざりけり。

第七

夜更けて枕の未だ安まらぬ時蟋蟀の聲を聞くは眞の秋の情なりけむ。その聲を聞く時に、希望もなく失望もなく、恐怖もなく欣樂もなし。世の心全く失せて秋のみ胸に充つるなり。松蟲鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。一蟋蟀の爲に我は眠を惜まれて、物思ひなき心に思を宿しけり。

第八

芭蕉の葉色秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるに、仇心浮きて其が中を覗ひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を彈ずる面影凛乎として俗世の物ならず。その律調の端正なること今の世の浮華なる音樂に較ぶべからず、うれしき事に思ひぬ。

第九

紅葉館は我庵の後にあり。古風の茶亭とは名のみにて、今の世の浮世才子が高く笑ひ低く語るの場所なり。三絃の音耳を離れず、踏舞の響森を穿ちて來る。その音の卑しく其響の險なるは幾多世上の趣味家を泣かすに足る者あるべし。紳士の風儀久しく落ちて之を救濟するの道未だ開けず。悲いかな。

第十

わが幻住のほとりに情しらぬもの多く住むにやあらむ、わがうつりてより未だ月の數も多からぬに三度までも猫を捨てたるものあり。一たびは朝早く我机邊に鳴くを見出し、二度目には雨ふりしきる日に垣の外より投入れられぬ。三度目は我が居らざりし時の事なれば知らず、浮世の辛らきは人の上のみにあらずと覺えたり。

第十一

今の世の俳諧士は憐れむべきものなるかな。我庵を隔つること杜ひとつ、名宗匠其角堂永機住めり、一日人に誘はれて訪ひ行きつ。閑談久しき後彼の導くまゝに家の中あちこちと見物しけるが、華美を盡すといふ程にはあらねど、よろづ數寄を備へて粋士の住家とは何人も見誤らぬべし。間數も不足なき程にあれば何をか咄つべきと思ふなるに、俳翁頻りに其狹陋なるをつぶやきて止まず。一向に心得ねば、笑つて翁に言ひけるやう、御先祖其角の住家より狹しと思すにやと。俳士をして俗に媚ぶるの止むを得ざるに至らしめたるものあるは余と雖も之を知らぬにあらねど、高達の士の俗世に立つことの難きに思ひ至りて默然たること稍しばしなりし。

星夜

晝もし長からば物を思ふひまなくて好かるらむ、否夜もし長からば樂しき夢を結ぶ事もありて好かるらむ。晝にはわれ晝の思ひあり、夜にはわれ夜の思ひあり、いづれを安き時

と定めん由はなけれど、もし晝と夜との境なる薄暗の慘澹なる時の苦がさを思へばわれは事務繁き晝か夢長き夜かの一を樂しまんとするなり。

始めて彼女を見たるは厚生館に音樂會のありし時、その時彼女は七草を散らしたる裾模様を着て皎々たる素手を伸べ金石の音を脣頭に轉ばしてアルトの獨誦をなしたり。喝采の聲湧くが如くに起りて動搖めきわたる中に一曲を唱し終りて座に就きしが、やがて友らしき令孃と共に見えずなりぬ。次に彼女を見たるは我友人なる某新聞の記者が松の三日に歌留多會を催ふして少年男女を招きける時、その時の一座にも彼女は加はり居りて小捻の糸の緣の端、同じ組に膝を幷べて二た口三口言葉を交はすも不思議なるかな迷ひの始め。

其後同じ記者を訪ひたる時に彼女が姓名をそれとなく問ひ試みたるに、記者は何心なく彼が在りたる學校、彼の家、彼の性質までも問はず語り。これを始めとして折々彼女の噂さをする我言葉に流石こもれるものありしを見てとりし我友は或夜の閑談に我爲に周旋の勞を辭せざるべしと言ひ出でぬ。兎も角もしてと給へと應へて別れたるが此時より我夜は長くなりぬ。

頃は春の初めなり、我友は滿面に香はしき笑を湛へて根岸近き我閑宅を音づれ來ぬ、履脫より上ると齊しく我肩を一二擊して「これより君の家に永久の春は宿らむ、うぐひすの

鳴く帝を家内にて聞くは樂しからずや」と我友は彼女の父に縁故あるを以て明白に我が今日の位地を語り我將來の希望を告げ、世に頼母しき男なりと言ひて其愛女を嫁すべき機會至れるを促がしたるなり。彼女の父は始終默聽し居たりしが從來の品行などを我友の說き終りたる後に漸く兎も角も娘の心中もあれば、と言ひて其日の我友の勞力は濟みしが幾日か經し後に娘も他意なければと言ひおこしたれば、車を飛ばして吉報を齎らし來りしなり。斯くして約は結びたれど彼女は未だ修むべき學業のあればとて尙ほ一年程は合歡の禮を擧げぬ事となりぬ。

もし我が彼女に會はぬ前の事を思へば、わびしげなる野中の松に風の當り易きが如く世の事物に感觸する事多かりし、彼女の情を得たる後は物として春の色を帶びぬはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたると思はるゝ程に、苦く辛らく面白からぬ物に隔たりて甘く美くしく優しき物のみ近づきぬ。

肥え太りたる駒にうち乘りて春の野に遠乘したる時菜の花の朝日に照りかゞやきたる畦を過ぎて緩々と流るゝ小河の岸に悠々と駒を立てたる心地は此戀の眞味なり。

彼女が學校の歸り途などに我家を過ぎりて安否を問ひ呉るゝ時我はまことの友を得たるうれしさに、後は斯くよ、斯くして斯くよなど將來の事業を打ち明けて語りなどしつゝ彼女

の嗜める音樂の道に就きて談話する事もありて、その樂しさ、その甘さは言もて得盡くすべくもあらず。

翻々と蝶の花上に舞ふ頃となれば我も浮かるゝ戀の羽なきを慨み、彼女が許に使ひして郊外に策を曳くべきに伴になりてまと甘たれたる文を屆けて呼び寄せたる事もあり、綠新らしく添ひたる松の樹蔭に小憩して淸く甘まき物語の盡くべき時もなし、自らも怪しむ程に多辯になりて聽く人あらばをかしと思はんなどうち笑ひし事もあり、その人の現前は我に取りて「光」の如く、暗夜を照らす「月」の如く、よろづの曇れる思想は妖魅の日光に會ひて消ゆるが如くに我を離れ去りて一面の玲瓏たる玉路我前に開きて我行住に世ならぬ自由を供すと觀ぜしは僞言ならず。鳥の聲も昨日に異なれる妙韻を吟ずるやうに覺え、花の色も昨日とは異なれる天然の靈妙をあらはすと見え、歩々人境の外に出で語々天外の香を薫じ、景狀すべからざる樂寂の境地に長き春の日を暮らして黄昏の家路の旅は疲れ果てたる夢の中にあり。

斯かるもの我が迷ひ入りし春にてあるなり、我は迷ふと云ふ字を好まず、然れども過ぎ去りたる今日より昨日の事を思ひかへせば迷はざりしと辯ずるも要なし、明らかに我は春といふ魔に翫弄せられてありしなり、いかにとなれば、月は五度ほど圓くなりてまた虧け

たる後彼女の母なる人より、我に一書を送りて其の愛女を我靈魂より引き裂けり。その文言を見れば唯だ彼のごとき者を差上げては御爲にならずと存ずる故にとあるのみ。

彼女よりは一言の音信もあらず、母に同意したるか、又は母の同意を促したるなるか、曾て我が事業を打明けて語りたる時に樂しさうなる而して我が肩に倚りたりし時の蹴躓園の歡意は彼の遊女の賣色の笑にも似たる一時の假造より出でしものなりしか、否な左程の下品の女子とは誰が目にも見ゆべき道理なし、我が戀に盲したる目の咎にもあらじ、そも何者か我が外に彼女の情を釣りたる人のあるか、左る惡性の男に容易く靡くべき無智のものとは思はれず。

何か言ひおこすならむと待ちに待ちたる日の數も三日を過ぎて礫の音もなし、腹立だしさにその人の寫眞を取出で眼を閉ぢながら引裂きてうち捨てんとするにあやにくに閉ぢたる眼の自然に開らけて其人を見れば曾ひし日の笑顏にて我前に立ちけり。笑顏かと思へば涙あり、涙あるかと思へば浮き浮きしたる無邪氣の顏となりてうつれり。はては楊弓場あたりに見る紅粉に腐りたる面の色をうち做して我を尻目に見るかとうつりて思はず持ちたる手を離れハタと机に音すれば忽ち元の戀人なり。信じつ疑ひつ、迷ひつ晴れつ、夜一夜燈火の油の燃えつくるまで取り出しては仕舞ひ、仕舞ひてはまた取出しつ、自も怪しむほ

どに狂はしく意志の弱き男となりぬ。

明くる朝早曉に家僕を呼醒して彼人の家に最後の使者とならせぬ。吠き殘りたる山吹の花を採み散らして彼人の寫眞と幾通の彼人の手書とを封じこみて送りかへしたり。そのかへりに我が寫眞と我が書狀とを送りこしぬ、この書狀の中には月と共に醒めて夜越しに書きたるものもありけり。

われは婦人の情の斯くも變はり易きものなる事を信ぜんと欲して信ずる能はず。男心を夏の空に譬ふるは男に情なしと云ふ意味にや、男に情なしと言ふ意味を夏の空に寓する事をなさば女に情なき事をいかなる言葉もて言ひ盡さんや、否々我は彼女に忘れられたりとは知れども彼女を以て我を欺きたるものなりと言ふことはなすまじ、我を欺きたるもの彼女の如くにして彼女にあらず、彼女を圍みたる春の色こそ我を迷はしたるものにてありけれ。彼女の雙眸の內にわれは我が情思を投げ入れて其反酬を求むるに切なりし時を回顧すれば愕然として我が現在の境界を知る能はず。

再(また)の夜は來れり、古今の雜書を亂抽して眼を紙上に注げども心は遠く枯野を馳せ廻れり、今朝散らしたる山吹の花片の落ちて座上にあるを拾ひあげ、鉛刀(こがたな)にて細々に切斷し、斷又斷、針の頭ほどに細斷して窓の外に投げやりぬ、どこへ散りどこへ落ちしか花の行方は。

この夜はいつになく蒸し苦くして寝られず、上野の鐘の響近う聞ゆれど數ふるもうるさし、我が書齋は荒れはてたる廣野の如く、我が枕は冷え凍りたる野中の巖にも似たり。輾轉又輾轉、幾度か夢に入らんとして現にかへり、くる〳〵と一つの思ひをめぐり來て復た同じ思ひにかへる、うるさや〳〵と拂ひかける瞬時のみ妄想は消ゆれどあとは再び悲しき戀といふもおぞましや。忘れはてん、忘れん忘れん、會はぬ昔時よと胸の中に聲を勵ましても流石に表には出し兼ね、やがてすや〳〵と眠りたりしと覺えしか自からの鼻息に驚きて飛び起てば、胸のあたりを毒蛇に固く緊められしと見しは是も夢なりき。

あまりの事に呆れ果てゝ去らば「眠」を床の中に求めず、空の景色にても眺めて眼はともあれ心丈にても安ませばやと障子を靜かに推し開らき雨戸を開きて空を見れば、月は西へ西へと落ちゆきて慕ひしものゝ影はなく茫々たる虛空に無數の星屑（ほしくづ）の炳々たるあるのみ。

我牢獄

もし我にいかなる罪あるかを問はゞ我は答ふる事を得ざるなり、然れども我は牢獄の中

にあり。もし我を拘縛する者の誰なるを問はゞ我は是を知らずと答ふるの外なかるべし。我は天性怯懦にして强盜殺人の罪を犯すべき猛勇なし、豆大の昆蟲を害うても我心には重き傷痍を受けたらんと思ふなるに、法律の手をして我を縛せしむる如きはいかでか我が爲し得るところならんや。政治上の罪は世人の羨むところと聞けど我は之を喜ばず、一瞬時の利害に拘々として空しく抗する事は余の爲す能はざるところなればなり。我は識らず我は悟らず如何なる罪によりて繫縛の身となりしかを。

然れども事實として我は牢獄の中にあるなり。今更に歲の數を算ふるもうるさし、兎に角に我は數尺の牢獄に禁籠せられつゝあるなり。我が投ぜられたる獄室は世の常の獄室とは異なりて、全く世を孤寂に委せり、古代の獄吏も近世の看守も我が獄室を守るものにあらず。我獄室の構造も大に世の監獄とは差へり、先づ我が坐する、否坐せしめらるゝ所といへば天然の巖石にして、余を圍むには堅固なる鐵塀あり、余を繫ぐには鋼鐵の連鎖あり、之に加ふるに東側の巖端には危ふく懸れる倒石ありて我を脅かし、西方の鐵窓には巨大なる惡蛇を住ませて我を怖れしめ、前面には猛虎の檻ありて我室内に向けて戸を開きあり、後面には彼の印度あたりにありといふ毒蝮の尾の鈴、斷間なく我が耳に響きたり。

我は生れながらにして此獄室にありしにあらず。もしこの獄室を我生涯の第二期とする

を得ば我は慥かに其一期を持ちしなり。その第一期に於ては我も有りと有らゆる自由を有ち、行かんと欲するところに行き、住まはんと欲する所に住みたしなり。われはこの第一期と第二期との甚だ相懸絶する者なる事を知る、即ち一は自由の世にして他は牢囚の世なればなり、然れども斯くも懸絶したるうつりゆきを我は識らざりしなり、我を囚へたるものの誰なりしやを知らざりしなり、今にして思へば夢と夢とが相接續する如く我生涯の一期と二期とは憒々たる中にうつりかはりたるなるべし、我は今この獄室にありて想ひを現在に寄すること能はず、もし之を爲すことあらば我は絶望の淵に臨める嬰兒なり、然れども我は先きに在りし世を記憶するが故に希望あり、第一期といふ名稱は面白からず、是を故郷と呼ばまし。然り故郷なり、我が想思の注ぐところ、我が希望の湧くところ、我が最後をかくるところ、この故郷こそ我に對して我が今日の牢獄を厭はしむる者なれ、もしわれに故郷なかりせば、我は此獄室をもて金殿玉樓と思ひ了しつゝ樂しき娑婆世界と歡呼しつゝ、五十年の生涯誠に安逸に過ぐるなるべし。

我は我天地を數尺の大さと看做すなり、然れども數尺と算ふるも同じく人間の業なり、要するに天地の廣狹は心の廣狹にありて存するなり、然るに怪しくも我は天地を數尺の廣さとして已れが坐するところを牢獄と認む、

然り牢獄なり、人間の形せる獄吏は來らずとも折々に見舞ひ來るもの是れ一種の獄吏に他ならず、名譽是なり、權勢是なり、富貴是なり、榮達是なり、是等のもの我に對する異樣の獄吏にてあるなり。

彼等は我に對しては獄吏と見ゆれども、或一部の人には天使の如くにあるなり。彼等が人々を折檻する時に人々は無上の快樂を感ずるなり、我眼曇れるか彼等の眼盲ひたる乎、之を斷ずる者は誰ぞ。

デンマルクの狂公子を通じて沙翁の歌ひたる如くに我は天と地との間を這ひめぐる一痴漢なり。崇重なる儀容をなし、威嚴ある容貌を備へ、能く談じ、能く解し、能く泣き、能く笑ふも人間は遂に何のたはれごとなるべきやを疑へり、然り我が五十年の生涯に萬物の靈長として傲るべき日は幾日あるべき、我は我を卑うするにあらず、我自ら我を高うせんとするにもあらず、唯我が本我のいかに莊嚴を飾らしむるも遂に自を欺くに忍びざるなり。

我は如何に禪僧の如くに悟つてのけんと試むるとも、我が心宮を觀ずること甚深なればなるほど我は到底悟つてのけること能はざるを知る、風流の道も我を誘惑する事こそあれ我をして心魂を委ねて趣味と稱する魔力に妖魅せらるゝに甘んぜしめず。常に謂へらく人間はいかにいかなる高尙の度に達するとも畢竟するに或種類の偶像に甚弄せらるゝに過ぎ

ず、悟るといふも悟ること能はざるが故に悟るなり、もし悟るといふことを全然悟らざるといふ事に比ぶれば多少は靜平にして澹乎たる妙味ありと雖是も一種の階級のみ、人間は遂に多く辯ぜざれば多く默し、多く泣かざれば多く笑ひ、一の偶像に就かざれば他の偶像を禮す、一の獄吏に笞責せられざれば他の獄吏の笞責に遭ふ、これも是非なし、獄吏と天使とを識別すること能はざる盲眼をいかにせむ。

奇しきかな我は吾天地を牢獄と觀ずると共に我が靈魂の半塊を牢獄の外に置くが如き心地することあり。牢獄の外に三千乃至三萬の世界ありとも我には差等なし、我は我牢獄以外を我が故郷と呼ぶが故に我が想思の趣くところは廣濶なる一大世界あるのみ、而して此大世界にわれは吾が悲戀を湊中すべき者を有せり。捕はれてこの牢室に入りしより凡ての記憶は霧散し去り、已れの生年をさへ忘じ果てたるにも拘はらず我は一個の忘ずること能はざる者を有せり、啻に忘ずること能はざるのみならず數學的乘數を以て追々に廣がり行くとも消ゆることはあらず、木葉は年々歲々新まり行くべきも我が悲戀は新たまりたることはなくしていや茂るのみ、江水は時々刻々に流れ去れども我が悲戀はよどみよどみて漫漫たる洋海をなすのみ、不思議といふべきは我戀なり。

もし我が想中に立入りて我戀ふ人の姿を尋ぬれば我は誤りたる報道を爲すべきにより、

言はぬ事なり言はぬ事なり、雷音洞主が言へりし如く我は彼女の三百幾つと數ふる何の骨を愛づると云ふにあらず、何の皮を好しと云ふにあらず、おもしろしと云ふにあらず、樂ひて彼女の中に入り、彼女の靈魂の半部と相見し第一回の會合に於て我靈魂は其半部を失とを有し、彼女も我が半部と彼女の半部とを有することゝなりしなり。然れども彼女は彼女の半部と我の半部とを以て彼女の靈魂となすこと能はず、我も亦た我が半部と彼女の半部とを以て我靈魂と爲すこと能はず、この半截したる二靈魂が合して一になるにあらざれば彼女も我も圓成せる靈魂を有するとは言ひ難かるべし。然るに我はゆくりなくも何物かの手に捕はれて窄々たる囚牢の中にあり、もし彼女をして我と共にこの囚牢の中にあらしめばこの囚牢も囚牢にあらずなるべし。否な彼女とは言はず、前にも言へりし如く我が彼女を愛するは其骨にあらず其皮にあらず、其魂にてあれば我は其魂をこの囚牢の中に得なむと欲ふのみ。

日光を遮斷する鐵塀は比しく彼女をも我より離隔して雁の通ふべき空もなし、夢てふものの世にたのむべきものならば我は彼女と相談る時なきにあらず、然れどもその夢もはかなや始めて我をたばかりて後にはおそろしき惡蛇の我を捲きしむるに終る事多し。眠りを甘

きものと昔しの人は言ひけれど我は眠りの中に熱汗に浴することあり。或時は我手して露の玉に濕ふ花の頭をうち破る夢を見、又た或時は春に後れて孤飛する雌蝶の羽がひを我が杖の先にて打ち落す事もあり、かつて暴らかりしものを彼女に會ひてより和らげられし我が心も度々の夢に虎伏す野に迷ひ獅子吼ゆる洞に投げられしより再び暴れて暴れて我ながらあさましき心となれり。眠りはしかく我に頼みなき者となりしかど、もし現の味氣なきに較ぶれば欺かるゝ丈も慰められるゝひまあるなり。

現に於ける我が悲戀は雪風凛々たる冬の野に葉落ち枝折れたる枯木のひとり立つよりも激しかるべし。然り、我は已に冬の寒さに慣れたり、慣れしと云ふにはあらねど我はこれに怖るゝ心を失ひたり、夏の熱さにも我は我が腸を沸かす如きことは無くなれり、唯だ我九腸を裂きて又た裂くものは我が戀なり、戀ゆゑに悶ゆるにあらず牢獄の爲に悶ゆるなり、我は籠中にあるを苦しむよりも我が半魂の行衛の爲に血涙を絞るなり。雷音洞主の風流は愛戀を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり、然れども我が不風流は牢獄の中に捕繋せられて然る後に戀愛の爲に苦しむ、我が牢獄は我を殺す爲に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死することを愛ひとはせざれども我をして死す能はざらしむるもの則ち戀愛なり、而して彼は我を生かしむることをもせず、空しく我をして彼のデンマルク の狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち嘲たしむるのみ。

春や來しと覺ゆるなるに、我牢室を距ること數歩の地に黄鳥の來り鳴くことありて我耳を奪ひ我魂を奪ひ、我をしてしばらく故郷に歸り戀人の家に到る思ひあらしむ。その聲を我が戀人の聲と思ふて聽く時に戀人の姿は我前にあり、一笑して我を惱殺する昔日の色香は見えず、愁涙の蒼頬に流れて紅ゐ欄干たるを見るのみ。

軒端數分の間隙よりくゞり入るは世の人の嬉娯とかあだなすなる天女なれども、我が意中人の音信を傳へ入るゝことをなさねば我は振りかへり見ることもせず。いづこの庭にうゑたる花にやあらむ折にふれては妙なるかをりを風がもて來ることもあれど、我が戀ふ人の魂をこゝに呼び出すべき香にてもなければ要もなし。氣まぐれものゝ蝙蝠風勢が我が寂寥の調を破らんとてもぐり入ることもあれど、捉へんには竿なし、好し捉ふるとも我が自由は彼の自由を奪ふことによりて回復すべきにあらず、況して我戀人の姿をこの見苦しき半獣半鳥よりうつし出づることの望むべからざるをや。

是の如きもの我牢獄なり、是の如きもの我戀愛なり、世は我に對して害を加へず、我も世に對して害を加へざるに我は斯く籠囚の身となれり。我は今無言なり、膝を折りて柱に倚れ齒を咬み眼を瞑しつゝあり。知覺我を離れんとす死の刺は我が後に來りて機を覗へり。

死は近づけり。然れどもこの時の死は生よりもたのしきなり。我が生ける間の「明」より も今ま死する際の「薄闇」は我に取りてありがたし。暗黑！　暗黑　我が行くところは 關り知らず死も亦た眠りの一種なるかも。「眠り」ならば夢の一つも見ざる眠りにてあれよ。 おさらばなり、おさらばなり。

蓮華草

咲くも迅し散るも迅し春の花、たのしみしも速しかなしみしも速し人の戀。定まりなき世に定まりあるものを求め、心なきものに心あらんことを願ふ人の迷ひのはかなさよ。

村雨は空に宿なきものか、など人の袂を犯すこと多き。ぬるゝことをたのしむ燕ならば雨の中をいとはまじ、美くしく濁りなき優しの魂に、その雨のかゝりがちなるは何たる事ぞ。訝かれば訝かるべし世のならひ、何の譬ぞ美と醜とは。

友と連立ちて廣尾に遊びたるは一村雨を讀みたる同じ日なり。野面を見渡すかぎり美くしきむしろを布きつめたる花の心はさていかに。誰が爲めに？　造化は汝にありて至美を

あらはすに汝は虚心にて野にかゞやくか、またはつむ人の手を招き寄せて自ら散るを早むるか、摘む人に罪ありと言はゞ摘まゝる者にも罪はあるべし。兎角野の奥の、人の浮かれ來ぬあたりに咲ける花やめでたかるべし。

摘むものに眞心あれかし摘まるゝものにもまことあれよと祈るなり。花は散るべしいつまでか戀の影に人は迷はむ。春の魅力長かれと願ふは愚なり、花は散るべき時に惜しむべからず、花は散るとも人のまことは常にのこるべし。造化の美を宿す汝は幸なるかな、然はあれども汝が美は汝の皮膚にありと思ふなかれ、皮膚の全く腐爛して後に汝にのこるべきものあり、これぞ我が慕ふ美なるぞかし。われは汝が靈の涙をもてひとつ〳〵の珠と爲すものにあらず、吾は汝が聲をもて悉く天女の樂なりとする者にあらず、唯だ折々に汝の中懐より溢れ出づる造化の美を見る時に汝を天界のものと崇む、わが戀は卽ち是なり。

村雨の汝が袂に降り易きは是非もなし、降らば降らせよ心なき世に心ありとは思ひたがへそ、恨みは人にあり天には何をか咄つべき。この世は譬にあらず、まことなり、譬の中にまことを見るが智なるべし。摘むものにも摘まるゝものにも天は拘はるところなし、心せよ摘む者と摘まるゝもの。散らぬ間を儚り顏なる花も散るべき花に迷ひ浮るゝものも同じく春に翫弄ばるゝなり、うたてやな。

蝶のゆくへ

舞ふてゆくへを問ひたまふ、
　心のほどぞうれしけれ、
秋の野面をそこはかと、
　尋ねて迷ふ蝶が身を。
行くもかへるも同じ關、
　越え來し方に越えて行く。
花の野山に舞ひし身は、
　花なき野邊も元の宿。
前もなければ後もまた、
　「運命（かみ）」の外には「我」もなし。
ひら〳〵〳〵と舞ひ行くは、
　夢とまことの仲間（なかま）なり。

雙蝶のわかれ

ひとつの枝に雙（ふた）つの蝶、
羽を收めてやすらへり。
露の重荷に下垂るゝ、
　草は思ひに沈むめり。
秋の無情に身を責むる。
　花は愁ひに色褪めぬ。

言はず語らぬ蝶ふたつ。
齊しく起ちて舞ひ行けり。
うしろを見れば野は寂（さび）し、

　前に向へば風冷し。
過ぎにし春は夢なれど、
　迷ひ行衛は何處ぞや。

同じ恨みの蝶ふたつ。
重げに見ゆる四の翼（よつはね）。
雙び飛びてもひえわたる、
　秋のつるぎの怖ろしや、
雄（を）も雌（め）も共にたゆたひて。
　もと來し方へ悄れ行く。

もとの一枝（ひとえ）をまたの宿、
暫しと憩ふ蝶ふたつ。
夕告（ゆふつ）げわたる鐘の音に、
　おどろきて立つ蝶ふたつ。
こたびは別れて西ひがし、
　振りかへりつゝ去りにけり。

みゝずのうた

この夏行脚して廻りありきけるとき、或朝ふとおもしろき草花の咲けるところに出でぬ。花を眺むるに餘念なき時、わが眼に入れるものあり、これ他の風流漢ならずして一蚯蚓なり。おかしきことありければ記しとめぬ。

わらぢのひものゆるくなりぬ、
まだあさまだき日も高らかに、

ゆふべの夢のまださめやらで、
忙がしきかな吾が心、さても雲水の
身には恥かし夢の跡。

つぶやきながら結び果てゝ立上り、
歩むとすれば、いぶかしきかな、
われを留むる、今を盛りの草の花、
我魂は先づ打ち入りて物こそ忘れめ
この花だにあらばうちもえ死なむ。

そこ這ふは誰ぞ、わが花の下を、
答へはあらず、はひまはる、
わが花盗む心なりや、己くせもの、
思はずこぶしを打ち擧げて

うたんとすれば、「やよしばし。
「おのれ地下に棲みなれて
花のあぢ知るものならず、
今朝わが家を立出でゝより、
あさひのあつさに照らされて、
今唯だ歸らん家を求むるのみ。

「おのれは生れながらにめしひたり、
いづこをば家と定むるよしもなし。
朝出る家は夕べかへる家ならず、
花の下にもいばらの下にも
わが身はえらまず宿るなり。

「おのれ生れながらに鼻あらず、

人のむさしといふ處を己は知らず。
人のちりあくた捨つるところに
われは極樂の露を吸ふ、
こゝより樂しきところあらず。

「きのふあるを知らず
あすあるをあげつらはず、
夜こそ物は樂しけれ、
草の根に宿借りて
歌とは知らず歌うたふ。」

やよやよみゝず說くことを止めて
おのがほとりに仇あるを見よ、
智慧者のほまれ世に高き

蟻こそ來たれ、近づきけれ、
心せよ、いましが家にゆるぎ行きぬ。

「君よわが身は仇を見ず、
さはいへあつさの堪へがたきに、
いざかへんなん、わが家に、
そこには仇も來らまじ、安らかに、
またひとねむり貪らん。」

そのこといまだ終らぬに、
かしこき仇は早や脊に上れり、
こゝを先途と飛び躍る、
いきほひ猛し、あな見事、
仇は土にぞうちつけらる。

あな笑止や小兵者、
今は心も強しいざまからむ。
うちまはる花の下、
惜しやいづこも土かたし、
入るべき穴のなきをいかん。

またもや仇の來らぬうちと
心せくさましほらしや、
かなたに迷ひ、こなたに惑ひ、
ゆきてはかへり、かへりては行く、
まだ歸るべき宿はなし。

やがて痍(いたみ)もをちつきし
敵はふたゝびまとひつく、
こゝぞと身を振り跳ねをどれば、
もろくも再びはね落され、
こなたを向きて後(あと)退さる。

二つ三つ四ついつしかに、敵の數の、
やうやく多くなりけらし、
こなたは未だ家あらず、
敵の陣は落ちなく布きて、
こたびこそはと勇むつはもの。

疲れやしけむ立留まり、
こゝをいづこと打ち案ず、
いまを機會(しほ)ぞ、かゝれと敵は

むらがり寄るをあはれ悟らず、
たちまち脊には二つ三つ。

振り拂ひて行かんとすれば、
またも寄せ來る新手のつはもの。
踏み止りて戰はんとすれば
寄手は雲霞のごとくに集りて、
幾度跳ねても拂ひつくせず。

あさひの高くなるまゝに、
つちのかわきはいやまして、
のどをうるほす露あらず、
悲しやはらばふ身にしあれば
あつさこよなふ堪へがたし。

受けゝる手きずのいたみも
たゝかふごとになやみを增しぬ
今は拂ふに由もなし、
爲すまゝにせよ、させて見む、
小兵奴らわが脊に群がり登れかし。

得たりと敵は馳せ登り、
たちまちに脊を蓋ふほど、
くるしや許せと叫ぶとすれど、
聲なき身をばいかにせむ、
せむ術なくてたふれしまゝ。

おどろきあきれて手を差し伸れば
パツと散り行く百千の蟻、

はや事果しかあはれなる、
先に聞きし物語に心奪はれて、
救得させず死なしけり。
ねむごろに土かきあげ、
塵にかへれとはうむりぬ。
うらむなよ、凡そ生とし生けるもの
いづれ塵にかへらざらん、
高きも卑きもこれを免(のが)れじ。

起き上ればこの悲しさを見ぬ振に、
前にも増せる花の色香。
汝(いまし)もいつしか散らざらむ、
散るときに思ひ合せよこの世には、
いづれ絶えせぬ命ならめや。

月前の柳

まねく手はほそくたゆめど空とぼく
なびかぬ月のうらめしきかな

花間蝶

心ありやなしやはしらず花のうちに
うさをはなれぬ蝶ぞゆかしき

雨後の花

雨すぎてうらめしげなる花のおも
ちるまで友とちぎらざりしに
あさしとな契りとがめそうきよには
はなれがたきもはなれやすきを

萬物の聲と詩人

萬物自ら聲あり。萬物自から聲あれば自ら又た樂調あり。蚯蚓は動物の中に於て醜にして且つ拙なるものなり。然れども夜深々窓に當りて斷續の音を聆く時は、人をして造化の生物を理する妙機の驚くべきものあるを悟らしむ。自然は不調和の中に調和を置けり。悲哀の中に欣悦を置けり。運命は人を脅かすなり、而して人を驅つて怯懦卑劣なる行爲をなさしむるなり。情慾は人を誘ふなり、而して人を率ゐて我儘氣隨のものとなすなり。自然は廣漠たる大海にして人生は延々たる浮島に似たり。風浪常時に四圍を襲ひ來りて寧靜なる事は甚だ稀なり。四節は追はずして駿馬の如くに奔馳し、草木の榮枯は輪なくして廻轉する車の如し。自然は常變なり須臾も停滯することあるなし。自然は常動なり須臾も寂靜あることなし。自然は常爲なり須臾も無爲あることなし。その變、その動、その爲、各自一個の定法の上に立てり、而して又た根本の法ありて之を支配するを見る、淵に臨みて靜かに水流の動靜を察するに、行きたるものは必ず反へる、反へれるものは必ず行く。若きもの必ず老ゆ、生あるもの必ず死す。苦あるものに樂あり、樂

あるものに苦あり。造化は偏頗にして偏頗にあらず、私にして無私なり。差別の底に無差別あり。不平等の懐に平等あり。然り、造化の妙機は祕して其最奥にあるなり。人間の最奥なるところ之を人間の空と言ひ、造化の最奥なるところ之を造化の靈と言ふ。造化の最奥！造化の靈！そこに大平等の理あるなり。そこに天地至妙の調和あるなり。人間はいかほどに卑しく拙なくありとも、天地至妙の調和は之によりて毀損せらるゝことなきなり。あはれこの至妙の調和より、萬物皆或一種の聲を放ちつゝあるにあらずや。

形の醜美を見て直ちに其醜美を決するは未だ美を判ずるの最後にあらず。外極めて醜なるものにして、内極めて美なるものあり。外極めて美にして、内極めて醜なるものあり。醜と美とを分つは必ずしも其形象に關はるにあらざるなり。形體にあらはれたる醜美を斷ずるは獨り眼眸のみ。眼眸は未だ以て醜美を斷ずる唯一の判官となすべきにあらず。鼓膜亦た關つて力あるべきものなり。否、否、眼眸も鼓膜も未だ以て眞に醜美を判ずべきものにあらざるなり。凡そ形の美は心の美より出づ。形は心の現象のみ。形を知るものは形なり、心を視るものは又た心ならざるべからず。造化は奇しき力を以て、萬物に自からなる聲を發せしむ、之を以て聊かその心を形狀の外にあらはさしむ、之を以てその情を語らしむ、之を以てその意を言はしむ。無絃の大琴懸けて宇宙の中央にあり。萬物の情、萬物の

心、悉くこの大琴に觸れざるはなく、悉くこの大琴の音とならざるはなし。情及び心、一一其軌を異にするが如しと雖、要するに琴の音色の異なるが如くに異なるのみにして、宇宙の中心に懸れる大琴の音たるに於ては均しきなり。個々特々の悲苦及び悦樂、要するにこの大琴の一部分のみ。悲しき時は獨り悲しむが如くなれども、然るにあらず、凡てのものの悲しむなり、喜ぶ時は獨り喜ぶが如くなれども然るにあらず凡てのもの〻喜ぶなり。「自然」は萬物に「私情」あるを許さず私情をして大法の外に縱なる運行をなさしむることあるなし。私情の喜は故なきの喜なり、私情の悲は故なきの悲なり、彼の大琴に相渉るところなければ、根なき萍の海に漂ふが如きのみ。情及び心、個々特立して而して個々その中心を以て、宇宙の大琴の中心に聯なれり。海も陸も、山も水も、ひとしく我が心の一部分にして、我れも亦た渠の一部分なり。渠も我も何物かの一部分にして歸するところ卽ち一なり。四節の更迭は、少老盛衰の理と果して幾程の差違かあらむ。樹葉の凋落は老衰の末後と如何の異別かあらむ。花笑ふ時に我も笑ひ、花落つる時に我も落つ、實熟する時に我も熟し實墜つる時に我も墜つ。渠を支配する引力の法は卽ち我を支配する引力の法なり。渠を支配する生命の法は卽ち我を支配する生命の法なり。渠と我との間に「自然」の前に立ちて甚しき相違あることなし。法は一なり。法に順ふものも亦た一なり。法と法に順ふもの

との關係も亦た一なり。情及び心、漠として捕捉すべきやうなき如き情及び心、渠も亦た法の中にあり、渠も亦た法の下にあり。法の重きこと斯の如し。斯に於て、凡ての聲、情及び心の響なる凡ての聲の一致を見る、高きも低きも、濁れるも清めるも、然り此の一致あり、この一致を觀て後に多くの不一致を觀ず、之れ詩人なり。この大平等大無差別を觀じて而して後に多くの不平等と差別とを觀ず、之れ詩人なり。天地を取つて一の美術となすは之を以てなり。あらゆる聲を取つて音樂となすは之を以てなり。詩人の前には凡ての物、凡ての事、悉く之れ詩なるは之を以てなり。多くの不一致の中の一不一致を取り、多くの不平等の中の一不平等を取り、多くの差別の中の一差別を取り、而して之に戀着するを知つて、彼の大一致、大平等、大差別に悟入すること能はざるものは未だ以て天地の大なる詩たるを知らざるものなり。難いかな詩人の業や。

道德を論ずるの書は多し。宗教の名と其の教法を說くものは多し。然れども道德は未だ人間をして縱に製作せしむる程に低くならざるなり。宗教も亦た人間をして隨意に料理せしむる程に卑しくならざるなり。道德の底に一の道德あり、宗教の底に一の宗教あるは、美術の底に一の美術あると相異なる所なからんか。要するにモーラリチーは一なるのみ。政治的に所謂道德なりとするところの者例せば儒教の如きもの未だ以てモーラリチーの本

然と言ふべからず。宗派的に所謂道德なりとするところのもの未だ以てモーラリチーの本然と言ふべからず。宗教の中の宗教とすべきはその人性人情に感應する所多きにあり。モーラリチーも亦た然らんか。美術も亦た然らんか。畢竟するに宗教も美術も人心の上に臨める大感化力なるに於ては相異なるところあるなし。然れどもラスキンの言へる如く、美術は道義を圓滿にするの力を有すれども、宗教の如く道義を創作することは能はず。宗教の天啓たるが如く、美術も亦た一種の天啓なり。宗教の高尙なる使命を帶びたる如くに美術も亦た高尙なる使命を帶べり。ヒューマニチーは其の唯一の目的なり。無より有を出すにあらず。有を取りて之を完ふするものなり。尤も劣等なる動物より尤も高等なる動物を作るにあらず、尤も高等なる動物をして、その高等なる所以を自覺せしめ、その高等なる職分を成就せしむるにあり。宇宙の存在は微妙なる階級の上に立てり。一點之を傷くるあれば必ずその責罰としての不調和あり。之れ卽ち調和の中に戰へる不調和の原意（エレメンツ）ある所以なり。微妙なる階級微妙なる秩序、これありて萬物悉く其の處を安んずるを得るなり。東に吹く風は再び西に吹き來る、氣燥くところに雲自から簇まるなり、雲は雨となり、雨は雲となる、是等のもの一として宇宙の大調和の爲に動くところの小不調和にあらざるはなし。萬づの事皆な空にして法のみ獨り實なり、法のみ獨り實にして法に遵ふところの萬

物皆な實なるを得べし。自然は常變にして不變、常動にして不動、常爲にして無爲、法の眼に於て然り。

宗教完全にして美術も亦た完全ならんか、美術と宗教と相距ること數歩を出でざるなり。然れども宗教にしていつまでも乾燥なる神學的の論據に立籠らんか、美術も亦た己がじゝなる方向に傾かんとするは當然の勢なり。宗教の度と美術の度とは殆ど一種の比例をなせり。國民の美術は到底その倫理の表象なり。野卑なる國は卑野なる美術に甘んじ、高尚なる國民は高尚なる美術を求む、勇敢なる國民に勇武の物語出で淫逸なる國民には淫逸なる史乘あり。畢竟ずるに萬物その自からなる聲をなして、而して美術はその聲を具體にしたるものに過ぎざれば、形は如何にありとも、その聲の主なる心にして卑野なれば美術も卑野ならざらんと欲して得べからざるは至當の理なり。宇宙の中心に無絃の大琴あり、すべての詩人はその傍に來りて、己が代表する國民の爲に己が成育せられたる社會の爲に、百種千態の音を成すものなり。ヒユーマニチーの各種の變狀は之によりて發露せらる。眞實にして虚飾なき人生の説明者はこの琴絃の下にありて、明々地にその至情を吐く、その聲の悲しき、その聲の樂しき、一々深く人心の奥を貫ぬけり。詩人は己の爲に生くるにあらず、己が圍まれるミステリーの爲めに生れたるなり、その聲は己の聲にあらず己を圍める

小天地の聲なり、渠は誘惑にも人に先んじ、迷路にも人に後るゝなし、渠は無言にして常に語り無爲にして常に爲せり、渠を圍める小天地は悲をも悦をも、彼を通じて發露せざることなし。渠は神聖なる蓄音器なり、萬物自然の聲、渠に蓄へられて而して渠が爲に世に啓示せらる。秋の蟲はその悲を詩人に傳へ、空の鳥は其自由を詩人に告ぐ。牢獄も詩人は之を辭せず、碧空も詩人は之を遠しとせず、天地は一の美術なり、詩人なくんば誰か能く斯の妙機を闡いて之を人間に語らんか。

國民と思想

思想上の三勢力

一國民の心性上の活動を支配する者三あり、曰く過去の勢力、曰く創造的勢力、曰く交通の勢力。

今日の我國民が思想上に於ける地位を詳らかにせんとせば、少なくとも右の三勢力に訴へ、而して後明らかに其關係を察せざる可からず。「過去」は無言なれども能く「現在」の上

に號令の權を握れり。歴史は意味なきペーヂの堆積にあらず、幾百世の國民は其が上に心血を印して去れり、骨は朽つべし、肉は爛るべし、然れども人間の心血が捺印したる跡は之を抹すべからず。秋果熟すれば卽ち落つ、落つるは偶然にして偶然にあらず、春日光暖かにして、百花妍を競ふ、之も亦偶然にあらずして自然は意味なきに似て大なる意味を有せり、一國民の消長窮達を言ふ時に於て、吾人は深く此理を感ぜずんばあらず。引力により て相繫纏する物質の力、自由を以て獨自卓犖たる精神の力、この二者が相率ゐ、相爭ひ、相呼び、相結びて、幾千幾百年の間、一の因より一の果に、一の果より他の因に、轉々化し來りたる跡豈に一朝一夕に動かし去るべけんや。

然れ共「過去」は常に死に行く者なり。而して「現在」は恒に生き來るものなり。「過去」は運命之を抱きて幽暗なる無明に投じ、「現在」は暫らく紅顏の少年となりて、希望の袂に縋る。一は死し、一は生く、この生々死々の際一國民は時代の車に乘りて無盡無絶の長途を輪轉す。

何れの時代にも、思想の競爭あり、「過去」は現在と戰ひ、古代は近世と爭ふ、老いたる者は古を慕ひ、少きものは今を喜ぶ。思想の世界は限りなき四本柱なり。梅ヶ谷も爰にて其運命を終りたり、境川も爰にて其運命を定めたり、凡そ爰に登り來るもの必ず又た爰を

去らざる可からず。この世界には永久の桂冠あると共に永久の義罰あり。この世界には曾つて沈靜あることなく、時として運動を示さゞるなく、日として代謝を告げざるはなし。主觀的に之を見る時は、此の世界は一種の自動機關なり、自ら死し、自ら生き、而して別に自ら其の永久の運命を支配しつゝあるものなり。

一國民に心性上の活動あるは、自由黨あるが故にあらず、改進黨あるが故にあらず、彼等は劇場に演技する優人なれども、別に書冊の裡に隱れて、彼等の爲に臺帳を制する作者あるなり。偉大なる國民には必ず偉大なる思想あり。偉大なる思想は一擧手一投足の間に發生すべきにあらず、寧んぞ知らん、一國民の耐久的修養の力なるものを俟つにあらざれば、蓊鬱たる大樹の如き思想は到底期すべからざるを。

過去の勢力は之を輕んずべからず、然れども徒らに過去の勢力に頑迷して、乾枯せる歴史の槁木に夢醉するは豈に國民として、有爲の好徴とすべけんや。創造的勢力は何れの時代にありても之を缺く可からず。國民の生氣は、その創造的勢力によつてトするを得べし。尤も多く保守的なる時、尤も多く固形的なる時、國民は自然に墳墓を眺めて進みつゝある なり、創造的勢力は、潮水を動かして、前進せしむるもの、之なくては國民豈に進歩的生氣あらんや、動あらんや。

創造的勢力と馬を駢べて、相馳驅するものあり、之を交通の勢力とす。今や、思想に對する世界は日一日より狹くなり行かんとす、東より西に動く潮あり、西より東に流るゝ潮あり、潮水は天然なり、人工を以て之を支へんとするは凝人の夢に類するものなり。東西南北は、思想の側（サイズ）のみ、思想の城郭にあらざるなり。思想の最極は圓環なり。叨りに東洋の思想に執着するも愚なり、叨りに西洋思想に心醉するも癡なり、奔流急湍に舟を行るは難し、然れども舟師は能く富士川を下りて、船客の心を安ふす、富士川を下るは難し、然れどもその尤も難きは東西の二大潮が狂湧猛瀉して相衝突するの際にあり。此際に於て、能く過去の勢力を無みせず、創造的勢力と、交通の勢力とを、鐵鞭の下に驅使するものあらば、吾人は之を國民が尤も感謝すべき國民的思想家なりと言はんと欲す。

つら〳〵今の思想界を見廻せば、創造的勢力は未だ其の絃を張つて箭を交ふに至らず、却つて過去の勢力と外來の勢力とが、勢を較して陣前馬頻りに嘶くの聲を聞く、戰士の意氣莊だ昂揚して、而して民衆は就く所を失へるが如き觀なきにあらず。

見よ詩歌の思想界を嘲るものは、その餘りに狹陋にして硬骨なきを笑ふにあらずや。見よ、政治を談ずるものは、空しく論議的の虛影を追隨して停まるところを知らざるにあら

ずや。見よ、デモクラシーは宿昔の長夜を攪破せんとのみ悶き、アリストクラシーは急潮の進前を妨敬せんとのみ噪ぐにあらずや、斯の如き事たる素より今の思想界の必當の運命たるべしと雖、心あるもの陰に前途の濃雲を憂ふるは又た是非もなき事共かな、今の思想界は實に斯の如し、徒らに人間の手を以て造化の力を奪はんとする勿れ、進むべき潮水は遠慮なく進むべし、退くべき潮水は顧盼なく退くべし、直ちに馳せ直ちに奔り、早晩大に相撞着することあるを期すべし、知らずや斯かる撞着の眞中より新たに生氣勃々たる創造的勢力の釀生し來るべき理あるを。

姉と妹

某の村に某の家あり、三千年の系圖ありと誇稱す。この家近き頃までは、全村の舊家として勢威赫々として犯すべからざるものありて存せり。然れども是れ山間の一小村にして四圍層巒を以て繞らし、自然に他村と相隔絶したるの致せしのみ。今を距ること三十年、一度び他村との交通を開きてより、忽ち衰廢して前日の强盛は夢の如く泡の如く、再び回へすべからざるものとなりぬ。この家に二個の娘子あり、姉は幼なきより隣村の某家に養はれて人と成るまで家に歸らず、渠の養はれし家は寶貨充實生を理する事一々其機に投ぜざるなし、之を以て彼の芳紀正に熟するや、豐頰秀眉一目人を眩するの態あり。或時人に

伴はれて其の實家に歸り、その妹を見しに風姿は聊も毀損するところなけれど自ら痩弱に
し顏色も光澤を缺けり。姉は頻りに己の美貌を以て妹に誇負するところあらんとす、妹即
ち曰く、爾は體健かに美形なりと雖、他家に寓して人となれり。我は體弱く形又た醜くし
と雖、祖先の家を守りて暫らくも愛を離れず、誇るべきところ我にあり、何ぞ爾の下にあ
らんやと。

姉の頭には、、、、、、(、、、、)と云へる銀簪燦然たり。インヂビヂュアリズム（個人
制）といへる花釵きらめけり、クリスチアンモラリチーも亦た飾られたり、眞に之れ絶世
の美人なり。而して妹の頭には、祖先の血によりて成りたる毛髪の外何の有るなし。妹の
形は悄然たり、姉の面は嬌妖たり。妹の未來は悲觀的なり。姉の將來は希望的なり。姉を
娶らんか、姉を招かんか。國民よ少しく省みよ、爾の中に爾の生氣あらば、爾の中に爾の
希望あらば、爾の中に爾の精神あらば、安くんぞ此の婚嫁によつて爾の大事を決せんとす
るを要せむ。この二娘子の一を娶らざるべからずと信ずる勿れ。止むなくんば多妻主義と
なりて、この二娘を合せ娶れよ。汝はこの婚嫁によりて爾の精神を失迷せしむべからず。
然り、爾に大なる元氣(Genius)の存するあり、一夫一妻となるも、一夫多妻となるも、
爾の元氣に於て若し損するなければ、爾は希望ある國民なり。

國民の一致活動

凡そ一國民として缺く可からざるものは、其の一致的活動なり。活動、われは之を心性
の上に於て云ふ。政事的活動の如きは我が關り知る所にあらざればなり。凡そ心性の活動
あらずして外部の活動あるはあらず、思想先づ動きて動作生ず、ルーソーあり、ボルテー
ルあり、而して後に佛國の革命あり。國民の鞏固なる勢力は、必ず一致したる心性の活動
の上に宿るものなり。此點より觀察すれば、國民の生命を證するもの實に其制度の舞臺に
於て能く國民を一致せしむるあると否とに存せり。何を以て國民に心性上の結合を與へ
ん。如何なる主義を以て此の目的に適ひたるものとせん。如何なる信條を以て此の目的に
合ひたるものとせん。吾人は多言を須ひずして知る、尤も多く彼等を敎ふるもの、尤も多
く最多數の幸福を圖るもの、尤も多く人間の運命を示すもの、卽ち此目的に適合する事尤も多き者なるを。斯の如く余はインヂビジュア
リズムの信者なり、、、、、、の敬愛者なり。然れども、

國民の元氣

國民の元氣は一朝一夕に於て轉移すべき者にあらず。其の源泉は隱れて深山幽谷の中に
有り、之を索むれば更に深く地層の下にあり、砥の如き山、之を穿つ可からず、安くんぞ

國民の元氣を攫取して之を轉移することを得んや。思想あり、思想の思想あり、而して又た思想の思想を支配しつゝきものあり、一國民は必ず國民と成すべき丈の精神を有すべきなり、之に加ふるに藪醫術を以てし、之を率ぶるに輕業師の理論を以てするとも、國民は頑として之に從ふべからざるなり。渠を圍める自然は渠に與ふるに天然の性情を以てし、渠に賦するに、特異の性格を以てす、是等の性情、是等の性格は幾千年の間その國民の活動の泉源たりしなり、その國民の精神の滿足たりしなり、國民も亦た一個の活人間なり、その中に意志（ウイル）あり、その中に自由（リバーチー）を求むるの念あり、國家てふ制限の中に在て其の意志の獨立を保つべき傾向を有せずんば非らず。伊太利は如何に斧鉞を加へて盛衰興亡の運命を悟らしむるも其の伊太利たるは依然として同じ、獨逸も亦た斯の如し、佛蘭西も亦た斯の如し。國民の元氣の存する處に其の豫定の運命あり。死すべきか、生くべきか、嗚呼一國民も亦た無常の風を免れじ、達士世を觀ずる時宜しく先づ命運の歸するところを鑑むべし、若し我が國民にして、果して秋天霜滿ちて樹葉、黃落の曉にありとせんか、須らく男兒の如く運命を迎ふべし、然り須らく男兒の如く死すべし、國民も亦た其の天職あるなり、其の威嚴あるなり、其の死後の名あるなり、其の生前の氣節あるなり。之を破らず之を折らず、而して能く生存競爭の國際的關係を全ふし得るの道ありや否や。

、、、、、、（、、、、）を以て、我國民に適用し、根本の改革をなさんとするが如きは、極て雄壯なる思想上の大事業なり。吾人は其の成功と不成功とを論らはず、唯だ世人が如何に冷淡に此の題目を看過するかを怪訝しつゝある者なり。吾人は寧ろ進歩的思想に與するものなり、然りと雖、進歩も自然の順序を履まざる可からず、進歩は轉化と異なれり、若し進歩の一語の裡に極めて危險なる分子を含めることを知らば、世の思想家たる者何ぞ相戒めて、如何に眞正の進歩を得べきやを講究せざる。國民のヂニアスは退守と共に退かず、進歩と共に進まず、其根本の生命と共に、深く且つ牢き基礎を有せり。進歩も若し此れに協はざるものならば進歩にあらず、退守も若し此れに合ざるものならば退守にあらず。

地平線的思想

政事の論議に從事し一代の時流を矯正して民心の歸向を明らかにする思想家、素より偏見僻說を頑守し、衆を以て天下を脅かす的の所謂政事家なるものに比較すべきにあらず。然れども其の說くところ概ね卑近にして、俚耳に入り易きの故を以て人之を俗物と稱す。吾人は、今斯の如き俗物の感化が、今の米國を造り、今の所謂文明國なるものを造るに於て大なる力ありし事を信ずる者なり。凡そ適切なる感化を民衆に施こして、少歲月の中に大なる改革を成就すること、多くは謂ふ所の俗物なるもの〻力にあり、マコーレーも或意

味に於ては俗物なり、エマルソンも或意味に於ては俗物なりしが故にグレートなりしなり。教養（カルチユーア）は素と自然を尊びて眞朴を主とするものなり、古より大人君子の成せしところ蓋し之に過ぐるなきなり、平坦なる眞理は遂に天下に勝つべし、此意味に於て吾人は所謂俗物なるものを崇拜するの心あり。然れども、爰に記憶せざるべからざることあり。世間幾多の平坦なる眞理を唱ふるもの〻中には、平坦を名として濫りに他の平坦ならざるものを罵り、自から謂へらく平坦なるものにあらざれば眞理にあらずと、恰も勳の如き卽ち眞理を見るの眼にあらずして平坦を見るの眼なり。

思想界には地平線的思想と稱すべき者あり、常に人世（アース）の境域にのみ目を注ぎ、社會を改良すと曰ひ國の福利を增すと曰ひ、民衆の意向を率ゆと曰ひ、極て尨雜なる目的と希望の中に働らきつ〻あり。國民は尤も多くの此種の思想家を要す、凡そ此種の思想家なき所には何の活動もなく何の生命もなし、然れども記憶せよ、國民は此種の思想家のみを以て甘んずべきにあらざるを。眞正のカルチユーアを國民に與ふるが爲には、地平線的思想の外に更に一物の要すべきあり。

高蹈的思想

吾人は之を高蹈的思想と呼ぶ、數週前に民友先生が言はれし高蹈派といふ文字と其意味

を同ふするや否やを知らず。吾人は實に地平線的思想の重んずべきをを知ると雖所謂高蹈的思想なるもの〻一日も國民に缺くべからざるを信ずるものなり。ヒューマニチーを人間に傳ふるは獨り地平線的思想の任にあらず、道德は到底固形の善惡論にあらざれば、プラトーの眞善美もミルトンの虛想も、人間をして正當に人間たる位地に進ましむるに浩大なる裨益あることを信ずるなり。ヒューマニチーは社會的義務の爲めのみ存するにあらず。人間の性質（キヤラクター）は倫理道德の拘束によりてのみ建設すべきものにあらず、純美を尋ね、純理を探る、世の詩人たり、學者たる者、優に地平線的思想家の預り知らざる所に於て人類の大目的を成就しつ〻あるにあらずや。

何をか國民的思想と謂ふ

必ずしも國民といふ題目を以て詩歌の材とするを國民的思想といふにあらざるなり。マルセーユの歌に對して製りたる獨逸祖國歌は非常の賞讃を得て一篇の短歌能く末代の名を存せしと聞く、然れども是れ賞讃のみ、喝采のみ、一の國民の私に表せし同情のみ、未だ以て眞正の詩歌界に於ける月桂冠とは云ふべからざるなり。吾人は「早稻田文學」と共に少くとも國民的の思想を得んことを希望すること切なりと雖、世の詩歌の題目を無理遣りに國民的問題に限らんとする輩に向ひては聊か不同意を唱へざる可からず。「國民の友」曾つ

て之を新題目として詩人に勸めし事あるを記憶す、寔に格好なる新題目なり。彼の記者の常に斯般の事に烟眼なるは吾人の私に畏敬する所なれど、世には大早計にも之を以て詩人の唯一の題目なる可しと心得て、叨りに所謂高蹈的思想なるものを攻撃せんとする傾きあるは豈に歎息すべき至りならずや。詩人は一國民の私有にあらず、人類全體の寶匣なり、彼をして一國民の爲に歌はしめんとするの餘りに、彼が全世界の爲に齎らし來りたる使命を傷らしめんとするは、吾人其の是なるを知らず。

然りと雖詩人もまた故國に對する高妙の觀念なきにあらず、邦國の區劃は彼に於て左までの事にはあるまじきが、その天賦の氣稟に於て少くともその國民を代表する所なき能はず。之を以てバイロンは如何にその故國を罵るとも、英國の一民たるに於ては終始變ることろなく深く之を其の著作の上に印せり。之を以てレッシングは佛國の思想がライン河を渉りて縱に其の鄉國の思想を横領するを惡みて大に國民の夢を醒したり。斯く詩人も亦た其の鄉土の愛國者たるは、拔くべからざる天稟の存するあればなるべし。

詩人豈國民の爲にのみ産れんや、詩人豈所謂國民的なる狹少なる偏見の中にのみ限られんや、然れども事實に於て詩人も亦國民の中に生くるものなり。愛國家なり、詩人も亦國民の中に生くるものなり。那翁の侵略に遭ひて國亡び家破れんとするに當て從容として、那翁の玉座に近づき、彼を

して言ふ可からざる敬畏の念を抱かしめたるギョーテが、戰陣に臨みて雜兵の一人となり、尸を原頭に曝さゞるの故を以て國民的ならずと罵るものあらば、吾人は其の愚を笑はずんばあらざるなり。

創造的勢力の淵源

吾人は再び曰ふ、今日の思想界に缺乏するところは創造的勢力なりと。模倣、卑しき模倣、之れ國民の尤も悲しむべき徵候なり、我は英國文學を唱道すと宣言し、我は獨逸文學を唱道すと宣言し、我は佛國文學を唱道すと宣言す、その外に又た、我は英國思想を守ると曰ひ、我は米國思想を傳ふと曰ひ、我は何、我は何と、各々便利の思想に據つて國民を率ゐんとす。而して又た、少しく禪道を謂ふものあらば、卽ち固陋なりと罵り、少しく元祿文學を唱ふるものあらば卽ち苟且の復古的傾向なりと曰ふ。嗚呼不幸なるは今の國民かな。彼等は洋上を渡り來りたる思想にあらざれば一顧の價なしと信ずるの止むべからざるものあるか。彼等は模倣の渦卷に投げられて、何時まで斯くてあらんとする。今日の思想界達士を俟つこと久し、何ぞ奮然として起り、十九世紀の世界に立つて恥づるなき創造的勢力を此の國民の上に打建てざる。復古、爾も亦た賴むべからず。消化、爾も亦た賴むべからず。誰か能く剛强なる東洋趣味の上に、眞珠の如き西洋的思想を調和し得るものぞ、

出でよ詩人、出でよ眞に國民的なる思想家。外來の勢力と、過去の勢力とは、今日に於て既に多きに過ぐるを見るなり、缺くところのものは創造的勢力。

內部生命論

人間は到底枯燥したるものにあらず。宇宙は到底無味の者にあらず。一輪の花も詳に之を察すれば萬古の思あるべし。造化は常久不變なれども、之に對する人間の心は千々に異なるなり。

造化は不變なり、然れども之に對する人間の心の異なるに因つて造化も亦た其趣を變ゆるなり。佛教的厭世詩家の觀たる造化は悉く無常的厭世的なり。基督教的樂天詩家の觀たる造化は悉く有望的樂天的なり、彼を非とし、此を是とするは余が今日の題目にあらず。夫れ斯の如く變化なき造化を斯の如く變化ある者とするもの、果して人間の心なりとせば、吾人豈人間の心を研究することを苟且にして可ならんや。

チーチュア
造化は人間を支配す、然れども人間も亦た造化を支配す、人間の中に存する自由の精

神は造化に默從するを肯ぜざるなり。造化の權は大なり、然れども人間の自由も亦た大なり。人間豈造化に歸合するのみを以て滿足することを得べけんや。然れども造化も亦た宇宙の精神の一發表なり、神の形の象顯なり、その中に至大至粹の美を籠むることあるは疑ふべからざる事實なり、之に對して人間の心が自からに畏敬の念を發し、自からに精神的の經驗を生ずるは豈不當なることならんや。此場合に於て、吾人と雖も聊か萬有的趣味を持たざるにあらず。

人間果して生命を持てる者なりや、生命といふは、この五十年の人生を指して言ふにあらざるなり。謂ふ所の生命の泉源なるものは、果して吾人々類の享有する者なりや。この疑問は人の常に思ひ至るところにして而して人の常に輕んずる所なり、五十年の事を經綸するは到底五十年の事を經綸せざるに若かざるなり。明日あるを知らずして今日の事を計るは到底眞に今日の事を計るものにあらざるなり、五十年の人生の爲に五十年の計を爲すは、如何に其計の大に密に妙に精にあるとも到底其計なきに若かざるなり。二十五年を勞作に費し他の二十五年を逸樂に費やすとせば極めて面白き方寸なるべし、人間の多數は斯の如き夢を見て消光するなり。然れども實際世界は決して斯の如き夢想を容るゝの餘地を備へず。我が心われに告ぐるに、五十年の人生の外はすべて夢なりといふを以てせば、我

は寧ろ勤勞を廢し、事業を廢し、逸樂晏眠を以て殘生を送るべきのみ。

吾人は人間に生命ある事を信ずる者なり。今日の思想界は佛教思想と耶教思想との間に於ける競爭なりと云ふより、寧ろ生命思想と不生命思想との戰爭なりと云ふを可とす。吾人が思想界に向つて微力を獻ぜんと欲することは、耶蘇教の用語を以て佛教の用語を奪はんとするにあらず、耶蘇教の文明(外部)を以て佛教の文明を仆さんとするにあらず、耶蘇教の智識を以て佛教の智識を破らんとするにあらず、吾人は生命思想を以て不生命思想を滅せんとするものなり。彼の用語の如き、彼の文明の如き、彼の學藝の如き、是等外部の物は、自然の淘汰を以て自然の進化を經べきなり、吾人の關する所爰にあらず。生命と不生命之れ卽ち東西思想の大衝突なり。

つら〳〵明治世界の思想界に於て、新領地を開拓したる耶蘇一派の先輩の事業の跡を尋ぬるに、宗教上の言葉にて、謂ふ所の生命の木なるものを人間の心の中に植ゑ附けたる外に、彼等は何の事業をか成さんや。洋服を着用し高帽子を冠ることは思想界の人を勞せずして、然分に之を爲すなり。凡そ外部の文明を補益することは、何ぞ思想界の達士を煩はすことを要せんや。外部の文明は内部の文明の反影なり、而して東西二大文明の要素は、生命を教ふるの宗教あると、生命を教ふる宗教なきとの差異あるのみ。優勝劣敗に由つて

起るところ玆に存せずんばあらざるなり。平民的道德の率先者も社會改良の先覺者も、政治的自由の唱道者も、誰か斯民に生命を教ふる者ならざらんや。誰か斯民に明日あるを知らしむる者にあらざらんや、誰か斯民に數々感々として今日にのみ之れ拘束せらるゝを警醒するものにあらざらんや。宗教としての宗教彼れ何物ぞや、哲學としての哲學彼れ何物ぞや、宗教を說かざるも生命を說かば旣に立派なる宗教にあらずや、哲學を談ぜざるも生命を談ぜば旣に立派なる哲學にあらずや。生命を知らずして信仰を知る者ありや、信仰を知らずして道德を知る者ありや、生命を教ふるの外に、道德なるもの〻泉源ありや、凡そ生命を教ふる者は旣に功利派にあらざるなり、凡そ生命を傳ふる者は、旣に曖昧派にあらざるなり、凡そ生命を知るものは旣に高蹈派にあらざるなり、詭言流行の今日、世人自から惑ふこと勿らんことを願ふなり。

吾人をして去つて文藝上に於ける生命の動機を論ぜしめよ。

文藝は宗教若くは哲學の如く正面より生命を說くを要せざるなり、又た能はざるなり。文藝は思想と美術とを抱合したる者にして、思想ありとも美術なくんば旣に文藝にあらず、美術ありとも思想なくんば旣に文藝にあらず。華文妙辭のみにては文藝の上乘に達し難く、去りとて思想のみにては決して文藝といふこと能はざるなり、此點に於て吾人は非文學黨

の非文學見に同意すること能はず。先覺者は知らず、末派のポジチビズムに於て、文學をポジチーブの事業とするの餘りに淸敎徒の誤謬を繰返さんとするに至らんことを恐るゝなり。

戲文世界の文學は、價値ある思想を含有せし者にあらざること、吾人と雖之を視ざるにあらず、然れども戲文は戲文なり、何ぞ特更に之を以て今の文學を責むるの要あらんや。吾人を以て之を見れば、過去の戲文が華文妙辭にのみ失したるは、華文妙辭の罪にあらずして、文學の中に生命を說くの途を備へざりしが故なり、請ふ少しく德川氏の美文學に就きて之を言はしめよ。

すべての倫理道德は必ず多少、人間の生命に關係ある者なり。人間の生命に關係多きものは人間を益する事多き者にして、人間の生命に關係少なき者は人間を益する事少なき者なり。德川氏の時代にあつて、最も人間の生命に近かりしものは儒敎道德なりしことは何人も之を疑はざるべし。然れども儒敎道德は實際的道德にして、未だ以て全く人間の生命を敎へ盡したるものとは言ふべからず。繁雜なる禮法を設け種々なる儀式を備ふるも到底Formalit に陷るを免かれざりしなり、到底貴族的に流るゝを免かれざりしなり。之を要するに其の敎ふる處が、人間の根本の生命の絃に觸れざりければなり。其時代に於ける所

謂美文學なるものを觀察するに至りては、吾人更に其の甚しきを見る、人間の生命の根本を愚弄すること彼等の如くなるは吾人の常に痛惜する處なり。彼等は儀式的に流れたる、儒敎道德をさへ備へたるもの稀なり。彼等の多くは卑下なる人情の寫實家なり。人間の生命なるものは彼等に於ては、諧謔を逞ふすべき目的物たるに過ぎざりしなり、彼等は愛情を描けり、然れども彼等は愛情を盡さゞりしなり。彼等の筆に上りたる愛情は肉情的愛情のみなりしなり、肉情よりして戀愛に入るより外には愛情を說くの道なかりしなり。プラトーの愛情もダンテの愛情もバイロンの愛情も彼等には夢想だもすること能はざりしなり。彼等は忠孝を說けり、然れども彼等の忠孝は寧ろ忠孝の敎理あるが故に忠孝あるを說きしのみ、今日の僻論家が勅語あるが故に忠孝を說かんとすると大差なきなり、彼等は人間の根本の生命よりして忠孝を說くこと能はざりしなり。彼等は節義を說けり、善惡を說けり、然れども彼等の節義も彼等の善惡も寧ろ人形を拜べたるものにして、人間の根本の生命の絃に觸れたる者にあらざるなり。謂ふ所の勸善懲惡なるものも、斯る者が善なり、斯るものが惡なりと定め、之に對する勸懲を加へんとしたる者にして未だ以て眞正の勸懲なりと云ふ可からず。眞正の勸懲は心の經驗の上に立たざるべからず、卽ち內部（インナーライフ）の生命の上に立たざるべからず。故に內部の生命を認めざる勸懲主義は到底眞正の勸懲なりと云ふ

べからざるなり。彼等は世道人心を說けり、爲すあるが爲めに文を草すべきを說けり、世を益するが爲めに文を草すべきを說けり、然れども彼等の世道人心主義も到底偏狹なるポジチビズムの誤謬を免かれざりしなり。未だ根本の生命を知らずして、世道人心を益するの正鵠を得るものあらず。要するに彼等の誤謬は人間の根本の生命を認めざりしに因するものなり。讀者よ吾人が五十年の人生に重きを置かずして、人間の根本の生命を尋ぬるを責むる勿れ、讀者よ吾人が眼に見ゆる所の事業に心を注がずして人間の根本の生命を暗索するものを重んぜんとするを責むる勿れ、讀者よ吾人の中に或は唯心的に傾き或は萬有的に傾むくものあるを責むる勿れ、吾人は人間の根本の生命に重きを置かんとするものなり、而して吾人が不肖を顧みずして、明治文學に微力を獻ぜんとするは此範圍の中にあることを記憶せられよ。

明治の思想は大革命を經ざるべからず、貴族的思想を打破して、平民的思想を創興せざるべからず。吾人が敬愛する先輩思想家にして既に大に此般の事業に鐵腕を振ひたるものあり、吾人が若少の身分を以て是より進まんとするもの豈彼等の既に進みたる途に外れんや、吾人豈人情以外に出でゝバベルの高塔を築かんとする者ならんや、若し夫れ人間の根本の生命を尋ねて、或は平民的道德を敎へ、或は社會的改良を圖る者をしも、バベルの高

塔を砂丘に築くものなりと言ふを得ば、吾人も亦たバベルの高塔を築かんとする人足の一人たるを甘んぜんのみ。

文藝は論議にあらざること幾度言ふとも同じ事なり。論議の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは論議の筆を握れる者の任なり、文藝(純文學と言ふも宜し)の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは文藝に從事するものゝ任なり。純文學は論議をせず、故に純文學なるもの無し、と言はゞ誰か其の極端なるを笑はざらんや。論議の範圍に於て、善惡を說くは正面に之を談ずるなり。文藝の範圍に於て善惡を說くは裏面より之を談ずるなり。

人性に上下なく、人情に古今なし、とは觀察論の著者の名言なり。實にや詩人哲學者の言ふところは、人情が自ら筆を執つて萬人の心に描きたるものに外ならざるなり。善と言ひ、惡と言ふも元より道德學上の製作物にあらざること明らかなり。究竟するに善惡正邪の區別は人間の內部の生命を離れて立つこと能はず、內部の經驗と言ひ、內部の經驗と言ひ、一々共名を異にすと雖、要するに根本の生命を指して言ふに外ならざるなり。詩人哲學者の高尙なる事業は、實に此の內部の生命を語るより、外に出づること能はざるなり。內部の生命は千古一樣にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり、詩人哲學者の爲すところ豈神の業を奪ふものならんや、彼等は內部の生命を觀察する者にあらずして何ぞ

や、(國民之友觀察論參照) 然れども彼等が内部の生命を觀察するは沈靜不動なる内部の生命を觀るにあらざるなり、内部の生命の百般の表顯を觀るの外に彼等が觀るべき事は之なきなり、卽ち人性人情の Various Manifestations を觀るの外には觀るべき事は之なきなり。觀は何處までも觀なり、然れども此の場合に於ては觀の中に知の意味あるなり、卽ち、觀の終は知に落つるなり、而して觀の始も亦た知に出るなり。人間の内部の生命を觀ずるは、其の百般の表顯を觀ずる所以にして、靈知靈覺と觀察との相離れざるは之を以てなり。靈知靈覺なきの觀察が眞正の觀察にあらざること之を以てなり。

夫れヒユーマニチーとは人間の特有性の義なり。詩人哲學者は無論ヒユーマニチーの觀察者ならずんばあらず、然れども吾人は恐る、民友子の觀察論の讀者には、或は詩人哲學者を以て單に人性人情の觀察者なりと誤解する者あらんことを。民友子の觀察論を讀みたる人は必ず又た民友子の「インスピレーション」を讀まざるべからず。然らずんば吾人民友子に對する誤解の生ぜんことを危ぶむなり。詩人哲學者は到底人間の内部の生命を解釋(ソルブ)するものたるに外ならざるなり、而して人間の内部の生命なるものは、吾人之れを如何に考ふるとも、人間の自造的のものならざることを信ぜずんばあらざるなり、人間のヒユーマニチー卽ち人性人情なるものが、他の動物の固有性と異なる所以の源は卽ち愛に存するものなるを信ぜずんばあらざるなり。生命! 此語の中にいかばかり深奥なる意味を含むよ。宗教の泉源は愛にあり、之なくして教あるはなし、之なくして道あるはなし。眞理! 世上所謂眞理なるもの果して何事をか意味するっソクラテスも靈魂不朽を說かざれば一個の藪醫者たるに過ぎざりしなり、道は邇きにありと言ひたるもの卽ち人間の祕奥の心宮を認めたるものなり。靈魂不朽を說きたるもの卽ち生命の泉源は人間の自造的にあらざるを認めたるものなり。内部の生命あらずして天下豈人性人情なる者あらんや。インスピレーションを信ずるものにあらずして眞正の人性人情を知るものあらんや。五十年の人生を以て人性人情を解釋すべき唯一の舞臺とする論者の誤謬は多言を須ひずして明白なるべし。

文藝上にて之を論ずれば、所謂寫實派なるものは客觀的に内部の生命を觀察する者なり。此目的の外に嘉賛すべき寫實派の目的はあらざるなり。客觀的に内部の生命の百般の顯象を觀察するといふ一派の寫實論も此目的を外れたらば何等の功益もあらざるなり。世道人心を益するといふ一派の寫實論も此目的を外れたらば何の勸懲もあらざるなり。勸善懲惡を目的とする寫實派も此目的を外れたらば何の勸懲もあらざるなり。爲すあるが爲と言ひ世を益するが爲と言ふも眞正に此の目的に適はするよりも外なきなり。所謂理想派なるものは、主觀的に内部の生命を觀察すべきものなり。主觀

的に内部の生命の百般の顯象を觀察すべき者なり。いかに高大なる極致を唱ふるとも、いかに美妙なる理想を歌ふとも、この目的の外に理想の嘉賛すべき目的はあらざるなり。

理想とは何ぞや。理想派とは何ぞや。吾人は此小論文に於て、理想とは何ぞやを說かざるべし。然れども爰に一言せざるべからざることは、文藝上に言ふところのアイデアなる者は、形而上學に於て言ふところのアイデアとは、名を同ふして物を異にする者なることを之なり。形而上學にてアイデアリスト(唯心論者)といふものは、文藝上にてアイデアリスト(理想家)といふところの物とは全く別物なり。

文藝上にて理想派と謂ふところのものは、人間の内部の生命を觀察するの途に於て、極致を事實(リアリチー)の上に具體の形となすものなり。絶對的にアイデアなるものを研究するは形而上學の唯心派なれども、そのアイデアを事實(リアリチー)の上に加ふるものは文藝上の理想派なり。ゆゑに文藝上にては殆どアイデアと稱すべきものはあらざるなり、其之あるは理想家が暫く人生と人生の事實的顯象を離れて、何物にか瞑契する時に於てあるなり、然れども其は瞬間の瞑契なり、若しこの瞬間にして連續したる瞬間ならしめば、詩人は既に詩人たらざるなり。必ず組織的學問を以つて研究する哲學者になるなり。詩人豈斯の如き者ならんや。

瞬間の瞑契とは何ぞ、インスピレーション是なり、この瞬間の瞑契ある者をインスパイアドされたる詩人とは謂ふなり、而して吾人は、眞正なる理想家なる者はこのインスパイアドされたる詩人の外には之なきを信ぜんとする者なり。インスピレーションを知らざる理想家もあらん、宗教の何たるを確認せざる理想家もあらん、然れども吾人は各種の理想家の中に就きて、斯の如きインスピレーションを受けたる者を以て最醇最粹のものと信ぜんとするなり。インスピレーションとは何ぞ、必らずしも宗教上の意味にて之を言ふにあらざるなり、一の宗教(組織として)あらざるもインスピレーションは之あるなり。一の哲學なきもインスピレーションは之あるなり、畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに對する一種の感應に過ぎざるなり、吾人の之を感ずるは電氣の感應を感ずるが如きなり、斯の感應あらずして、曷んぞ純聖なる理想家あらんや。

この感應は人間の内部の生命を再造する者なり、この感應は人間の内部の經驗と内部の自覺とを再造する者なり。この感應によりて瞬時の間、人間の眼光はセンシュアル、ウオルドを離るゝなり、吾人が肉を離れ實を忘れ、と言ひたるもの之に外ならざるなり、然れども夜遊病患者の如く「我」を忘れて立出るものにあらざるなり、何處までも生命の眼を以

て、超自然のものを觀るなり。再造せられたる生命の眼を以て。

再造せられたる生命の眼を以て觀る時に、造化萬物何れか極致なきものあらんや。然れども其極致は絶對的のアイデアにあらざるなり、何物にか具體的の形を顯はしたるもの即ち其極致なり、萬有的眼光には萬有の中に其極致を見るなり、心理的眼光には人心の上に其極致を見るなり。

快樂と實用

明治文學管見の一

明治文學も既に二十六年の壯年となれり、此歲月の間に如何なる進歩ありしか、如何なる退歩ありしか、如何なる原素と如何なる精神が此文學の中に蟠りて而して如何なる現象を外面に呈出したるか、是等の事を研究するは緊要なるものなり、而して今日まで未だ此範圍に於て史家の技倆を試みたるものはあらず、唯だ國民新聞の愛山ありて、其の鋭利なる觀察を此範圍に向けたるあるのみ。余は彼の評論に就きて滿足すること能はざるところあるにも係らず、其気鋭く膽大にして幾多の先輩を瞠若せしむる技倆に驚くものなり。余

や短才淺學にして、敢て此般の評論に立入るべきものにあらねども、從來白表女學雜誌々上にて評論の業に從事したる由來を以て聊か見るところを述べて明治文學の梗概を研究せんと欲するの志あり。余が曩に愛山生の文章を評論したる事あるを以て、此題目に於て再び戰を挑まんの野心ありなど思はゞ此上なき僻事なるべし。之れ余が日本文學史骨を著はすに當りて豫め讀者に注意を請ふ一なり。

余は之れより日本文學史の一學生たらんを期するものにて、素よりこの文學史を以て獨占の舞臺などゝせん心掛あるにはあらず、斯く斷りするは曾つて或人に誤まられたることあればなり。余は學生として、誠實に研究すべきことを研究せんとするものなれば縱令如何なることありて他人の攻擊に遭ふことあるとも之に向つて答辯するものと必せず、又容易に他人の所論を難ずる等の事なかるべし。且つ美學及び純哲學に於て極めて初學なる身を以て文學を論ずることなれば、其不都合なる事多かるべきは吳々も豫め斷り置きたる事なり。加ふるに閑少なく事實の便なく事實の蒐集思ふに任せぬことのみなるべければ、獨斷的の評論をなす方に自然傾むき易きことも亦た豫め諒承あらんことを請ふになむ。

特に山路愛山先生に對して一言すべきことあり。爰にて是を言ふは奇しと思ふ人あらんかなれど、余は元來余が爲したる評論に就きて親切なる教示を望みたるものなるに、愛山君

は余が所論以外の事に向て攻撃の位地に立たれ少しも滿足なる教示と見るべきはあらず、余は自ら受けたる攻撃に就きて云々するの必要を見ざれば其儘に看過したり。本より文學の事業なることは釋義といふ利刀を假り來らずとも分明なることにして、文學が人生に渉るものなることは何人といへ共之を疑はぬなるべし。愛山先生若しこの二件を以て自らの新發見なりと思はゞ余輩其の可なるを知らず、余は右の二件を難じたるものにあらず、余が今日の文學の爲に聊か眞理を愛するの心より、知交を辱ふする愛山君の所説を難じたるは豈に虚空なる自負自傲の念よりするものならんや。これを以て余は愛山君の反駁に答ふることをせざりし。然るに豈圖らんや、其他にも余が所論を難ぜんとしてか或は他に爲にする所ありてか、人生に相渉らざるべからずといふ論旨の分明に解得せらるゝ論文の、然も大家先生等の手に成りて出でしを見るに至らんとは。若し此事にして余が所説に對して或は余が所説に動かされて出でたるものなりとするを得ば余は至幸至榮なるを謝するに吝ならざるべし。然れども極めて不幸なりと思ふは、余は是等の文章に對して返報するの權利なきこと是なり。文學が人生に渉るものなることは余も是を信ずるなり、恐らく天地間に文學は人生に相渉るべからずと揚言する愚人は無かるべし、但し余が難じたるは(1)世を益するの目的を以て(2)英雄の劍を揮ふが如くに(3)空の空を突かんとせずして、或的を見て

華ゃ妙辭を退けて、而して人生に相渉らざるべからずと論斷したるは難じたるなり。故に余は以上の條件を備へざる人生相渉論ならば、奈何なる大家先生の所説なりとも是に對して答辯するの權利なきなり。然ども余自ら山庵雜記に言ひし如く、是非眞僞は容易に皮相眼を以て判別すべき者ならざるに余が文章の疎雜なりしが爲め、或は意氣昂揚して筆したりしが爲か、一斯も誤讀せらるゝに至りたるは極て殘念の事と思ふが故に、余は不肖を顧みず淺慮を厭はず、是より評論紙上に於て出來得る丈誤讀を免かるゝ樣に、明治文學の性質を論ずるの榮を得んとす。之を爲すは本より愛山君の所説を再評するが爲にはあらざるも若し余が信ずる所に於て君の教示を促すべきことあらば請ふ自ら寛ふして之を垂れよ」

余は先づ明治文學の性質を以て始めんとす。而して、明治文學の性質を知らんが爲には、如何なる主義が其中に存するか見ざるべからず。純文界にも批評界にも、或は時事界にも濟々たる名士羅列するを見る。然れども余は存生中の人を評論するに於て二箇のおもしろからぬ事あるを慮るなり、其一は、もし賞揚する時に諛言と誤まれんか、若し悲難する時に詬評と思はれんか、の恐れあり。其二は自らの主義、人間は Passion の動物なれば少くとも自家の私見、善く言ひて主義なるものに拘泥することなき能はず、故に若し一の私見と他の私見と撞着したる時に、近頃流行の罵詈評論に陷ることなきにしもあらず。之を

以て余は敢て現存の大家に向つて直接の批評を加へざるべしと雖、もし余が觀察し行く原(エ)實(メント)の道程に於て相衝當する事あらば避くべからざる場合として之を爲すことあるべし。

余は明治文學管見の第一として「快樂(プレッユーア)」と「實用(ユチリチー)」とを論ずべし。

「快樂」と「實用」とは疑もなく「美」の要素なり、必ずしもプレトーを引くには及ばず。

マシュー、アーノルドは「人生の批評としての詩に於ては、詩の理、詩の美の定法に應ふかぎりは、人生を慰め人生を保つことを得るなり」と云へり。

文學が一方に於て、人生を批評するものなることは余も之を疑はず。然れども、アーノルドの言ふ如く、人生の批評としての詩は又た詩の理と詩の美とを兼ねざるべからず。吾人文學を研究せるものは、單に人生の批評のみを事とせずして、詩の理と詩の美とをも究むるにあらざれば不可なるべし。

人生を慰むるといふ事より、Pleasure なるものが、詩の美に於て、缺くべからざる要素なる事を知るを得べし。人生を保つといふ事より Utility なるものが、詩の理に於て缺くべからざる要素なる事を知るべし。眞に人生を慰め、眞に人生を保つには、眞に人生を觀察し人生を批評するの外に、眞に人生を通譯することなかるべからず。人生を通譯するには、人生を知覺せざるべからず。故に天賦の詩才ある人は、人間の性質を明らかに認識

するの要あるなり。然らざればヂニアスは眞個の狂人のみ、靴屋にもなれず祕書官にもなれぬ白痴のみ。

人生（Life）といふ事は、人間始まつてよりの難問なり、哲學者の夢にも此難問は到底解き盡くす可からずとは古人も之を言へり。若し夫れ、社界的人生などの事に至りては或は鋭利なる觀察家の眼睛にて看破し得ることもあるべけれど、人生の Vitality に至りては、全能の神の外は全く知るものなかるべし。故に詩人の一生は、默示の度に從ひて。人生を研究するものにして、感應の度に從ひて、人生を慰保するものなるべし。

快樂と實用とは、主觀に於ては美の結果なり、内部にありては、美を構成するものなりと雖、客觀に於ては美の結果なり、内部に於ては美の成果なり。この二要素を論ずるに先ちて吾人は

人生何か故に美を要するか

に就きて一言せざるべからず。

音樂何の爲に人生に要ある。繪畫何が故に人生に要ある。極めて些末なる裝飾品までも何が故に人生に要ある。何か故に歌ある。何が故に詩ある。何が故に温柔なる女性の美ある。何が故に花の美ある。何が故に山水の美ある。是等の者はすべて遊情放逸なる人間の

惡習を滿足せしむるが爲に存するものなるか。もし然らんには人生は是等の凡ての美なくして成存することを得べし。然るに古往今來、尤とも蠻野なる種族に、尤も劣等なる美の觀念を有し、尤も進歩せる種族に尤も優等なる美の觀念を有するは何が故ぞ。尤も野蠻なる種族にも必らず何につけてか美を求むるの念ある事は明白なる社會學上の事實なり、或は鳥吟を模擬し、或は美花を粗末なる仕方にて摸寫するなどの事は、極めて拙劣の人種にも是あるなり。又た尤も幼稚なる嬰兒にても、美くしき玩弄品（トイス）を見ては能く笑ひ音樂の響には耳を澄ます事は普通なる事實なり。之を以て見れば文明といふ怪物が、人間を遊惰放逸に驅りたるよりして、始めて美の要を生じたりと見るの僻見なることは多言せずして明らかなるべし。美は實に人生の本能に於て、自然に願欲するものなることは認め得べきことなり。斯の如く美を願欲するには、人生の本能、人性の本性に於て、然り、といふ事を知り得たらば吾人は、一歩を進めて

人生は快樂を要するものなりや否や

の一問を解かざるべからず。

快樂は何の爲に、人生に要ある。人生は快樂なくして、生活し得べきものなるべきや。ピユリタニズムの極端にまで攀ぢ登りて見ても、唯利論の絶頂にまで登臨して見ても、人

生は何事か快樂といふものなくては月日を送ること能はざるは常識といふ活眼先生に問ふまでもなく明白なる事實なり。

快樂は卽ち慰藉（Consolation）なり。詳に人間生活の狀態を觀よ、蠢々喞々として何のおもしろみもなく、何のをかしみもなきに似たれど、其實は、個々特種の快樂を有し人々異樣の慰藉を領するなり。放蕩なる快樂は飮宴好色なり。着實なる快樂は宴居閑樂なり熱性ある快樂は忠孝仁義等の目的及び希望なり、誠實なる快樂は家を齊へ生を理するにあり。然れども是等は、特性の快樂を擧げたるのみ、若し通性の快樂をいふ時は、美くしきものによりて。耳目（Sight and hearing）を樂しますことにあり。耳には音を聞き、目には物を睹る、之れ快樂を願欲するの最始なり。然れどもマインド（智、情、意）の發達（モーラルライフ）するに從ひてこの簡單なる快樂にては滿足すること能はざるは必然の結果なるが故に、更に道義の生命に於て、快樂を願欲するに至るなり。道義の生命に於て快樂を願欲するに至る時は單に自然の摸倣（子チユーアイミテーション）（クリエチージ）を事とする美術を以て、眞正の滿足を得ることも能はざるが故に、更に道義の生命に於て、快樂を願欲するに至るなり。道義の生命に於て快樂を願欲するに至る時は單に自然の摸倣（子チユーアイミテーション）（クリエチージ）を事とする美術を以て、眞正の滿足を得ることも能はざるは必然の結果なるが故に創造的天才（ニアス）の手に成りたる美を愛好するに至ることも亦た當然の成行なり。美は始めより同じものにして、輕重增減あるものにあらざれど、美術の上に於ては、進歩すべきものなることを以てなり。而して其觀察點より推究する時は、尤も進歩したるモーラル、ライフ（道

義の生命）を有つものは、尤も健全にして、尤も圓滿なる美を願欲するものなることは判斷するに難からじ。而して、社會進歩の大法を以て之を論ずる時は、尤も完全なる道義の生命を有する國民が尤も進歩したる有樣にある事は明白なる事實なれば、從つて又た、尤も圓滿なる快樂を有し、尤も完全なる美を願欲する人種が尤も進歩したる國家を成すことは容易に見得べき事なり。吾人は更に、

道義的生命（ライフといふ字は、之を生と譯するものなり）が快樂に相涉る關係

に就きて一言せざる可からず。

道義（モーラル）といふ字を用ふるには、宗教及哲學に訴へて、其字義を釋說すること大切なるべし、然れども吾人は序言に於て斷りしたる如く、成る可く平民的に、（平民的といふ言葉に用ふるを得るとすれば）雜誌評論らしき普通の諒解にうちまかせてこの字を用ふるなり。

人生は、フヒジカルに於て進歩すると同時に、モーラルにも進歩するものなり、Plisica l world の擴まり行くと共に Moral world も擴まり行くものなり。故に其必要とする快樂に於ても亦た單に耳目を喜ばすといふのみにては足らぬ樣になるなり。加ふるに智情意の發達と共に、各種各樣の思想を生ずるが故に、其の必要とする快樂も彼等の發達したる智情意を滿足せしむる程の者たらざるべからず。かるが故に道義的人生に相涉るべき適當

の快樂なくしては、道義自身も枯れ、人生自身も味なきに至らん事必せり、爰に於て、道義の中心なる靈魂を以て、美の表現の中心なる宇宙の眞美を味ふの必要起るなり。宇宙の眞美は、或はサブライマといひ、或はビユーチフルと言ひ、審美學家の孜々として討究しつゝある問題にして容易に論入すべきものにあらず。但し余は「人生に相涉るとは、何の謂ぞや」と題する一文の中に其一端を論じたる事あれば就いて讀まれん事を請ふになむ。是より

「快樂」と「實用」との雙關

に就きて一言せむ。

「快樂」と「實用」とは特種の者にして、極めて密接なる關係あるものなり。實用を離れたる快樂は、絶對的には全然之なしと斷言するも不可なかるべし。快樂の他の意味は（コンソレーション）慰藉なる事は前にも言ひたり。慰藉といふ事は、アイソレーテッド（スタンドポイント）孤立したる立脚點の上に立つものにあらずして、何物にか雙對するものなり。エデンの園に住みたる始祖には、慰藉といふものゝ必要は無かりし。之あるは人間に苦痛ありてより事なり。故に、

人生何が故に苦痛あるか

の一問を解くの止むべからざるを知る。

曰く、メッション欲なる魔物が、人生の中に存すればなり。凡ての罪、凡ての惡、凡ての過失は欲あるが故にこそあるなれ。而して、罪、惡、過失等の形を呈せざる内部の人生に於て、欲と正義と相戰ひつゝある事は、苟くも人生を觀察するに缺くべからざる要點なり。この戰爭が人生の靈魂に與ふる傷痍は卽ち吾人が道義の生命に於て感ずる苦痛なり。この血痕この紅涙こそは古昔より人間の特性を染むるもののならずんばあらず。かるが故に、必要上より、「慰藉」といふもの生じ來りて、美しきものを以て、欲を柔らかにし其毒双を鈍くするの止むなきを致すなり。然れどもすでに必要といふ以上は慰藉も亦た、多少實用の物ならざるにあらず。試に一例を擧て之を說かん。

梅花と櫻花との比較

梅花と花とは東洋詩人の尤も愛好するものなり。梅花は。其の華に於ては、單に慰藉の用に當つべきのみ、然れども、その果に於ては、實用のものとなるなり。斯の如く固有性に於て慰藉物なるもの、附屬性に於て實用品たることあり(之と反對の例をも見よ)櫻花は果を結ばざるが故に、單に慰藉の用に供すべきのみなるかと問ふに、貴人の園庭に於て必ず無くてはならぬものとなり居るところよりすれば、幾分かは實用の性質をも備へてあるなり。(梅櫻と東洋文學との關係に就きては他日詳論することあるべし)これと同じく家

具家材の實用品と共に或種類の裝飾品も亦た多少實用の性質あるなり。屛風は實用品なりといへども極めて雜駁に、極めて獨斷的に之を解けば、前然れども。白紙の屛風といふものを見たる事なきは何ぞや。裝飾と實用との相密接するは之を以て見るべし。之より

實用の起原

に就きて一言すべし。

この問題は至難なるものなり。然れども極めて雜駁に、極めて獨斷的に之を解けば、前に「快樂」の起原に就きて曰ひたる如く、人間は欲の動物なるが故にその欲と調和したる度に於て、自家の滿足を得る爲に、意と肉とを適宜に滿足せしむるが爲に、必要とする器物もしくは無形物を願求せるの性あること之れ實用の起原なり。而して人文進步の度に應じて「實用」も亦進步するものなる事は前に言ひたるが如く、人間の物質的(フヒジカル、ライフ)人生と道義的(モール、ライフ)人生との兩像に於て進步したるものなるが故に、實用も其の最始に於ては、單に物質的需要を充たすに足りし者が追々に道義的需要を充たすに至るべき事は當然の順序なり。他の側面より見る時は野蠻人と開化人との區別は道義性の發達したりしと否とにありといふも不可なかるべし。爰に於て道義的人生に相涉るべき文學なるものは、人間の道義性を滿足せしむるほどのものならざるべからざる事は認め得べし。之より

道義的人生の實用

とは何ぞやの疑問にうつるべし。

人間を正當なる知識に進ましむるもの(學理)其一なり、人間を正當なる道念に進ましむるもの(倫理)其二なり、人間を正當なる位地に進ましむるもの(美)其三なり。

斯の如く概說し來りたるところを以て、吾人は快樂と實用との上に於て吾人が詩と稱するものゝ地位を瞥見する事を得たり。快樂卽ち慰藉は、道義的人生に缺くべからざるものなると共に、實用も亦た道義的人生に缺くべからざるものなる事を見たり。但し慰藉は主として道義的人生に涉る性を有し、實用は客觀に於ては物質的人生に涉ると雖、前にも言ひし如く、到底主觀に於ては道義的人生にまで達せざるべからざるものなり(此事に就きては恐らく詳說を要すべし)

余は「快樂」と「實用」との性質に就き、及び此二者が人生と相涉れる關係に就きて粗略なる解釋を成就したり。是より

「快樂」と「實用」とが文學に關係するところ如何

に進むべし。

快樂と實用とは、文學の兩翼なり、雙輪なり、之なくては鳥飛ぶ能はず、車走る能はず

然れども快樂と實用とは文學の本體にあらざるなり。快樂と實用とは美の的(Aim)なり。美の結果(Effect)なり。美の功用(Use)なり。「美」の本體と快樂と實用とにあらず。これと共に、詩の廣き範圍に於ても、快樂と實用とは其的、其結果、其功用に過ぎずして他に詩の本能ある事は疑ふ可からざる事實なるべしと思はる。

若し事物の眞價を論ずるに其的、其結果、其功用のみを標準とする時は、種々なる誤謬を生ずるに至るべし、本能本性を合せて、其結果、其功用其的、を觀察するにあらざれば余輩其の可なるを知らず。故に文學を評論するには、少くとも其本能本性に立ち入りて然る後に功用、結果、目的等の陪審官に諮はざるべからず。

快樂と實用とは詩が兼ね備へざるべからざる二大要素なることは疑ふまでもなし。然れども詩(ポエトリー)が必らずこの二大要素に對して隷屬すべき地位に立たざるべからずとする大なる誤謬なり。

吾人が日本文學史を研究するに當りて第一に觀察せざる可からざる事は、如何なる主義(プリンシプル)、如何なる批評眼、如何なる理論(セオリー チーソーチー)が主要の位地を占有しつゝありしかにあり。而して吾人は不幸にも、世益主義(世道人心を益せざるべからずといふ論)勸懲主義(善を勸め惡を懲らすべしといふ論)及び目的主義(何か目的を置きて之に對して云々すべしといふ論)等

が古來より尤も多く主要の位地に立てるを見出すなり。斯の如くにして、神聖なる文學を以て、實用と快樂に隷屬せしめつゝありたり、宜なるかな我邦の文運今日まで憐れむべき位地にありたりしや。

余は次章に於て、德川時代の文學に、「快樂」と「實用」との二大區分（クラシフヒケーション）ある事、平民文學貴族文學の區別ある事。倫理と實用との關係等の事を論じて追々に明治文學の眞相を窺はん事を期す。

精神の自由

明治文學
管見之二

造化萬物を支配する法則の中に、生と死とは必ず動かすべからざる大法なり。凡そ生あれば必ず死あり。死は必ず、生を蹣ふて來る。人間は「生」といふ流れに浮びて「死」といふ海に漂着する者にして其行程も甚だ長からず、然に人間の一生は「生」より「死」にまで旅するを以て最後の運命と定むべからざるものあるに似たり。人間の一生は旅なり、然れども「生」といふ驛は「死」といふ驛に隣せるものにして、この小時間の旅によりて

萬事休する事能はざるなり。生の前は夢なり。生の後も亦た夢なり、吾人は生の前を知る能はず、又た死の後を知る能はず、然れども僅かに現在の「生」を覗ひ知ることを得るなり、現在の「生」は夢にして「生」の後が寤なるべきや否や、吾人は之をも知る能はず。

吾人が明らかに知り得る一事あり、其は他ならず、現在の「生」は有限なること是れなり、然れども其の有限なるは人間の精神（スピリット）にあらず人間の物質なり。世界は意味なくして成立するものにあらず、必ず何事かの希望を蓄へて進みつゝあるなり、然らざれば凡ての文明も、凡ての化育も虛僞のものなるべし。世界の希望は人間の希望なり、何をか人間の希望といふ、かく、此の有限の中にありて彼の無限の目的に應はせんこと是なり。有限は圈環の內にありて其中心に注ぎ、無限は方以外に自由なり、有限は引力によりて相結び、無限は自在を以て孤立することを得るなり、而して人間は實に有限と無限との中間に彷徨するもの、肉によりては限られ、靈に於ては放たるゝ者にして、人間に善惡正邪あるは畢竟するに內界に於て有限と無限との戰爭あればなり、歸一（ユニチー）を求むるものは物質なり、調和を需むるものは物質なり、而して精神に至りては始めより自由なるものなり始めより獨存するものなり。

人間は活動す、而して活動なるものは「我」を繞りて歩むものにして、「我」を離るゝ時

は萬籟靜止するものなり、自己の「我」は生存を競ふものなり法の「我」は眞理に趣くものなり、然れども人間の種族は生存を競ふの外に活動を起すこと稀なり、愛國若くは犧牲等の高尙なる名の下にも、究極するところ生存を競ふの意味あり。人は何事をか求むるものなり、人は必ず情を離れざるものなり、人は自己を愛するものなり、倫理道德を守る前に人間は必ず自己の意欲に僕婢たるものなり、斯の如く意の世界に於て人間は禁囚せられたる位地に立つものなり。

人生は斯の如く多恨なり、多方なり、然れども世界と共に存在し、世界と共に進歩する思想なるものは、羅針盤なくして航行するものにあらずと見えたり。吾人は夢を疑ふ、然れども吾なるもの全く人間を離れたるものにあらず。吾人は想像力を訝る、然れども想像力なるもの全く虛妄なるものにあらず、吾人は理想を怪しむ、然れども理想なるもの全く人間と關係なきものにあらず、夢や、想像力や、理想や、是れ等のものはスフヒンクスに屬する妖術の種類にあらずして、何事をか吾人に敎へ、何物をか吾人に默示し、吾人をして水上の浮萍の如く浪のまに〳〵漂流するものにあらざるを示すに似たり。且つ吾人は自ら顧みて己れを觀る時に何の希望もなく、何の目的もなく在來の倫理に唯諾し、在來の道德を墨守し、何事かの事業にはまりて一生を竟るを以て自ら甘んずること能はざるものあ

るに似たり。怪しむべきは此事なり。

倫理道德は人間を羈縛する曩繩に過ぎざるか。眞人至人の高大なる事業は境遇と周邊と場所とによりて生ずるに止まるか。吾人は諸する能はず。別に精神なるものあり人間の覺醒は卽ち精神の覺醒にして、なるか。吾人は諸する能はず。別に精神なるものあり人間の覺醒は卽ち精神の覺醒にして、人間の睡眠は卽ち精神の睡眠なり、倫理道德は人間を盲目ならしむるものにあらずして、人間の精神に遡ふるものならずんばあらず、高大なる事業は境遇等により（絕對的に）生ずるものにあらずして精神の靈動に基くものならざるべからず、人間の窮通は機會（トヤンス）の獨斷すべきものにあらずして、精神の動靜に因するものならざるべからず。精神は自ら存するものなり。精神は自ら知るものなり、精神は自ら動くものなり然れども精神の自存、自知、自動は、人間の內にのみ限るべきにあらず。之と相照應するものは他界にあり、他界の精神は人間の精神を動かすことを得べし、然れども是は人間の精神の覺醒の度に應ずるものなるべし、かるが故に人間を記錄する歷史は精神の動靜を記錄するものならざるべからず、物質の變遷は精神に次ぎて來るものなるが故に、之を苟且にすべしと云にはあらねど、眞正の歷史の目的は人間の精神を研究するにあるべし。人生實に無邊なり、然も意味なき無邊にあらず、畢竟するに精神の自由の爲に沙漠を旅するものなり、希望愛に存し、進歩愛

に崩すなり、之なくんば凡ての事皆な虚僞なり。

文學は人間と無限とを研究する一種の事業なり、事業としては然り、而して其起因するところは、現在の「生」に於て人間が自らの滿足を充さんとする欲望を塡ぐ爲にあるべし。文學は快樂を人生に與ふるものなり、文學は保全を人生に補ふものなり。然れども歴史上にて文學を研究するには。そを人生の鏡とし、そを人生の欲望と滿足の像影として見ざるべからず。人生は文學史の中に其骸骨を留むるものなり、その宗教も、その哲學も文學史の中に散漫たる形にて殘るもの也、その欲望も其滿足も文學史の上には蔽ふべからざる事實となるなり、而して吾人は、その欲望よりも、其滿足よりも、其狀態よりも、第一に人生の精神を知らざるべからず、吾人は觀察なるものゝ甚だ重んずべきを認む、然れども狂(ステー)ト態を觀察するに先ち赤裸々の精神を視ざるべからず、認識せざるべからず、然かる後にその精神の活動を觀察せざる可からず。

精神は終古一なり、然れども人生は有限なり、有限なるものゝ中にありて無限なるものの趣きを變ゆ。東洋の最大不幸は始めより今に至るまで精神の自由を知らざりし事なり。然れども是は東洋の政治的組織の上に言ふのみ、其宗教の上に於ては大なる差別あり。始より全く精神の自由を知らず且つ求めざるの國は必ず退歩すべきの國なり、必ず歴史の外

に消ゆべきの國なり。政治と懸絶したる宗教に向つて精神の自由を求むるは國民が政治を離るゝの徴なり。宗教にして若し政治と相渉ることなくんば、其邦の思想は必ず一方には極端なる虚想派を起し、一方には極端なる實際派を起さゞるべからず。吾人は他日日本文學と國體との關係を言ふ時に於て此事を評論すべし、今は唯だ日本の政治的組織は、一人の自由を許すと雖も衆人の自由を認めず、而して日本の宗教的組織は主觀的に精神の自由を許すと雖も社會とは關係なき人生に於て此自由を享有するを得るのみにして、公共の自由なるものは此上に成立することなかりしといふ事を斷り置くのみ。

爰に於て、吾人は讀者を促して前號の題目に反らんことを請ふの要あり、人間は精神を以て生命の原素とするものなり、然れども人間生活の需要は慰藉と保全とに過ぐるなし、文學も其直接の目的は此二者を外にすること能はず。文學の種類は多々ありともこの直接の目的に外れたるものは文學にあらざるなり、而して何をか尤もこの目的に適ひたるものとすべきかは此本題の外にあり。

德川時代文學の眞相は、其時代を論ずるに當りて詳かに研究すべし、然れども余は既に逆路より余の研究を始めたり、極めて粗雜に明治文學の大體を知らんこと余が今日の題目なり。父を知らずして能く兒を知るは稀なり。之を以て余は今日に於て、甚だ亂雜なる研

究法を以て德川文學が明治文學に傳へたる性質の一二を觀察せんと欲す。

文學の最初は自然の發生なり、人に聲ありて人に目あると同時に文學を發生すべきものなり、然れども其發達は人生の機運に伴ふが故に長育するものなり、能く人生を樂ましめ能く人生に功あるものは、人間に連れて進歩すべき文學なり。之を以て一國民の文學は其時代を出づること能はざるなり、時代の精神は文學を徹ふものなり、人は周圍によりて生活す、其聲も其目も周圍を離るゝことは斷じて之なしと云ふも不可なかるべし。

德川氏の前には文學は佛門の手に屬したり、而して佛門の人間を離れたりしは當時の文學の人間を離れたる大原因となりて居たりき。德川氏の覇業を建つるや、恰も漢土に於て儒教哲學の勃興せし時の事として文學の權を僧侶の手より奪ひ取ると同時に、儒教の趣味を滿潮の如く注ぎ込みたり、然るに德川氏の覇業は性質の革命にあらずして形體の革命に止まりしが故に、從つて起りたる文學の革命も、僧侶の手より儒者の手に渡りたるのみにして、其性質に於ては依然として國民の一半に充つべきものにてありたり。疑もなく文學は此時代に於て復興したり、然も其復興は佛と儒との入れ代りに過きずして、要するに高等民種に應用さすべきものたるに過ぎざりし。之に加ふるに德川氏は文學を其政治の補益となすことに潜心したるが故に儒教も亦た一種の德川的倫教と化し了し、風化を補ひ世道を益

し、德川氏の時代に適ふべきものにあらざれば文學として世に做ばるべからざるが如き觀をなせり。これ卽ち德川氏の時代にありて、高等民種（武士）の文學は甚だ倫理の圈圍に縛せられて、其範圍内に生長したる主因なり。

然れども倫理といふ實用を以て、文學の運命を縮むるは精神の許さゞるところなり。爰に於て俳諧の頓かに成熟するあり、更に又た戯曲小説等の發生するあり、戰亂罷んで泰平の來る時文運は必ず暢達すべき理由あり、然れども其理由を外にして德川時代の初期を視る時は、一方に於て實用の文學大に奬勵せらるゝ間に他方に於ては單に快樂の目的に應じたる文學の勃として興起したるを視るべし。武士は倫理に捕はれたり、而して平民は自由の意志（ウイル）に誘はれて、放縱なる文學を形成せり。爰に至りて平民的思想なるものゝ始めて文學といふ明鏡の上に照り出づるものあり、これ日本文學史に特書すべき文學上の大革命なるべし。

吾人は此處に於て平民的思想の變遷を詳論せず、唯だ讀者の記憶を請はんとすることは斯の如く發達し來りたる平民的思想は人間の精神が自由を追求する一表象にして、その歸着する處は、倫理と言はず、放縱と言はず、實用と言はず、快樂と言はず、最後の目的なる精神の自由を望んで馳せ出でたる最始の思想の自由にして遂に思想界の大革命を起すに

至らざれば止まざるなり。

維新の革命は政治の現象界に於て舊習を打破したること萬目の公認するところなり。然れども吾人は寧ろ思想の內界に於て、遙かに偉大なる大革命を成し遂げたるものなることを信ぜんと欲す。武士と平民とを一團の國民となしたるもの實に此革命なり、長く東洋の社界組織に附帶せし階級の繩を切りたる者此革命なり。而して思想の歷史を攻究する順序より言はゞ吾人はこの大革命を以て單に政治上の活動より生じたるものと認むる能はず、自然の理法は最大の勢力なり、平民は自ら生長して思想上に於ては、最早舊組織の下に默從することを得ざる程に進みてありたり、明治の革命は武士の劍槍にて成りたるが如く見ゆれども、其實は思想の自動多きに居りたるなり。

明治文學は斯の如き大革命に伴ひて起れり、其變化は著るしく其希望や大なり、精神の自由を欲求するは人性の大法にして、最後に到着すべき所は各個人の自由にあるのみ。政治上の組織に於ては、今日未だ此目的の半を得たるのみ、然れども思想界には制抑なし、之より日本人民の往かんと欲する希望いづれにかある、愚なるかな、今日に於て舊組織の遺物なる忠君愛國などの岐路に迷ふ學者、請ふ刮目して百年の後を見ん。

變遷の時代

明治文學
管見之三

殘燈もろくも消えて德川氏の幕政空しく三百年の業を遺し、天皇親政の曙光漸く昇りて、大勢頓かに一變し、事々物々其相を改めざるはなし。加ふるに物質的文明の輸入堤を決するが如く、上は政治の機關より、下萬民の生活狀態に至るまで、千枝萬葉悉く其色を變へたり。

舊世界の豫言者なる山陽、星巖、益軒、息軒等の巨人は或は既に墳墓の中に眠り、或は時勢の狂濤に排されて、曉明星光薄く、而して、橫井、佐久間、藤田、吉田等の改革的偉人も亦た相襲ぎて歷史の卷中に沒し去り、長劍を橫へて天下を跋涉せし昨日の浪人のみ時運の歡迎するところとなりて、政治の樞機を握り、既に大小の列藩を解綬し、續いて武士の帶刀を禁じ、士族と平民との名義上の區別は置けども普天率土同一なる義務と同一なる權利とを享有し、均しく王化の下に沐浴することゝはなれり。

文學は泰平の賜物なり、戰亂の時代にありては文學は必ず活動世界を離れたる場所に潛

逸するものなり、足利氏の末世に於て自ち然り。然れども維新の戰亂は甚だ長からず、足利氏の末路に於て文學の庇護者たりし佛教は此時に至りては既にその活力を失ひて再び文學の庇護者たる名譽を荷ふ能はず、文學は却つて活動世界の從僕となりて、勤王家、慷慨家等の名士をして其政治上の事業に附帶せしむるに至りぬ。此處にて一言すべきことあり。吾人は文學なる者をして何時の時代に於ても必ず政治と離隔せしめざるべからずと論ずるものにあらず。文學は時代の鏡なり、國民の精神の反響なり、故に天下の蒼生が朝夕を安ずること能はざる曉に當りて、超然身を脫して心を虛界に注ぐべしとするにあらず。曩竟するに詩文人は其原素に於ては兵馬の人と異なるなきなり、之を詩人に形り之を兵士に形るものは時代のみ。國民は常に活動を欲するものなり、國民は常にその巨人を造るなり、國民は常にその巨人によつて其精神を吐きて盛衰の運を迎ふるものなり、精神の枯るゝ時、巨人の隱るゝ時、活動の消ゆる時、國民は既に衰滅の徵を呈するものなり。之を以て巨人は必ず國民の被造者にして、而して更に徂た國民の造物者たらずんばあらず。國家事多ければ必ず能く天下を理する人起るなり、國家德乏しければ必ず聖淨なる君子世に立つなり、國家安逸ならば必ず彼の一國の公園とも云はるべき詩文の人起るなり、若し此事なくば國家は半ば死せるなり。人心は半ば眠りたるなり、

希望全く無き有樣に近きなり。讀者よ誤解する勿れ、吾人は偏狹なる理論を頑守するものにあらず、吾人は國民をして出來得る丈自由に其精神を發揮せしめんことを希望するものなり。宗教に哲學に、將た文學に、國民は常に其耳を傾けてあるなり、而して「時代」なる第二の造化翁は國民を率ゐてその被造物なる巨人の說教を聞かしむるなり。

明治初期の思想は實に第二の混沌たりしなり、何が故に混沌といふ、看よ從來の紀綱は全く弛みたりしにあらずや、看よ天下の人心はすべての舊世界の指導者を失ひて、就いて聽くべきものを有たざりしにあらずや、看よ儒教道德の大半は泰西の新空氣に出會ひて玉露のはかなく朝暉に消ゆるが如かりしにあらずや。然れども此混沌は原始の混沌の如くならず、速に他の組織を孕まんとする混沌なり、速に他の時代に入らんとする混沌なり、而して此混沌の中にありて、外には格別の異狀を奏せざるも、內には明らかに二箇の大潮流が逆卷き上りて、一は東より、一は西より必ず或處にて衝當るべき方向を指して進行しつつあるを見るなり。

吾人をして此相敵視せる二大潮流を觀察せしめよ。

極めて解り易き名稱にて之を言へば、其一は東洋思想なり、其二は西洋思想なり、然れども此二思想の內部精神を討ぬれば、其一は公共的の自由を經驗と學理とによりて確認し

且握取せる共和思想なり、而して其二は長上者の個人的の自由のみを承認して國家公共の獨立自由を知らず、經驗上にも學理上にも國家には中心となりて立つべきものあるを識れども、各個人の自己に各自の中心あることを認めざる族長制度的思想なり。

明治の革命は既に貴族と平民との堅壁を打破したり、政治上既に斯の如くなれば國民内部の生命なる「思想」も亦迅速に政治革命の跡を追躡したり、此時に當つて横合より國民の思想を刺戟し、頭を擧げて前面を眺めしめたるものこそあれ、そを何ぞと云ふに、西洋思想に伴ひて來れる（寧ろ西洋思想を抱きて來れる）物質的文明之なり。

福澤諭吉民が「西洋事情」は寒村僻地まで行き渡りたりと聞けり、然れども泰西の文物を說敎するものは泰西の機械用具の聲にてありき、一般の驚異は自からに崇敬の念を起さしめたり、文武の官省は洋人を聘して改革の道を講じたり、留學生の多數は重く用ひられて一つの要路に登ることゝなれり、而して政府は積年閉鎖の夢を破りて外交の事漸く緒に就くに至れり、各國の商賈は各開港場に來りて珍奇實用の器物をひさげり、チョンマゲは頑固といふ新熟語の愚弄するところとなれり、洋服は名譽ある官人の着用するところとなれり。天下を擧て物質的文明の輸入に狂奔せしめ、すべての主觀的思想は舊きは混沌の中に長夜の眠を貪り、新らしきは春草未だ萌え出るに及ばずしてモーゼなきイスラエル人は

荒原の中にさすらへて靜に命運の一轉するを俟てり。

斯の如き、變遷の時代にありては、國民の多數はすべての豫言者に聽かざるなり、而して思想の世界に於ける大小の豫言者も亦た國民を動かすに足るべき主義の上に立つこと能はざるなり、之を以て思想界に、若し勢力の尤も大なるものあらば其は國民に向つて極めて平易なる敎理を說く預言者なるべし。再言すれば敢て國民を率ゐて或處にまで達せんとする的の預言者は斯かる時代に希ふ可からず。巧に國民の意向に投じ、詳かに其の傾くところに從ひ、或意味より言はゞ國民の機嬢を取ることを主眼とする的の思想家より多くを得る能はず、爰に於て吾人は小說戲文界に於て、假名垣魯文翁の姓名を沒する能はず。更に高品なる戲文家としては成島柳北翁を推さゞるべからず。蓋し魯文翁の如きは德川時代の戲作者の後を襲ぎ、而して此の混沌時代にありて放縱を極めたるものゝみ。柳北翁に至つては純乎たる混沌時代の產物にして天下の道義を嘲弄し、世道人心を拋擲して、うろたへたる風流に身をもちくづしたるものにあらず、唯だ斯かる混沌時代にありて、指揮者をもたざる國民の思想に投合すべきものは悲しくも斯る種類の文學なることを明言するのみ。

眼を一方に轉ずれば彼三田翁が着々として思想界に於ける領地を擴げ行くを見るなり。

文人としての彼は孳々として物質的知識の進達を助けたり、彼は泰西の文物に心醉したるものにあらずとするも、泰西の外觀的文明を確かに傳道すべきものと信じたりしと覺ゆ。教師としての彼は實用經濟の道を開きて人材の泉源を造り、社會各般の機務に應ずべき用意を嚴にせり。故に泰西文明の思想界に於ける密雲は一たび彼の上に簇まりて而して後八方に散じたり。彼は實に平民に對する預言者の張本人なり。前にも言ひし如く、維新の革命は前古未曾有の革命にして、精神の自由を公共的に振分けんとする革命にてあれば、此際に居て最も多く時代に需めらるべきは此目的に適ひたるものなるが故に、其第一着として三田翁は皇天の召に應じたるものなり、然れども吾人を以て福澤翁を崇拜するものと誤解すること勿れ、吾人は公平に歷史を研究せんとするものなり、感情は吾人の此場合に於て友とするものにあらず。吾人は福澤翁を以て、明治に於て始めて平民間に傳道したる預言者なりと認む、彼を以て完全なる預言者なりと言ふにはあらず。

福澤翁には吾人「純然たる時代の驕兒」なる名稱を呈するを憚らず。彼は舊世界に生れながら徹頭徹尾舊世界を拋ちたる人なり。彼は新世界に於て擴大なる領地を有すると雖、その指の一本すらも舊世界の中に置かざりしなり。彼は平穩なる大改革家なり、然れども彼の改革は寧ろ外部の改革にして國民の理想を嚮導したるものにあらず。此時に當つて福

澤氏と相對して一方の思想界を占領したるものを敬宇先生とす。

敬宇先生は改革家にあらず、適用家なり、靜和なる保守家にして然も泰西の文物を注入するに力を效せし人なり。彼の中には東西の文明が狹き意味に於て調和しつゝあるなり。彼は儒教道教を其の末路に救ひたると共に、一方に於ては泰西の化育を適用したり。彼に於ては正直なる採擇あり、其の儒教的支那思想を以てスマイルの自助論を崇敬したり。彼は熱心なる事業はなし。溫和なる崇敬はあり、執着なる崇拜はなし。彼をして明治の革命の迷兒とならしめざるものは此適用、此採擇、此崇敬あればなり。多數の漢學思想を主意とする學者の中に挺立して能く革命の氣運に馴致し、明治の思想の建設に與つて大功ありしものは實に斯る特性あればなり。改革家としては無論偉大なる人物にあらざるも、保守家としての敬宇先生は、少くも思想界の一偉人なり。舊世界と新世界とは彼の中にありて、稀有なる調和を保つことを得たり。

福澤翁と敬宇先生とは新舊二大潮流の尤も視易き標本なり、吾人は極めて疎略なる評論を以て此二偉人を去らんとす。爰に至つて吾人は眼を轉じて政治界の變遷を觀察せざるべからず。

政治上の變遷

明治文學
管見之四

族長制度の眞相は蛛網なり。その中心に於て、その制度に適するすべての精神を蒐むるなり。而して數百數千の細流は其中心より出でゝ、金環を周綴し、而して又た再び其の金環より中心に歸注するものなり。

斯の如き眞相は吾人之を我が封建制度の上にも同じく認むるなり。歐洲各國の歷史が一度經過したる封建制度と我が封建制度との根本の相違は蓋し此點に於て存するなり。然れども尤も多く族長制度的封建を完成したるは、之を德川氏に見るのみ。足利氏は終始事多くして、制度としては何の見るべきところもなし、北條氏は實權は之を保有せしにせよ、其狀態は恰も番頭の主家を攝理するが如くなりしなり。源家に至りては極めて規模なく、極めて經綸なきものにして、藤原氏の如きは暫らく主家を横領したる手代のみ、藤原氏の時代には政權の一部分は猶皇室に屬したり。藤原北條氏の時代に於ては政權は旣に大方武門に歸したりと雖、なほ文學宗教等は王室の周邊にあつまれり。降つて德川氏に至りては、

雄大なる規模を以て政治をも、宗教をも、文學をも、悉くその統一權の下に集めたり。德川氏は封建制度を完成したり、その「完成」とは卽ち悉皆日本社會に當て嵌めたるものにして、再言すれば日本種族の精神が其制度に於て「滿足」を見出すほどに完備したるなり。

德川氏は封建としては、斯の如く完備したる制度を建設したり。故に德川氏の衰亡は卽ち封建制度の衰亡ならざるべからず。日本民權は德川氏に於てすべての封建政府の失敗を見たり、天皇御親政は卽積みたり、而して德川氏の失敗に於てすべての封建政府の失敗を見たり、天皇御親政は卽ち其の結果なり。

德川氏の失敗は封建制度の墜落となれり。明治の革命は二側面を有す、其一は御親政にして其二は聯合體の治者是なり。更に細說すれば、一方に於ては武將の統御に打勝ちたる王室の權力あり。他方に於ては、一團體の統治紊れて聯合したる勢力の勝利あり、制伏者として天下を治めたる武斷的政府は德川氏を以て終りを告げ、廣き意味に於て國民の輿論の第一の勝利を見たり。而して之を促したるものは外交問題なりしことを忘るべからず。

凡そ外交問題ほど國民の元氣を煥發するものはあらざる也。之なければ放縱懶惰安逸虛禮等に流れて覺束なき運命に陷るもの也。德川氏の天下に臨むや法制嚴密にして注意極めて精到、之を以て三百年の政權は殆ど王室の尊嚴をさへ奪はんとするばかりなりし、然る

に彼の如くもろく仆れたる者は、好し腐敗の大に中に生じたるものあるにもせよ、吾人は主として之を外交の事に歸せざるを得ず。而して外交の事に就きても、蓋し國民の元氣の之に對して勃として興起したることを以て、德川氏の根柢を拔きたる第一因とせざるべからず。

國民の精神は外交の事によつて覺醒したり。其結果として尊王攘夷論を天下に瀰漫せしめたり。多數の浪人をして孤劍三尺東西に漂遊せしめたり。幕府衰亡の顚末は櫻痴居士の精細なる叙事にて其實況を知悉するに足れり。吾人は之を詳論するの暇なし、唯だ吾人が讀者に確かめ置きたき事は、斯の如く覺醒したる國民の精神は啻に德川氏を仆したるのみならず、從來の組織を碎折し、從來の制度を擊破し盡くすにあらざれば滿足することを能はざること之なり。

明治政府は國民の精神の相手として立てり。國民の精神は明治政府に於て其の滿足を遂げたり、爰に至つて外交の問題も一ト先づ其の局を結びたり、明治六七年迄は聯合したる勢力の結託鞏固にして、專ら破壞的の事業に力を注ぎたり、然れども明治政府の最初の聯合體は、寧ろ破壞的の聯合組織にして、破壞すべき目的の狹まくなりゆくと共に、建設すべき事業に於て相撞着するところなき能はず。爰に於て征韓論の大破綻あり、佐賀の變、

十年の役等は蓋し其の結果なるべし。之よりして政府部内にあるすべての競爭は聯合體より單一體に趨かんとする傾向に基けり、凡ての專制政體に於て此事あり、吾人は獨り明治政府を怪しまざるなり。

吾人の眼球を一轉して、吾國の歷史に於て空前絕後なる一主義の萌芽を觀察せしめよ。即ち民權といふ名を以て起りたる個人的精神是なり、この精神を尋ぬる時は吾人奇くも其發源を革命の主因たりし精神の發動に歸せざるべからざる數多の理由を見出すなり。渠は革命の成功と共に一たびは沈靜したり、然れども此は沈靜にあらずして潛伏なりき。革命の成るまでは、皇室に對し國家に對して起りたる精神の動作なりき。既に此目的を達したる後は、如何なる形にて、其動作をあらはすべきや。

國民は既に政治上に於ては舊制を打破して萬民俱に國民たるの權利と義務を擔へり。この「權利」と「義務」は自からに發達し來れり、權義の發達は卽ち個人的精神の發達なり。材能あるものは登用して政府の機務を處理することゝなれり。而して材能なきものと雖も一村一邑に獨立したる權義の舞臺となりて、個人的の自由を享有するものとなれり。富の勤力は俄かに上騰したり。アビリチーの榮光漸くあらはれ來れり。必要は政府を促がして法律の輸入をなさしめたり。之を要するに個人的精神は長大足の進歩を以て狹き意味に於

ける國家的の精神の領地を掠め去れり。國民の自由を保護すべき武器として、言論集會出版等の勢力漸くにして世に顯はれたり。政府未だ如何にして是等の新傾向に當るべきかを知らざりしなり。明治政府はひたすら聯合より單一に趣かんことに意を鋭くしたり。十年の役は聊か其目的を達したりと雖、なほ各種の異分子の相疾惡するもの政府部内に蟠據するあれば、表面は堅固なる組織の如くなれど其實極めて不安心なる國體なりと云はざるを得ず。

厭世詩家と女性

戀愛は人世の祕鑰なり、戀愛ありて後人世あり、戀愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ。然るに尤も多く人世を觀じ、尤も多く人世の祕奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く戀愛に罪業を作るは抑も如何なる理ぞ。古往今來詩家の戀愛に失する者擧げて數ふ可からず、遂に女性をして嫁して詩家の妻となるを戒しむるに至らしめたり。詩家豈無情の動物ならむ。否其濃情なる事常人に幾倍する事著るし、然るに網繆綣りを全ふせざる者多きは何故ぞ、ギョオテの鬼才を以て後人をして彼の頭は黄金彼の心は是れ鉛なりと言はしめしも、其戀愛に對する節操全からざりければなり。バイロンの嵩峻を以ても彼の貞淑寡言の良妻をして狂人と疑はしめ、去つて伊太利に飄泊するに及んで妻ある者女ある者をしてバイロンの出入を嚴にせしめしが如き、或はシェレイの合歡未だ久しからざるに妻は去つて自ら殺し、郎も亦た天命を全ふせざりしが如き、彼の高嚴莊重なるミルトンまでも一度は此轍を履まんとし嶢崎豪逸なるカーライルさへ死後に遺筆を梓するに至りて合歡團欒ならざりし醜を發見せられぬ。其他マルロー、ベン、ジョンソン以下を數へなば誰か詩人の妻たるを怖れぬ者のあるべき。

思想と戀愛とは仇讐なるか、安んぞ知らむ戀愛は思想を高潔ならしむる慈母なるを。エマルソン言へることあり、尤も冷淡なる哲學者と雖も戀愛の猛勢に驅られて逍遙徘徊ぜし少壯なりし時の靈魂が負ふたる債を濟す事能はざる者となすの奇蹟なり。然れども戀愛は一見外には見ゆ可からざるも終生抹する事能はずと。戀愛は各人の胸裡に一顰痕を印して卑陋暗黑なる者にあらす。戀愛を有せざる者は春來ぬ間の樹立の如く何となく物寂しき位地に立つ者なり、而して各人各個に人生の奥義の一端に入るを得るは戀愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ戀愛は透明にして美の眞を貫ぬ

く、戀愛あらざる内は社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は物のあはれ風物の光景何となく假を去つて實に就き隣家より我家に移るが如く覺ゆるなれ。

蓋し人は生れながらにして理性を有し希望を蓄へ現在に甘んぜざる性質あるなり。社會の貧絲に苦しめられず眞直に伸びたる小兒は本來の想世界に生長し實世界を知らざるものなり。然れども生活の一代に實世界と密接し抱含せられざる者はなけむ。必ずや其想界即ち無邪氣の世界と實世界即ち浮世又は娑婆と稱する者と相爭ひ相脫む時期に達するを免れず。實世界は强大なる勢力なり想世界は社會の不調子を知らざる中にこそ成立すべけれ、既に浮世の刺衝に當りたる上は好しや苦戰搏鬪するとても遂には弓折れ箭盡くるの非運を招くに至るこそ理の數なれ。此時想世界の敗將氣沮み心疲れて何物をか得て滿足を求めんとす、勞力義務等は實世界の遊軍にして常に想世界を覗ふ者、其他百般の事物彼に迫つて劍槍相接衝す、彼を援くる者彼を滿足せしむる者果して何物とかなす、曰く戀愛なり、美人と天の一方に思求し展轉反側する者實に此際に起るなり。生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ、女性なるが故に男性を慕ふのみとするは、人間の價格を禽獸の位地に遷す者なり。春心の勃發すると同時に戀愛を生ずると言ふは古來似非小說家の人生を卑しみて己れの卑陋なる理想の中に縮小したる毒弊なり、戀愛豈單純なる思慕ならんや、想世界と實世界と

の戰爭より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となるは卽ち戀愛なり。

此戀愛あればこそ理性ある人間は悉く惱死せらるなれ、此戀愛あればこそ實世界に乘入る欲望を惹起するなれ、コレリッヂがロメオ、エンド、ジュリエツトを評する中にロメオの戀愛を以て彼自身の意匠を戀愛せし者となし第一の愛婦なる「ロザリン」は自身の意匠の假物なりと論ぜるは蓋し多くの戀情を獸慾視して實性を見究めざる作家を誡しむるに足る可し。

戀愛は剛愎なるバイロンを泣かせしと言ふ微妙なる音樂の境を越えて廣がれり。戀愛は細微なる美術家と稱へられたるギヨオテが企る事能はざる純潔なる寶玉なり、彼の雄邁にして輭優を兼ねたるダンテをして昊天高上に絶叫せしめたるも其最大誘因は戀愛なり。彼の痛烈悲酸なる生涯を終りたるスウイフトも戀愛に數度の敗れを取りたればこそ彼の如くにはなりたれ。嗚呼戀愛よ汝は斯くも權勢ある者ながら爾の哺養し爾の切に需めらるゝ詩家の爲に虐遇する所となる事多きは如何に慨歎すべき事ならずや。

女性を冷罵する事東西厭世家の常なり。釋氏も力を籠めて女人を罵り沙翁も往々女人に關して慊らぬ語氣を吐けり、我露伴子の一口劍を草するや巧に阿蘭を作りて作家の哲學思想を發揮し、更に風流悟にして共解脫を說きたる所余の尤も服する所なり。蓋し女性は感

情的の動物なり、詩家も亦た男性中の女性と言ふ可き程に感情に富める者なり。深夜火器を弄して閨中の人を愕かせしバイロン必ずしも狂人たりしにあらざる可し、蓋し女性は或意味に於て甚だ偏狭頑迷なる者なり、而して詩家も亦た或點より觀れば之に似たる所あるを免れず。蓋し女性は優美纖細なる者なり、而して詩家も亦た其思想に於ては優美纖細を常とする者なり、豪放雄壯なる詩句を逆出する時に於ても詩家は優美を旨とするものなるを以て自ら女性に似たるところあるを免れず。其他生理學上に於て詳に詩家の性情を檢察すれば神經質なるところ執着なるところ等、類同の個條蓋し數ふるに遑あらざる可し。是等の類同なる諸點あるが故に同性相忌むところよりして詩家は遂に綱繆を全ふする事能はざる者なるか。夫れ或は然らむ、然れども余は別に說あり詩ふ識者に問はむ。

合歡綢繆を全ふせざるもの詩家の常ながら特に厭世詩家の多きを見て思ふ所なり。抑も人間の生涯に思想なる者の發萌し來るより善美を希ふて醜惡を忌むは自然の理なり、而して世に熟せず世の奥に貫かぬ心には人世の不調子不都合を見初むる時に初理想の甚だ齟齬せるを感じ想世界の風物何となく人をして慘惻たらしむ。知識と經驗とが相敵視し妄想と實想とが相爭戰する少年の頃に浮世を怪訝し厭嫌するの情起り易きは至當の者なりと言ふ可し。人生れながらにして義務を知る者ならず、人生れながらにして德義を知るものならず、

義務も德義も雙對的の者にして、社會を透視したる後「己れ」を明見したるの後に始めて知り得可き者にして、義務德義を辨ぜざる純樸なる少年の思想が始めて複雜解し難き社會の祕奥に接する時に誰れか能く厭世思想を胎生せざるを得んや。誠信は以て厭世思想にかつ事を得べし、然れども誠信なる者は眞に難事にしてポーロの如き大聖すら嗚呼われ罪人なるかなと嘆じたる事ある程なれば、厭世の眞相を知りたる人にして之に勝つ程の誠信あらん人は凡俗ならざる可し。ポープの樂天主義の如きは蓋し所謂解脫したる樂天にして其曾つて唱ひし詞句に「凡ての自然は妙術なれば汝の能く解する所ならじ、凡ての偶事は指呼に從ふものにして汝の關する所ならじ、凡ての不和は遂に調和なる事も汝が會し得る所ならじ、一部に惡と思はるゝ所のものは一部に善、傲慢に訊ふ勿れ誤理に惑はさるゝ勿れ、凡そ一眞理の透明なるあらば其の如何なる者なるを問はず必ず善なるを疑ふ勿れ。」と云ふ一節あり。蓋し斯の如きは人世の壓威を自力を以て排斥したりと思惟する者にして抑も經驗の結果なり。凡そ經驗なきの思想には斯の如き解脫思ひも寄らぬ事なり。

偖て誠信の以て厭世に勝つところなく經驗の以て厭世を破るところなき純一なる理想を有てる少壯者流の眼中には實世界の現象悉く假僞なるが如きに見ゆ可きか、曰く否、中には一物の假僞ならず見ゆる者あり、誠實忠信「死」も奪ふ可からずと見ゆる者あり、何ぞや

曰く戀愛なり、情は闘爭すべき質を以て生れたる元素なれども其戀愛の域に進む時は全然平和調美の者となり、知らず識らず一女性の中に圓滿を畫かしむ。情人相對する時は天地に强敵なく、不平も不融和も悉く其席を開きて眞美の天使をして代つて坐せしむ。少き思想の實世界の蹂躙する所となる事多し、特に所謂詩家なる者の想像的腦髓の盛壯なるときに、實世界の攻撃に堪へざるが如き觀あるは、止むを得ざるの事實なり、況んや沈痛凄惻人生を穢土なりとのみ觀ずる厭世家の境界に於てをや。曷んぞ戀愛なる牙城に據る事の多からざるを得んや曷んぞ戀愛なる者を其實物よりも重大して見る事なきを得んや。戀愛は現在のみならずして一分は希望に屬する者なり、卽ち身方となり慰勞者となり、半身となるの希望を生ぜしむる者なり。夫れ厭世家は此世に屬する者とし言はゞ名譽にもあれ利得にもあれ玉者の玉冠にもあれ鐵道王の富榮にもあれ一の希望を置くところあらざるなり、故にこの世の希望と厭世家とは氷炭相容れざるの中なる可し。然るに戀愛なる一物のみは能く彼の厭世家の呻吟する胸奥に忍び入る祕訣を有し奇しくも彼をして多少の希望を起さしむる者なり。情の性は沈靜なるを得ざる者なり。其の一たび入るや人の心を攪亂するを以て常とす、況してや平生激昂しやすき厭世家の想像はこの誠實なる社會に遭ひて脆くも嗟嗟の間に奇異なる魔力に打ち勝たれ、根もなき希望を釀し來り全心を擧げて情の奴とす

るは見易き道理なり。

世界は一たび我を犧牲にすると同時に我れなる「己れ」を寫し出す明鏡なり。男女相愛して後始めて社會の眞相を知る、細小なる昆蟲も全く孤立して己が自由に働かず、人間の相集つて社會を爲すや相倚託し相抱擁するにより始めて社會なる者を建成し維持する事を得るの理も相愛なる第一階を登つて始めて之を知るを得るなれ。獨り棲む中は社會の一分子なる要素全く成立せず、雙個相合して始めて社會の一分子となり、社會に對する己れをば明らかに見る事を得るなり。

男女既に合して一となりたる曉には空行く雲にも顏あるが如く、森に鳴く鳥の聲にも悉く調子あるが如く、昨日といふ過去は幾十年を經たる昔日の如く今日といふ現在は幾代にも亘るべき實存の如くに感じ、今迄は緣遠かりし社會は急に間近に迫り來り、今迄は深く念頭に掛けざりし儀式も義務も急速に推しかけ來り、俄然其境界を代へしめて無形より有形に入らしめ無頓着より細心に移らしめ、社會組織の網繩に繫がれて不規則規則にかはり、換言すれば想世界より實世界の擒となり、想世界の不覊を失うて實世界の束縛となる、風流家の語を以て之を一言すれば婚姻は人を俗化し了する者なり。然れども俗化するは人を俗化して正當の位地に立たしむる所以にして上帝に對する義務も人間に對する義務も、古へ人

が爛漫たる花に譬へたる徳義も人の正當なる地位に立つよりして始めて生ずる者なる可けれ、故に婚姻の人を俗化するは人を眞面目ならしむる所以にして、妄想滅じ實想殖ゆるは人生の正午期に入るの用意を怠らしめざる基ひなる可けむ。

厭世家が戀愛に對すること常人よりも激切なるの理由前に既に述べたり。怪しきかな戀愛の厭世家を眩せしむるの容易なるが如くに婚姻は厭世家を失望せしむる事甚だ容易なりそも〳〵厭世家なるものは社會の規律に遵ふことを能はざる者なり、社會を以て家となさゞる者なり、「世に愛せられず世をも愛せざる者なり、普通の快樂は以て快樂と認められざるme) 繩墨の規矩に掣肘せらるゝこと能はざる者なり。(My Pleasure is not that of the world, nor the world e.t.c.) 一言すれば彼等が穢土と罵るこの娑婆に於て社會といふ組織を爲す可き資格を缺ける者なり。故に多くの希望を以て多くの想像を以て入りたる婚姻の結合は彼等をして敵地に蹈入らしめたるが如きのみ。彼等が明鏡の裡に我が眞影の寫るを見て益〻厭世の度を高ふすべきも婚姻の快樂は彼等を誠信と樂天に導くには力足らぬなり。

彼等は人世を厭離するの思想こそあれ、人世に覊束せられんことは思ひも寄らぬところなり、婚姻が彼等をして一層社會を嫌厭せしめ、一層義務に背かしめ、一層不滿を多から

しむる者是を以てなり。かるが故に始めに過重なる希望を以て入りたる婚姻は後に比較的の失望を招かしめ、慘として夫婦相對するが如き事起るなり。

女性は感情の動物なれば愛するよりも愛せらるゝが故に愛すること多きなり。愛を仕向けるよりも愛に酬ゆるこそ其の正當の地位なれ。葛藟となりて幹に纏ひ賓はるが如く男性に倚るものなり、男性の一擧一動を以て喜憂となす者なり、男性の愛情は爲に左右せらるる者なり。然るに不幸にして男性の素振に已れを嫉忌するの狀あるを見ば嫉妬も萌すなり、廻り氣も起るなり、恨み苦みも生ずるなり、男性の自ら繰戻すにあらざれば、眞誠の愛情或は外れて意外の事あるに至る可し。而して既に社會を厭へるもの、破壞的思想に充ちたるもの、世俗の義務及び德義に重きを置かざるもの即ち彼の厭世詩家に至りては、果して能く女性に對する調和を全ふし得可きや。

夫れ詩人は頑物なり、世路を濶歩することを好まずして我が自ら造れる天地の中に逍遙する者なり。厭世主義を奉ずる者に至りては、其造れる天地の實世界と懸絶すること甚だ遠しと云ふ可く、婚姻によりて實世界に擒せられたるが爲にわが理想の小天地は益狹窄なるが如きを覺えて、最初には理想の牙城として戀愛したる者が後には忌はしき愛縛となりて我身を制抑するが如く感ずるなり。此に至つて釋氏をして惑哉肉眼吾今觀之從頭至足無

一好也と罵り又た其内妓臭穢外爲厳飾容加又含毒蝮劇如蛇與龍と叫び、更に又た婦人非常友如燈燄不停彼則是常怨猶如畫石文云々等の語を發せしめ東洋の厭世教をして長く女性を冷遇するの積弊を起さしめたり。

婚姻と死とは僅に邦語を談ずるを得るの稚兒より墳墓に近づく迄人間の常に口にする厭なりとはエマルソンの至言なり。讀本を懐にして校堂に上るの小兒が他の少女に對して互に面を赧ふすることも、假名を便りに草紙讀む幼な心に既に戀愛の何物なるかを想像することも皆な是人生の順序にして、正常に戀愛するは正當に世を辭し去ると同一の大法なる可けれ。戀愛によりて人は理想の聚合を得婚姻によりて想界より實界に擒せられ、死によりて實界と物質界とを脫離す、抑も戀愛の始めは自らの意匠を愛する者にして對手なる女性は假物なれば、好しや其愛情益〻發達するとも遂には狂愛より靜愛に移るの時期ある可し、此靜愛なる者は厭世詩家に取りて一の重荷なるが如くになりて合歡の情或は中折するに至るは豈惜む可きあまりならずや。バイロンが英國を去る時の詠歌の中に「誰か情婦又は正妻のかこちごとや空涙を眞事とし受くる愚を學ばむ」と言出けむも實に厭世家の心事を暴露せるものなる可し。同作家の「婦人に寄語す」と題する一篇を讀まば英國の如き兩性の間柄嚴格なる國に於てすら斯の如き放言を吐きし詩家の胸奥を覗ふに足る可けむ。

嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通辯となりて其嘲罵する所となり、終生涙を飲んで寢ねての夢覺めての夢に郎を思ひ郎を恨んで遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ。戀人の破綻して相別れたるは雙方に永久の冬夜を賦與したるが如しとバイロンは自白せり。

人生に相渉るとは何の謂ぞ

織巧細弱なる文學は端なく江湖の嫉厭を招きて、異しきまでに反動の勢力を現はし來りぬ。愛山生が德川時代の文豪の遺風を襲ひて、「史論」と名くる鐵槌を揮ふことになりたるも、其の一現象と見るべし。民友社として愛山生を起たしめたるも、江湖をして愛山生を迎へしめたるも、この反動の勢力の鬱勃したる餘りなるべし。

反動は愛山生を載せて走れり。而して今や愛山生は反動を載せて走らんとす。彼は「史論」と名くる鐵槌を以て擊碎すべき目的を擴めて、頻りに純文學の領地を襲はんとす。反動をして反動の勢を縱にせしむるは余も異存なし、唯だ反動を載せて、他の反動を起さし

むるまで遠く走らんとするを見る時に、反動より反動に漂ふの運命を我が文學に與ふるを悲しまざる能はず。愛山生は、文章卽ち事業なる事を認めて賴襄論の冒頭に宣言せり。何が故に事業なりや。愛山生は之を解いて曰く、第一、爲す所あるが爲なり。第二、世を益するが故なり。第三、人世に相涉るが故なりと。

而して彼は又た文章の事業たるを得ざる條件を擧げて曰く。第一、空を擊つ劍の如きもの。第二、空の空なるもの。第三、華麗妙文の人生に相涉らざるもの。而して彼は此冒頭を結びて曰く「文章は事業なるが故に崇むべし、吾人が賴襄を論ずる卽ち渠の事業を論ずるなり」と。

大丈夫の一世に立つや必ず一の抱く所なくんばあらず、然れども抱く所のものは必ずしも見るべきの功績を建立するにはあらず。建築家の役々として其業に從ふや幾多の歲月を費して後確かに巍乎たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、其費やすところの勞力は直ちに有形の樓閣となりて、ニコライの高塔の如く衆目を引くべきにあらず。衆目衆耳の擧動することなき事業にして或は大に世界を震ふことあるなり。

天下に極めて無言なる者あり山嶽之なり、然れども彼は絶大の雄辯家なり。若し言の有無を以て辯の有無を爭はゞ凡ての自然は極て憫れむべき唖兒なるべし。然れども常に無言にして常に雄辯なるは自然に加ふるものなきなり。人間に若し自然の如く無言なるものあらば、愛山生一派の論士は其の傍に來りて、爾何ぞ能く言はざると嘲らんか。

人間の爲すところも亦斯の如し。極めて拙劣なる生涯の中に尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる內部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて眞摯なる靈劍を空際に擊つ雄士は人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり。爲す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざるところなり。

吾人は記憶す、人間は戰ふ爲に生れたるを。戰ふは戰ふ爲に戰ふにあらずして戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり、戰ふ時は必ず敵を認めて戰ふなり、筆を以てすると劍を以てすると、戰ふに於ては相異なるところなし。然れども敵とするものゝ種類によつて戰ふものゝ戰を異にするは當然なり。戰ふものゝ戰の異なるによつて勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて敵に勝ち凱歌

を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戰士は斯の如く勝利を携へて歸らざることあり、彼の一生は勝利を目的として戰はず、別に大に企圖するところあり、空を擊ち虛を狙ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

斯の如き戰は、文士の好んで戰ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き戰に運命を委ねてあるなり。文士の前にある戰場は、一局部の原野にあらず、廣大なる原野なり、彼は事業を齎し歸らんとして戰場に赴かず、必死を期し原頭の露となるを覺悟して家を出づるなり。斯の如き戰場に出で斯の如き戰爭を爲すは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の結果に於て大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり。

愛山生が「文章卽ち事業なり」と宣言したるは善し、然れども文章と事業とを都會の家屋の如く相接近したるものゝ如く言ひたるは不可なり。敢て不可といふ。何となれば、聖淨にして犯すべからざる文學の威嚴は、「事業」といふ俗界の「神」に近づけられたるを以て損ずべければなり、八百萬づの神々の中に、事業といふ神の位地は甚だ高からず。文學といふ女神は或は老孃（テールド、ミッス）にて世を送ることあるも、卑野なる神に配することを肯んぜざるべければなり。

京山、種彦、馬琴の三文士を論ひて、京山を賞揚せられたるは愛山生なり。其故いかにといふに、馬琴は己れの理想を歌ひて馬琴の文學を衒ひたるに過ぎず、種彦は人品高尙にして俗情に疎きところあり、馬琴によりては當時の社會を知るには役に立たず、種彦は平民に緣遠きが故に不可なり、獨り京山に到りては番頭小僧までも寫實して殘すところなきが故に重んずべきなりと、斯く愛山生は說けり。天下の衆生をして悉く愛山生の如き史論家ならしめば、當時の社會を知るの要を重んじて、京山をも、西鶴をも、最上乘の作家として畏敬するなるべし。天下の衆生をして悉く愛山生の如き平民論者ならしめば、山東家の小說は凡ての他の小說を凌ぐことを得べきこと必せり。

然れども文學は事業を目的とせざるなり、文學は人生に相涉ること、京山の寫實主義ほどになるを必須とせざるなり、文學は敵を目掛けて擊ちかゝること山陽の勤王論の如くなるを必須とせざるなり、最後に文學は必ずしも一人若しくは數百人の敵、見るべきの敵を目掛けて擊つを要せざるなり、擊といふ字は山陽一流の文士にこそ用あれ、愛山の所謂空の空を目掛けて大に擊つ文士に何の用かあらむ。山陽も擊てり、山陽の擊ちたる戰は今日に於て人に記憶せらるゝなり、然れども其の擊ちたるところは愛山生の言ふ如く直接に人生に相涉れり、人生に相涉るが故に人生を離るゝ事も亦た速ならんとす。源賴朝は能く擊

てり、然れども其の擊ちたるところは速かに去れり、彼は一個の大戰士なれども、彼の戰場は實に限ある戰場にてありし、西行も能く擊てり、シエクスピーアも能く擊てり、ウオーヅオルスも能く擊てり、曲亭馬琴も能く擊てり、是等の諸輩も大戰士なり、而して前者と相異なる所以は前者の如く直接の敵を目掛けて限ある戰場に戰はず、換言すれば天地の限なきミステリーを目掛けて擊ちたるが故に、愛山生には空の空を擊ちたりと言はれんも、空の空の空を擊ちて星にまで達せんとせしにあるのみ。行いて賴朝の墓を鎌倉山に開きて見よ、彼が言はんと欲するところ何事ぞ。來りて西行の姿を山家集の上に見よ。孰れか能く言ひ孰れか能く言はざる。

然れども、文士は世を益せざるべからず、西行馬琴の徒が益したるところ何物ぞと斯く愛山生は問はむか。

文學のユチリチー論今日に始まりたるにあらず、吾等の先祖に勸善懲惡說あり、吾等の同時代に平民的批評家としての活用論者を愛山生に得たるも故なきにあらず、硝子は水晶に比して活用の便あり、以て洋燈のホヤとなすべし、以て窓戸を裝ふべし、以て洋燈のホヤとなすべし、天下普く其の活用の便を認むるを得るなり。然れども天下の愚人が水晶といふ活用の便に乏しきものに向つて高價を拂ふは何ぞや。水晶を買ふものをして、數十金を出して露店の硝子玉を買はしめんとする神學を創見するものあらば、余は疑はず水天宮に參詣する衆生は爭ひ來りて其說法を聽聞するなるべし。京山をして、山陽をして學をテンプルの偶像たらしめば、カーライルをして英雄崇拜論に一題を缺きたりしを地下に後悔せしむることあるべし。

吉野山に遊覽して、歎息するものあり、曰く何ぞ櫻樹を伐りて梅樹を植ゑざる、花玉樹は何の活用に適するところあらむ、梅樹の以て千金の利を果實によつて得るに如かんやと、一人ありて傍より容喙して曰へらく、梅樹は作るところの利に於て甘藷を作るに如かず、他の一人は又た曰く甘藷は市場に出ての相場極めて廉なり、亞米利加種の林檎を植うるに如かずと。われは是等の論者が利を算するの速なるを喜び、眞理を認むるの確なるを謝するに吝ならざらんと欲す、然れども吉野山を以て活用論者の手に委ぬるは福澤先生を同志社の總理に推すことを好まざると同じく好まざるなり。

肉の力は肉の力を擊つに足るべし、死したるものゝ死したるものを葬むるを得るといふ眞理は、ナザレの人の子も之れを說けり。然れども死したるものゝ葬むることを得ざるものあるは、肉の力の擊碎することを得ざるものあると共に他の一側に橫はれる眞理なり。一人の敵を學ぶの非なるは萬人の敵を學びても猶ほ失敗したる項羽すら之を發見せり。萬人の敵を學ぶは百萬人の敵を學ぶに如かざればならむ。百萬人の敵を學びたる（假定して）

漢王も亦た「死朽」といふ不可算の敵の前には無言にして仆れたり、「死朽」といふ敵に對して、吾人は吾人の刀劍を揮ふこと愛山生の所謂英雄劍を揮ふ如くするも、成敗の數は始めより定まりてある如く吾人は自然(力としての)の前に立ちて脆弱なる勇士にてあるなり。

「力」としての自然は、眼に見えざる、他の言葉にて言へば空の空なる銃槍を以て時々刻刻「肉」としての人間に迫り來るなり。草薙の劍は能く見ゆる野火を薙ぎ盡したりと雖見えざる銃槍は、よもや薙ぎ盡せまじ。英雄をして劍を揮はしむるは見る可き敵に當ればなり、文章をして京山もしくは山陽の如く世を益するが爲めと、人世に相渉らしむるが爲に戰はしむるは、見るべき實(卽ち敵)に當らしむるが爲なり。然れども空の空なる銃槍を迎へて戰ふには空の空なる銃槍を以てせざるべからず、玆に於て靈の劍を鑄るの必要あるなり。

自然は吾人に服從を命ずるものなり、「力」としての自然は吾人を暴壓することを憚らざるものなり。「誘惑」を向け、「欲情」を向け、「空想」を向け、吾人をして殆ど孤城落日の地位に立たしむるを好むものなり、而して吾人は或る度までは必ず服從せざるべからざる「運命」、然り、悲しき「運命」に包まれてあるなり。項羽は能く虞美人に別るゝことを得たれども、吾人は此の悲しき「運命」と一刻も相別るゝを得ざるものなり。然れども自然は吾人をして「失望落膽」の極遂に甘んじて自然の力に服從し了するまでに吾人を困窮せしめざるな

り。爰に活路あり、活路は必ずしも活用と趣を一にせず、吾人をして空虛なる英雄を氣取りて、力としての自然の前に、大言壯語せしむるものは我が言ふ活路にあらず、吾人は吾人の靈魂をして、肉として吾人の失ひたる自由を、他の大自在の靈世界に向つて縱に握らしむる事を得るなり。自然は暴虐を專一とする兵馬の英雄の如きにあらず、一方に於て風雨雷電を驅つて吾人を困ましむると同時に、他方に於ては、美妙なる絶對的のものをあらはして吾人を樂しましむるなり。風に對しては戶を造り、雨に對しては屋根を葺き、雷に對しては避雷柱を造る、斯くして人間は出來得る丈は物質的の權を以て自然の力に當るべしと雖、かくするは限りある權をもて限りなき力を擊つの業にして、到底限りある權を投げやりて自然といふものゝ懷裡に躍り入るの妙なるには如かざるなり。爰に於て吉野山は、活用論者の睹易からざる活機を吾人に敎ふるなり。「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」と歌ひたる詩人が活用論者の知ること能はざる大活機を看破したるは卽ち爰にあるなり。

宗敎なし、サプライムなしと嘲けられたる芭蕉は振り向きて嘲りたる者も見もせまじ、然れども斯く嘲りたる平民的短歌の史論家(同じく愛山生)と時を同うして立つの悲しさは無言勤行の芭蕉より共詞句の一を借り來つて、わが論[illegible]を固むるの非禮を行はざるを得ず。

古池の句は世に定說ありと聞けば之を引かず、一層簡明なる一句余が淺學に該當するものあれば暫く之を論ぜんと欲す。其は、

明月や池をめぐりてよもすがら

の一句なり。

池の岸に立ちなる一個人は肉をもて成りたる人間なることを記憶せよ。彼はすべての愛縛、すべての執着、すべての官能的感覺に圍まれてあることを記憶せよ。彼は眼ある物質的の權をもて爭ひ得る丈は是等無形の仇敵と搏闘したりといふことを記憶せよ。彼は功名と利達とに手を出すべき多くの機會ありたることを記憶せよ。彼は人世に相渉るの事業に何事をも難しとするところなかりしことを記憶せよ。然るに彼は自ら滿足することを得ざりしなり。自ら勝利を占めたりと信ずることを得ざりしなり、淺薄なる眼光を以てすれば勝利なりと見るべきものをも彼は勝利と見る能はざりしなり。爰に於いて彼は實を擊つの手を息めて空を擊たんと悶きはじめたるなり。彼は池の一側に立ちて池の一小部分を睨むに甘んぜず、徐々として歩みはじめたり。池の周邊を一めぐりせり。一めぐりにては、池の全面を睨むに足らざるを知りて、再回せり。再回は池の全面を眺むに足りしかど、池の底までを睨らむことを得ざりしが故に更に三回めぐりたり、四回めぐりたり而して終によ

もすがらめぐりたり。池は卽ち實なり。而して彼が池を睨みたるは、暗中に水を打つ小兒の業に同じからずして、何物をか池に寫して睨みたるなり。何物にか池を照さしめて睨みたるなり。睨みたりとは、視る仕方の當初を指して言ひ得る言葉なり。視る仕方の後を言ふ言葉は Annihilation の外なかるべし。彼は實を忘れたるなり、彼は人間を離れたるなり。實を忘れ、肉を脫したるなり。實を忘れ、肉を脫し、人間を離れて何處にか去れる、杜鵑の行衛は問ふことを止めよ、天涯高く飛び去りて絶對的の物、卽ち Idea にまで達したるなり。

彼は事實の世界を忘れたるにあらず、池をめぐりて兩三回するは實を見貫く心ありてなり、實は自然の一側なり、而して實を照らすものも亦た自然の他の一側なり、實は吾人の敵となりて、吾人に迫ることを爲せども、他の一個なる虛は吾人の好友となりて吾人を導き天涯にまで上らしむるなり、池面にうつり出たる團々たる明月は彼をして力としての自然を後へに見て一躍して美妙なる自然に進み入らしめたり。

サブライムとは形の判斷にあらずして想の領分なり、卽ち前に云ひたる池をめぐりてよもすがらせる如き人の、一躍して自然の懷裡に入りたる後に、彼處にて見出すべき朋友を言ふなり、この至眞至誠なる朋友を得て而して後夜を徹するまで池をめぐるの味あるなり。

池をめぐるは Nothingness をめぐるにあらず、この世ならぬ朋友と共に逍遙遊するを樂しむ爲にするなり。

造化主は吾人に許すに意志の自由を以てす現象世界に於いて煩悶苦戰する間に吾人は造化主の吾人に與へたる大活機を利用して、猛虎の牙を弱め、倒崖の根を堅ふすることを得るなり。現象以外に超立して最後の理想に到着するの道吾人の前に開けてあり。大自在の風雅を傳道するは此の大活機を傳道するなり何ぞ英雄劍を揮ふと言はむ。何ぞ爲すところあるが爲めと言はむ。何ぞ人世に相渉らざる可からずと言はむ。空の空の空を擊つて星にまで達することを期すべし、俗世をして俗世の笑ふまゝに笑はしむべし、俗世を濟度するは俗世に喜ばるゝが爲ならず、肉の劍はいかほどに鋭くもあれ、肉を以て肉を擊たんは文士が最後の戰場にあらず、眼を擧げて大、大、大の虛界を視よ。彼處に登攀して淸涼宮を捕握せよ、淸涼宮を捕握したらば携へ歸りて俗界の衆生に其一滴の水を飮ましめよ、彼等は活きむ、嗚呼彼等庶幾くは活きんか。

自然の力をして縱に吾人の脛脚を控縛せしめよ、然れども吾人の頭部は大勇猛の權(ちから)を以て現象以外の別乾坤にまで挺立せしめて、其處に大自在の風雅と逍遙せしむべし。彼物質的論家の如きは、世界を狹少なる家屋となして其家屋の內部を整頓せるの外には一世の能

事なしとし、甘じて爰に起臥せんとす、而して風雨の外より犯す時、雷電の上より襲ふ時、慄然として恐怖するを以て自らの運命とあきらめんとす。靈性的の道念に逍遙するものは、世界を世界大の物と認むることを知る。而して世界大の世界を以て甘心自足すべき住宅とは認めざるなり。世界大の世界を離れて大大大の實在(リアリチー)を現象世界以外に求むるにあらずんば止まざるなり。物質的英雄が明晃々たる利劍を揮つて狹少なる家屋の中に仇敵と接戰する間に、彼は大自在の妙機を懷にして無言坐するなり。

悲しき Limit は人間の四面に鐵壁を設けて、人間をして、或る卑野なる生涯を脫することを能はざらしむ。鵬の大を以てしても、同じくこの限(△)を破ること能はざるなり。而して蜩(せう)の小を以てしても、同じく限(△)に縛せらるゝを知らず欣然として自足するは憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界に處して快樂と幸福とに缺然たるところなしと自信するものは、淺薄なる樂天家なり。彼は狹少なる家屋の中に物質的論客と共に座を同くして泰平を歌はんとす。歌へ、汝が泰平の歌を。

然れども斯の如き狹屋の中には、味もなき「義務」雙翼を張りて極めて得意になるなり。剛健なる「意志」其の脚を失ひて幽靈に化するなり。譯もなき「利他主義」は莊嚴なる黃金佛

となりて禮拜せらるゝなり。「事業」といふ匠工は唯一の甚五郎になるなり。「快樂」といふ食卓は最良の哲學者になるなり。ペタントリーといふ巨人は屋根裏に突き上るほどの英雄になるなり。凡ての靈性的生命は此處を辭して去るべし。人間を悉く木石の偶像とならしむるに屈竟の社殿はこの狹屋なるべし。この狹屋の內には、菅公は失敗せる經世家、桃青は意氣地なき遁世家、馬琴は些々たる非寫實文人、西行は無慾の閑人となりて、白石の如き、山陽の如き、足利尊氏の如き、仰向すべきは是等の事業家の外なきに至らんこと必せり。

頭をもたげよ、而して視よ、而して求めよ、高遠なる虛想を以て、眞に廣濶なる家屋眞に快美なる境地、眞に雄大なる事業を視よ、而して求めよ、爾の Longing を空際に投げよ、空際より、爾が人間に爲すべきの天職を捉り來れ、嗚呼文士、何すれぞ局促として人生に相渉るを之れ求めむ。

——了——

18940

◀代表的名作選集第五編▶

大正三年十二月十二日印刷
大正三年十二月十五日發行　（定價金三十五錢）
大正六年二月八日九版

著作者　北村透谷　—遺族檢印—
發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町（長）八〇九番　電話番町八九九番　振替東京一七四二番

印刷所　東京市神田區宮本町五番地　三二八九　新潮社印刷部
（印刷者）高橋治一

名作選集 第四編

春

全二冊

島崎藤村作

『透谷選集』を讀んで、此の薄倖の天才の惱み多き内生活を見た人は、更に藤村の『春』を讀んで、具象化され客觀化された透谷の面影及び透谷を中心とせる『文學界』一派の若き人々の姿を見る事によつて、其の興味を二重にする事を得よう。

『春』が、明治文壇に一二を爭ふ名作なる事は今更云ふを俟たぬ。其の精練の極を盡した印象描寫の筆に高い藝術の匂を掬し、その若き日の夢と情熱とを描いた濕ひ豐かな文字に客觀化されたる一大抒情詩篇の情趣を味ふの外、文學界一派の零圍氣を描いたところに、文藝史的乃至思想史的の興味が多からうと思ふ。『春』の中に出て來る人物の中、主人公の岸本は藤村自身である。市川は平田禿木、菅は戸川秋骨、岡見は星野天知、足立は馬場孤蝶、福富は上田敏、而して青木は乃ち北村透谷で、青木の描寫は作者の最も力を用ゐたところ、其の苦悶、其の意氣、其の日常、而して其志を得ずして遂に自ら殺すに至るの經路は遺憾なく描けてゐる。本集と共に最もよく透谷を傳ふるものは實に『春』である。

逝ける文豪を記念すべき不朽の

漱石先生全全傑作の精粹此一巻に在り

金字塔

夏目漱石 傑作選集 色鳥

第四版 中版五百五十頁
五版賣切 特製箱入極美本 定價一圓三十錢 小包料金八錢

曾て如何なる集にも收められざる『倫敦消息』に始まり『我が輩は猫』『二百十日』以下、漱石先生が十數年間に亘れる全著作中より最も代表的なるものを選び、その短きは都べてを採り、長きは最も要所切所を含める部分をとりて其の前後を解說し、而して是れを歷史的に排列して以て一冊となす。堂々五百五十頁、漱石先生全傑作集と呼ぶ可し。匆忙の世の營みに携はりて先生が等身の著書を讀破するを難しとする人は、須らく本集に就け。國民的悼歌の間に逝ける我が文豪が藝術の精粹は、實に凝つて此の一巻に在る也。

トルストイ叢書

第一■我が宗教　生田長江譯□（三版）

第二■イワン・イリイッチの死　福士幸次郎譯□（再版）
（附）主人と下男——高架索の捕虜——

第三■幼年・少年　江馬修譯□（再版）

第四■ハヂ・ムラート　相馬御風譯□（新刊）

第五■闇の力（附）生ける屍　中村吉藏譯□（新刊）

第六■青年　江馬修譯□（近刊）

一冊中版約三百頁内外
總洋布美本——
一冊七十錢送料八錢宛

發賣
丁は落節に候
書之本有
東京
300

■各編皆増版

第十四編 ■明治詩歌選　詩壇六家作
▼若菜集及び落梅集（島崎藤村）▼天地有情（土井晩翠）▼東西南北（與謝野鐵幹）
▼暮笛集及び行く春（薄田泣菫）▼みだれ髪（與謝野晶子）▼春鳥集（蒲原有明）

第十五編 ■戀さめ　小栗風葉作
倉田官憲の誇む所となり發賣禁止の厄に遭へるもの、今蘇つて新裝世に出づ。兩性關係の描寫に最も長けたる風葉氏の代表作にして、文辭の豐麗は此篇實に其極致たり。

第十六編 ■別れた妻　近松秋江作
作者の文名を一時に高からしめたる『別れたる妻に送る手紙』にして、燈火の巷に媚を賣る女との纏綿の情を如實に描き、複雜なる男女愛情の眞髓を抉出し來るもの也。

第十七編 ■はつ姿　小杉天外作
日本に於て最も早く自然主義の傾向を示せるものとして、當時を騷がしたる名篇也。僧となる孽しき少年と寄席藝人の群に身を投ぜる薄名の美少女との悲しき戀を描く。

第十八編 ■お艶殺し　谷崎潤一郎作
爛熟し頽廢せる江戸末期の時勢粧を背景となし美貌無比の妖婦が戀の經緯を描く。飽迄も美しく飽迄も凄愴、草雙紙の色彩を近代的精神にて色揚げせるものとも見るべし。

第十九編 ■俳諧師　高濱虛子作
漱石氏が「女郎上りの細君の性格を書いて斯樣に活躍せるもの明治に在つて空前」と激稱せる名作。俳諧師十風夫婦を描くの傍ら著者の青年時代を點綴し事實上の興味饒也、

トルストイ叢書

一冊中版約三百頁内外
總洋布美本
一冊七十錢送料八錢宛

第一 ■我が宗教 生田長江譯 □（三版）

第二 ■イワン・イリイッチの死 福士幸次郎譯 □（再版）
（附）主人と下男——高架索の捕虜——

第三 ■幼年・少年 江馬修譯 □（再版）

第四 ■ハヂ・ムラート 相馬御風譯 □（新刊）

第五 ■闇の力 中村吉藏譯 □（新刊）
（附）生ける屍

第六 ■青年 江馬修譯 □（近刊）

發賣所は丁子屋書店に候 東京本郷 300

■代表的名作選集目

第一編 ■牛肉と馬鈴薯 國木田獨歩作
傑作『牛肉と馬鈴薯』の外、更に深刻なる運命觀を寓せる慾小說とも云ふ可き『女難』あり 附錄に『運命論者』、我文壇最初の肉『欺かざるの記』と題する戀愛日記を添ふ

第二編 ■坊つちやん 夏目漱石作
作者が出世作として當時の文壇を聳動せし傑作也。單純淡白なる一青年を中心として某田舍中學校の空氣を描く、機才縱橫、笑謔百出、子女讀んで尙ほ無盡の感興あらん。

第三編 ■蒲團 田山花袋作
わが邦の文學界に自然主義の勃興を記念す可き歷史的名篇也。中年の一文學者と、其の門弟なる美しき一少女との戀を描けるもの。就て其飽くまでも深刻なる描寫を見よ。

第四編 ■透谷選集 北村透谷作
「探れば探るほど種々なるものゝ出て來るのは北村透谷の短い生涯である」とは藤村氏の言也。明治文學の先驅者たりし我が透谷の散文、詩、評論等の選集はこゝに成れり。

第五編 第六編 ■春（上、下、二冊） 島崎藤村作
若き詩人の群と、その淸新芳醇の雰圍氣との中に、作者自らの炎の如き夢を描く。客觀化されたる一大詩篇にして、また實に本邦印象主義文學の代表的作品と稱せらる。

第七編 ■わが袖の記 高山樗牛作
■たけくらべ 樋口一葉作
『わが袖の記』は莊重典麗、高韻無比の一大抒情詩篇、附錄に『況後錄』『月夜の美觀』あり。『たけくらべ』は吉原の遊廓を背景として少年男女の悲哀を描ける一葉の代表作。

第八編 ■爛れ 德田秋聲作
秋聲氏の作中最も渾然の致を爲せるは本篇也。遊女上りの妾、淫蕩の紳士、其の姪の一少女等を中心として性慾生活の眞相を活寫し、その精到とその深刻と眞に獨特たり。

第九編 ■平凡 長谷川二葉亭作
少年の夢を描き、性慾の惱みを描き、功名の破れを描いて、「平凡」の反語に非凡の半生を寓す。技巧の絶倫なると、興味に富めるとは、以て『坊つちやん』に雁行すべし。

發賣所 東京 本書之有 丁は落丁に候 .300

■代表的名作選集目次■

第一編 ■牛肉と馬鈴薯■ 國木田獨歩作
傑作『牛肉と馬鈴薯』の外、更に深刻なる運命觀を寓せる『運命論者』、我文壇最初の肉慾小說とも云ふ可き『女難』あり 附錄に『欺かざるの記』と題する戀愛日記を添ふ

第二編 ■坊つちやん■ 夏目漱石作
作者が出世作として當時の文壇を聳動せし傑作也。單純淡白なる一青年を中心として某田舍中學校の空氣を描く。機才縱橫、笑謔百出、子女讀んで倘ほ無盡の感興あらん。

第三編 ■蒲團■ 田山花袋作
わが邦の文學界に自然主義の勃興を記念す可き歷史的名篇也。中年の一文學者と、其の門弟なる美しき一少女との戀を描けるもの。就て其飽くまでも深刻なる描寫を見よ。

第四編 ■透谷選集■ 北村透谷作
「探れば探るほど種々なるもの丶出て來るのは北村透谷の短い生涯である」とは藤村氏の言也。明治文學の先驅者たりし我が透谷の散文、詩、評論等の選集はこゝに成れり。

第五編 第六編 ■春■（上下、二冊） 島崎藤村作
若き詩人の群と、その淸新芳醇の雰圍氣との中に、作者自らの炎の如き夢を描く。客觀化されたる一大詩篇にして、また實に本邦印象主義文學の代表的作品と稱せらる。

第七編 ■わが袖の記 たけくらべ■ 高山樗牛作 樋口一葉作
『わが袖の記』は莊重典麗、高韻無比の一大抒情詩篇、附錄に『況後錄』『月夜の美觀』あり。『たけくらべ』は吉原の遊廓を背景として少年男女の悲哀を描ける一葉の代表作。

第八編 ■爛れ■ 德田秋聲作
秋聲氏の作中最も渾然の致を爲せるは本篇也。遊女上りの妾、淫蕩の紳士、其の姪の一少女等を中心として性慾生活の眞相を活寫し、その深刻と眞に獨特たり。

第九編 ■平凡■ 長谷川二葉亭作
少年の夢を描き、性慾の惱みを描き、功名の破れを描いて、「平凡」の反語に非凡の半生を寓す。技巧の絕倫なると、興味に富めるとは、以て『坊つちやん』に雁行すべし。

第十編 ■高野聖■ 泉鏡花作
作者自ら選して代表作と稱するもの。深山の奥、月明の夜、美女あり美僧あり、互に不思議を闘はすの一場を描きて、凄愴を極め絢爛を極む。最も藝術の香高き絕品也。

第十一編 ■何處へ■ 正宗白鳥作
自然主義藝術の傑作數多きが中に、此篇ほど深刻なるは非ず、戀に醉へず名に醉へず、世の總てに興味を失ひ、而も倘ほ何物かを求めて止まざる青年の惱みを描ける名篇。

第十二編 ■今戸心中■ 廣津柳浪作
戀を失へる一娼婦が、自棄の極、心にもあらぬ男と情死するの徑路を描く。凄艷の筆、深刻の想、所謂狹斜文學の粹にして、當年の文壇を風靡せるもの眞に偶然に非ざる也。

第十三編 ■恥溺■ 岩野泡鳴作
此の作出でゝ『恥溺』の二字、忽ち都鄙の流行語となれり。而も是れ尋常一樣の遊蕩小說にあらず、人間性のどん底を穿ちて一糸掩はざる赤裸々の姿を示し來れるもの也。

第三 ■幼年・少年■ 江馬修譯 □（再版）
（附）主人と下男——高架索の捕虜——

第四 ■ハヂ・ムラート■ 相馬御風譯 □（新刊）

第五 ■闇の力■ 中村吉藏譯 □（新刊）
（附）生ける屍

第六 ■青年■ 江馬修譯 □（近刊）

発賣品
第一候補
次に仕
越申可
正訂
御
丁は
落部
に候
書之
本有
東京堂
300

取揃へあり

第二十編 第廿一編 ■煙（上下二冊） 森田草平作

著者が其一切を犠牲として描ける苦悶の記錄にして、近代的戀愛の深底に蟠まれる痛切なる人間の惱みを看る可し。豐麗にして熱烈、深刻にして凄愴、實に文壇稀覯の名篇。

第廿二編 ■子規選集 花枕 正岡子規作

明治新文藝の革命家として最も華々しき功績を文壇に殘せる正岡子規がその文集中より小說・記行・小品・寫生文・和歌・俳句の各方面に於ける代表的傑作を蒐錄せるもの也。

第廿三編 ■そのゝ妹 武者小路實篤作

本篇の發表せらるゝや氏の非難者さへも尚ほ感嘆の聲を放たざるを得ざりし程のエポツク・メーキングの作也。就て人道主義的藝術の代表者たる武者小路氏の代表作を看よ

第廿四編 ■旅役者 長田幹彥作

「零落」「扇昇の話」二篇を收む。北海の曠野にさすらふ旅役者の群を描ける此作者の出世作。荒涼たる自然の裏に凋殘の人生を點じ、凄艷の色調を感傷の涙ににじめたり。

廿五編以下續々刊行すべし

名作選集は異常の大歡迎を受け其の多きは三十版少くも尚ほ十版を下らず全部の賣高既に三十餘萬部に達すまことに是れ我が出版界の新記錄也

■各編皆増版取揃へあり■

第十四編 ■明治詩歌選 詩壇六家作
▼若菜集及び落梅集（島崎藤村）▼天地有情（土井晩翠）▼東西南北（與謝野鐵幹）▼暮笛集及び行く春（薄田泣菫）▼みだれ髪（與謝野晶子）▼春鳥集（蒲原有明）

第十五編 ■戀ざめ 小栗風葉作
官て官憲の誅む所となり發賣禁止の厄に遭へるもの、今蘇つて新裝世に出づ。兩性關係の描寫に最も長けたる風葉氏の代表作にして、文辭の豐麗は此篇實に其極致たり。

第十六編 ■別れた妻 近松秋江作
作者の文名を一時に高からしめたる『別れたる妻に送る手紙』にして、燈火の巷に媚を賣る女との纏綿の情を如實に描き、複雜なる男女愛情の眞髓を抉出し來るもの也。

第十七編 ■はつ姿 小杉天外作
日本に於て最も早く自然主義の傾向を示せるものとして、當時を騒がしたる名篇也。僧となる關しき少年と寄席藝人の群に身を投ぜる薄名の美少女との悲しき戀を描く。

第十八編 ■お艶殺し 谷崎潤一郎作
爛熟し頽廢せる江戸末期の時勢粧を背景となし美貌無比の妖婦が戀の經緯を描く。飽迄も美しく飽迄も凄愴、草雙紙の色彩を近代的精神にて色揚げせるものとも見るべし。

第十九編 俳諧師 高濱虛子作
漱石氏が「女郎上りの細君の性格を書いて斯樣に活躍せるもの明治に在つて空前」と激稱せる名作。俳諧師十風夫婦を描くの傍ら著者の青年時代を點綴し事實上の興味饒也、

第二十編 第二十一編 ■煤煙（上下二冊） 森田草平作
著者が其一切を犧牲として描ける苦悶の記錄にして、近代的戀愛の深底に蟠まれる痛切なる人間の惱みを看る可し。豐麗にして熱烈、深刻にして凄愴、實に文壇稀覯の名篇。

第廿二編 ■子規選集 花枕 正岡子規作
明治新文藝の革命家として最も華々しき功績を文壇に殘せる正岡子規がその文集中より小說・記行・小品・寫生文・和歌・俳句の各方面に於ける代表的傑作を蒐錄せるもの也。

第廿三編 ■その妹 武者小路實篤作
本篇の發表せらるゝや氏の非難者さへも尚ほ感嘆の聲を放たざるを得ざりし程のエポツク・メーキングの作也。就て人道主義的藝術の代表者たる武者小路氏の代表作を看よ

第廿四編 ■旅役者 長田幹彥作
「零落」「扇昇の話」二篇を收む。北海の曠野にさすらふ旅役者の群を描ける此作者の出世作。荒涼たる自然の裏に凋殘の人生を點じ、凄艶の色調を感傷の淚ににじめたり。

廿五編以下續々刊行すべし

名作選集は異常の大歡迎を受け其の多きは三十版少くも尚ほ十版を下らず全部の賣高既に三十餘萬部に達すまことに是れ我が出版界の新記錄也

¥30